

令和元年度
被災地における方言の活性化支援事業報告書

発信！方言の魅力

**かだ
-語るびゃ・語るべし青森県の方言 2019-**

令和 2（2020）年 2 月

弘前学院大学文学部

今村かほる研究室

はじめに

東日本大震災からまもなく9年、文化庁の事業による東日本大震災の被災地方言に関する調査・研究、その後「方言の保存・継承」、「方言による地域活性化」をテーマとした活動を続けてきた。方言の「保存・継承」とは、一体いかなるものか、その先に求められている「地域の活性化」にどう貢献すれば良いのか、そこに方言研究者はどのように関わらなければならないのか、考え続けて今に至っている。

この活動を始めたときは、とにかく、被災地域の研究者としてなすべき事だと決心して始めた。時間が経過してなお、文化庁の事業目的である「方言の保存・継承」というテーマは本当に重いテーマであるが、共に歩む仲間、若い人達が年々、増えてきたことは、本当に心強いことである。

これまで行ってきた①被災地の言語の調査研究、②国語教育、③語りの会、④語り部ネットワークという大きな柱に加えて、今年度は新たな企画として「アイヌ語アイヌ文化と東北・東北方言」というシンポジウムを行うことができた。地域の皆さんの関心の高さも驚くほどであり、多様な言語・文化の保存・継承のための第一歩として、「知ること」の大切さを痛感した。大学の地域に対して果たす役割のひとつを実感した。

これまで被災地のみなさんとの活動の中で、「方言でこんなことをやりたい、こうするためにはどうしたらいいか」という地元の皆さんの方言に寄せる思いと向きあい、また同じ青森県に生活しながら、どのようにして被災地の役に立てるか決心がつかかねていた学生たちに向き合うことで、方言研究という「学問の力」を通して、被災地の役に立つような研究活動を続けて来た。この報告書は、そうした研究活動の代表者である今村と、志を共にし、強力に後押ししてくれる八戸工業大学：岩崎真梨子先生・夏坂光男氏、東奥義塾高校渋谷洋先生、弘前学院大学の今村ゼミの学生の活動の記録である。

さらに、榎谷伸夫氏・佐々木和子氏をはじめとする八戸童話会、南部昔コキアラバン隊、津軽：渋谷伯龍氏、千葉涼子氏、三橋光子氏、三戸：久慈瑛子氏、下北：越膳昌子氏、土佐そう子氏、南部昔コキアラバン隊のみなさん、岩手県釜石市の漁火の会のみなさん、八戸市立明治中学校のみなさん、八戸聖ウルスラ学院高等学校・佐々木香乃さん、北海道大学・北原次郎太先生、弘前学院大学・井上諭一先生とのご縁で結ばれてなし得た企画である。また、岩手大学の野真男先生はじめ小島聡子氏、竹田晃子氏、望月奈都子にも、多大なご助力をいただいた。みなさま方のご尽力に感謝申し上げます。さらに、演者の皆さんや私ども研究者にもメールを送ってくださる上野善道先生、杉本妙子先生にも心より感謝申し上げます。

青森県の方言の魅力を体験し、郷土の文化を継承していくきっかけをみなさんに提供できたこと、被災地八戸と釜石のみなさん、それを応援しようとする心と心が「方言で繋がる」ことができたことを、誇りに感じている。

弘前学院大学 文学部 今村かほる

目次

はじめに

1. 本事業の概要	5
2. 語り部ネットワーク情報交換会・体験講座	9
2.1 語り部ネットワーク情報交換会	10
2.2 研修会（体験講座）	
(1) 佐々木和子氏による講和と「舌切り雀」の語り	11
(2) 梶谷伸夫氏による「南部昔コ語り部養成講座」のワークショップ	23
(3) 南部昔コキャラバン隊による方言紙芝居	28
2.3 語り部活動情報	28
2.4 参加者アンケート	32
3. 「第7回南部弁の日 南部弁さみっと in 八戸2019」	36
3.1 たくさんの昔コを楽しみましょう	37
南部弁(下北)の紙芝居「天狗の管弦」 語り：越膳昌子	38
南部弁(八戸)の紙芝居「浦島太郎」 語り：金浜良子・下坪利都子	50
南部弁(八戸)の昔コ「フウフウ パタパタ」 語り：佐々木香乃	61
南部弁(八戸)の昔コ「避けられない年取り」 語り：田名部綾乃	62
南部弁(八戸)の昔コ「山の背比べ」 語り：中村洋子	63
津軽弁(弘前)の昔コ「娘ど面こ」 語り：千葉涼子	66
南部弁(八戸)の昔コ「殿様どそばはっと」 語り：梶谷伸夫	68
南部弁(八戸)の方言劇「サルどカニの話」 八戸市立明治中学校1年生	69
3.2 「南部弁さみっと in 八戸2019」	74
南部弁(八戸)の昔コ「ソローリ、ソロリの話っこ」 語り：上條佳子	75
南部弁(種市)の昔コ「どんつぐ」 語り：大柳悦子	77
南部弁(八戸)の昔コ「ねずみ穴に入った爺様」 語り：木下勝貴	79
津軽弁(津軽)の昔コ「おしら様のはなし」 語り：三橋光子	83
南部弁(三戸)の昔コ「狐のほっ腹焼き」 語り：久慈瑛子	86
津軽弁の講話「わらはんどさ あずましまちコのごすべし」 渋谷伯龍	88
南部弁(五戸)の昔コ「幸せな爺さま」 語り：佐々木和子	89
南部弁(五戸)の昔コ「正部家先生のおはこ」 語り：佐々木和子	91
3.3 来場者アンケート	92

4.	弘前学院大学シンポジウム	
	「アイヌ語・アイヌ文化と東北・東北方言」	100
4.1	趣旨説明 「危機言語としてのアイヌ語」	
	弘前学院大学・文学部 今村かほる	102
4.2	基調講演「アイヌ語とアイヌ文化」	
	北海道大学アイヌ・先住民研究センター 北原次郎太氏	104
4.3	報告1 「日本マンガ史における『ゴールデンカムイ』の位置」	
	弘前学院大学・文学部 井上諭一氏	110
4.4	報告2 「蝦夷語地名と菅江真澄」	
	岩手大学・教育学部 大野眞男氏	113
4.5	質疑応答	125
4.6	来場者アンケート	129
5.	南部弁サミット in 釜石	136

おわりに

1. 本事業の概要

今村かほる

1.1 これまでの経緯

東日本大震災における被災地域の方言の消滅の危機状況について、2011（平成 23）年度文化庁委託事業報告書「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する予備調査研究」において、東北大学が調査し報告をしたことに続き、2012（平成 24）年度に青森県（弘前学院大学）・岩手県（岩手大学）・宮城県（東北大学）・福島県（福島大学）・茨城県（茨城大学）の 5 県 5 大学により、被災地方言の実態把握と記録に着手した。青森県では、特に青森県の被災地域の方言の記録を開始するとともに、被災地域や避難地域で生じている方言を取り巻く現状について把握することを目指した。

2013（平成 25）年度からは「方言の保存・継承」という新たな段階へと進み、各県・地域ごとに特色のある研究活動が行われるようになった。青森県では、地域の方言の語りの活動が盛んであり、そのみなさんと共に歩調を合わせ、大学が関わることの意義として学問の力によって方言の魅力を発信していく取り組みを開始した。2019（令和元）年度の取り組みは、以下のとおりである。

1.2 業務題目

発信！方言の魅力　かだるびゃ・かだるべし青森県の方言 2019

1.3 業務の目的

明治以来、進められてきた方言撲滅・矯正、標準語化の教育政策により、当該地域を含む東北各地は、方言に価値が見いだせないばかりか、トラウマやスティグマにさえ感じており、いわば方言の価値の地盤沈下が起こっている。また、過疎化・高齢化という社会変化も進んでおり、東日本大震災が発生するよりも前から東北方言は衰退していたことが、2012（平成 24）年度からの文化庁委託事業による危機言語調査（青森県・岩手県・宮城県・福島県・茨城県）により明らかになっている。

今年度は、被災地域住民の声や被災自治体からの声に直接、応えた企画を実施する他、方言資料の調査・研究を開始する。また、方言の保存・継承、方言による地域活性化のために、方言の主体としての地域住民の力を最大限に活用し、また研究者による支援を基盤として、以下の目的を掲げて実施した。

- ①本事業で組織した、県内各地で方言の読み聞かせや語りなどを通して方言の継承活動をしている団体や個人の「語り部ネットワーク」の活動を支援し、相互協力・学び合いの場を提供する
- ②文化としての方言を継承するための教育活動を支援する
- ③南部弁を中心として、方言を身近に感じ、生活語としての活力を感じる
- ④方言による地域活性化に資する

また、この事業に参加した学生たちも、地域住民のみなさんと活動することで地域理解や文化継承への興味関心が高まり、地域の人材育成・世代を越えた交流という効果ももたらしめていることから、今年度も「学問の力」による地域貢献を目指した活動を目指した。

1.4 活動の記録

(1) 青森県語り部ネットワーク会議と研修会の開催 11月3日(日)

2015(平成27)年度に、本事業により教育委員会・図書館・公民館の団体等からの紹介や情報検索により、方言を中心とした読み聞かせや語りの活動を行っている団体やサークルなどに関する情報についてアンケート調査を実施し、語り部同士の相互連絡組織として、語り部ネットワークを構築した。その後、着実に成果を上げ、活動の情報交換や研修会を継続してきた。また、会員同士の交流が盛んに行われ、それぞれの語りの会などに出演しあう機会が増えている。

今年度は11月3日(祝)に、青森県総合社会教育センターにおいて、お互いの活動に関する得情報交換を行うネットワーク会議情報交換会と研修会を継続開催した。ただ、今年度は、事業開始が遅れ、会場が確保できる日にちが限られたため、ちょうどそれぞれの団体の語りの会の日とぶつかり、参加者・参加団体が限られたことが惜しまれる。参加者数は22名であった。

今年度の研修会は、①本会副会長である佐々木和子氏の講話と語り、②本会会長・柗谷伸夫氏による「南部昔コ語り部養成講座の実践報告と南部昔コ体験講座」、③「南部昔コキヤラバン隊」による方言紙芝居「浦島太郎」の実演を行った。

これらを通して、方言の保存・継承に対する問題意識や意義を持って活動に望めるようにした。この取り組みを通して、以下の「南部弁の日」や地域の国語教育現場の「方言研究授業」等にも語り部活動の協力要請し、方言の記述や保存自体が遅れている南部弁の保存・継承を図るとともに、語り部相互がつながることで、活動の幅を拡げ、組織化されていくことを奨励した。

なお、昨年度までのこの活動の成果を活かし、2019年6月開催の実践方言研究会(於：甲南大学)において、昨年度の研究協力者である庭田瑞穂先生と「小学校における方言学習の改善に向けて―教科書教材での学習から生きたことばで学ぶ学習への転換―」と題して発表した。

さらに、2月15日(土)には、副会長の佐々木和子氏が地元五戸中学校の立志式において、講演を行った。

(2) 第7回「南部弁の日」昼の部：たくさんの昔コを楽しみましょう

夜の部：南部弁さみっと in 八戸の開催 12月7日(土)

12月7日(土)の南部弁の日に、八戸市ポータルミュージアム「はっち」にて、第7回「南部弁の日」昼の部：「たくさんの昔コを楽しみましょう」、夜の部：「南部弁さみっと in 八戸」を開催した。7回目を迎え、地域の人々の反響が大きく、地域興しの一環としての方言の活用を期待されている「南部弁の日」を、今年度も開催した。被災地域の住民から

の開催の要望が多く、「方言で被災者を勇気付け・元気付ける」企画として取り組んだ。住民の他の地域の南部弁や津軽弁とも聞き比べてみたいという要望によって、岩手県の南部弁（釜石方言）と津軽方言との聞き比べ企画を実施してきた。今年度も釜石の「漁火の会」を招き、それを継続するとともに、隣接する岩手県洋野町種差の語り部を招き、聞き比べた。また、昼の部は、方言の次世代継承のための取り組みとして、地元南部地域の住民の中で語り部を目指す人たちや、八戸市立明治中学校の生徒による方言劇や、八戸聖ウルスラ高等学校の生徒の語りなど、地域の方々の発表の場となる工夫をした。夜の部では、語り部たちの語りの他、新企画として、NHKの人気番組でもある「お国ことばで川柳」の選者でもあり、青森県の方言研究者として高名な渋谷伯龍氏を招き、「わらはんどさ あずましまちコ のごすべし」と題した講話を行った。参加者アンケートでも、昼夜ともに好評であった。参加者数は昼の部：120名、夜の部：80名であった。

（3）シンポジウム「アイヌ語・アイヌ文化と東北・東北方言」の開催 1月11日（土）

2020（令和2）年1月11日（土）13：00～15：30に、弘前学院大学礼拝堂にて、弘前学院大学日本語・日本文学科主催のシンポジウム「アイヌ語・アイヌ文化と東北・東北方言」を本事業と共催で行った。他に弘前学院大学国語・国文学会、地域総合文化研究所が共催し、青森県教育委員会・弘前市教育委員会の後援をいただいた。参加数は187名であった。東北にはアイヌ語の地名があるが、アイヌ語やアイヌの文化と東北方言や東北という地域は、どのような共通性や関わりを持っているのか、よく理解されているとは言えない。また、アイヌ語は、ユネスコが2009年に発表した世界の消滅の危機にある言語約2,500の中で、【極めて深刻】と位置づけられており、保存と継承の努力が続けられていることを学んだ。その取り組みについて、今村から趣旨説明と解説を行った。その後、3人の先生方にお話しいただいた。

基調講演「アイヌ語とアイヌ文化」

北海道大学 アイヌ・先住民研究センター准教授 北原次郎太氏
報告1「日本マンガ史における『ゴールデンカムイ』の位置」

弘前学院大学文学部長 井上諭一氏
報告2「蝦夷語地名と菅江真澄」
岩手大学教育学部教授 大野眞男氏

全体討論では、「多様性」について話し合うことができた。地域の方々の関心の高さが、質問の多さにも、今後の継続開催を望むアンケートの多さにも現れていた。

（4）南部弁サミット in 釜石の開催 1月25日（土）

「おらほ弁でかだっぺし」（事務局：岩手大学）と共催した「南部弁さみっと in 釜石」イベントを、1月25日（土）14：00～16：30に釜石市民ホールテットにおいて実施した。今年度も、地域方言を使用する社会的場面を確実に次世代に残すため、方言が継承される培地として昔話等の口承的伝承を語る活動に継続して注目した。岩手で地域の昔話を語る団体（釜石市「漁火の会」等）の活動を支援するとともに、青森県の語り部との連携交流活動についても支援し、地域の言語文化活動の活性化を図った。

開催地との交渉は岩手大学を中心に進め、企画・運営を共同で行った。方言によって被災者を勇気づけ・元気づける活性化支援とした。参加者数は、90名であった。

また、(1)～(3)の事業に参加した学生たちも、地域住民のみなさんと活動することで地域理解や文化継承への興味関心が高まり、地域の人材育成・世代を越えた交流という効果ももたらしていることから、今年度も「学問の力」による地域貢献の活動となった。

1.5 事業の実施体制

責任者・研究代表者 今村かほる（弘前学院大学文学部日本語・日本文学科教授）
副責任者 岩崎真梨子（八戸工業大学基礎教育研究センター・システム情報工学科講師）
研究協力者 夏坂光男（八戸工業大学職員）
渋谷 洋（東奥義塾高等学校教諭）
弘前学院大学・文学部学生（今村研究室）

1.6 研究体制

今村かほる：研究統括
青森県語り部ネットワーク会議・研修会企画運営・第7回南部弁の日
企画運営・南部弁さみっと in 釜石運営・報告書作成
岩崎真梨子：青森県語り部活動ネットワーク会議研修会、南部弁の日運営
夏坂 光男：南部弁の日運営
渋谷 洋：青森県語り部ネットワーク会議研修会運営・南部弁の日運営
弘前学院大学文学部学生：
【語り部ネットワーク】佐藤妙香・今井信喜・奥崎愛・土田悠莉・三浦愛純
・三浦里紗
【南部弁の日】伊藤茂・長内宏樹・嘉瀬公希・白川堅介・富岡穂乃花・村田春華
・村田有・盛はなの・八木澤淳・鰐田勇斗
【シンポジウム】三上拓人・川越里美・下山あり紗・田畑七海・内藤望
・鳴海佳帆・鳴海麗香・濱田美欧・藤田優希・蔡豪

2. 語り部ネットワーク情報交換会・体験講座

2. 語り部ネットワーク情報交換会・体験講座

青森県内には、津軽弁・南部弁の昔話の語りや読み聞かせ、紙芝居などの活動をしている団体や個人の方が多くいらっしゃる。そのような、方言に関わる活動をしている方々から、方言を継承していくために、きちんとした知識を得たい、他の団体がどのような活動をしているのか情報を交換したい、というご希望が寄せられた。そこで、弘前学院大学では2015年4月12日に語り部ネットワークを立ち上げた。

今年度は、2019年11月3日(日)、青森県総合社会教育センターにて、「発信！方言の魅力 かだるびゃ・かだるべし青森県の方言 2019」を開催した。今年度の内容は、語り部情報交換会、南部弁の昔話の語りと体験講座型のワークショップ、南部弁を用いた自作紙芝居の披露であった。方言話者たちによる交流によって、さらなる青森県の方言文化の発展へと繋げていくことを目的としている。

次第

○語り部ネットワーク情報交換会 10:00～12:00

趣旨説明とご挨拶 弘前学院大学 今村かほる

参加団体・個人による活動報告

○研修会（体験講座） 13:00～15:00

佐々木和子氏による講話と「舌切り雀」の語り

榎谷伸夫氏による「南部昔コ語り部養成講座」のワークショップ

南部昔コキャラバン隊による方言紙芝居

○全体会 15:00～15:30

2.1 語り部ネットワーク情報交換会

まず、この会議の始めに、今村かほるによる語り部ネットワーク立ち上げからの経緯とこれまでの会の歩みについて説明があった。「青森県の方言」についてのガイダンスも行われ、青森県の方言の区画や全国の危機言語、それらに関する事業についての説明もあった。

情報交換会では、語り部の皆さんから普段はどのような場を中心に、どのような手段で、誰に向けて活動をしているのか等を発表し合った。

青森県の昔こを語ったり、方言を使った紙芝居を披露したり、個人・団体で様々な活動をしている。その中で、小学生から「方言だと何を言っているのか分からない」と言われたり、聞き手が飽きてしまったり、という問題が生じる時があるので、工夫を凝らした内容で方言を語っている。皆さんそれぞれで活動の形は異なっていたが、方言を大切にしている気持ちは強く、それを継承していきたいという思いが伝わってきて、とても価値のある時間となった。



2.2 研修会（体験講座）

(1) 佐々木和子氏による講話と「舌切り雀」の語り

語り手の育成の一環として、本会副会長の佐々木和子氏に講話と語りをして頂いた。まず最初に、日本民俗学者の柳田國男の弟子であった、五戸町出身の能田多代子の作品集から「舌切り雀」の語りを披露して頂いた。話の中に出てきた前掛けの実物を持ってきて見せていただき、耳からだけでなく目からも情報を得ることができた。そして、佐々木氏が語り手としてどのようにして今に至るのか、過去の体験をお話して頂いた。若い頃から語りをやっていて、長く続けられているという点で一番大事なことは、語り手本人の「好き」という気持ち、興味をもってやることだと語った。



以下は、佐々木氏の講話と語りを文字化したものである。校閲はご本人による。

- | | |
|-----------------------|---------------|
| ・ 〈 〉 …分りにくい単語の共通語の意味 | ・ 《 》…佐々木氏の動作 |
| ・ () は内容を補った。 | |

みなさんこんにちは。今日は車で来ることになってしまったので、しわにならない着物を着てこようかなって思ったんですけども、琉球が大変なことになりました⁽¹⁾、それで今日は、琉球頑張れという意味で、琉球紬を着てきました。

まず最初に、ほんとはですね、自分で原稿書いているときに、いつも、昔話をやってる皆さん方の前で、お話するのは緊張しますって言おうと思ったんですけど、眺めましたら、なんかいつもの知ってる顔で、ちっとも緊張しないような気がしてきました。でも最初に、昔語りをやれば、緊張がほぐれますので、今日は最初に五戸出身で柳田國男⁽²⁾さんの五本の指に入るお弟子さんだった、能田多代子⁽³⁾さんっていう方の集めた本、『手つきり姉さま』⁽⁴⁾その中に入っております、「舌切り雀」の話をしてします。みなさん今日お渡ししましたけども、それを見ないで、聞いていただきたいと思いますので、私も見ないでやりますので、あ間違った、とかってね、思われないように見ないで聞いてください。

「舌切り雀」

むが一し、あつたんずおん。爺^{じじ}ど婆^{ばば}どあたずおな。爺^じア山さ薪木とりに行つたんず。したつきア、雀^{すずめ}っこア一匹いだずおん。それよ捕て、家さ戻つてきたずおな。「婆^{ばば}へ婆^{ばば}へ、雀^{すずめ}っこ捕つてきたでア」って言って、なんもかもめごがっていたんず。ある日、爺^じはまた山さ行つていねエうぢね、雀^{すずめ}、婆^{ばば}の糊替^{かきか}っこする糊^かっこよ、みーんな飲んでしまったんず。婆^{ばば}、ふんどく、肝焼いで、「いやいやこの腐れ雀^{すずめ}これア」ってへって 〈とって〉、缺^かっこ持っ

てきて、ちょきんと舌っこ切って飛ばしてやっただおん。

爺は山から戻ってきて、その話を聞いて、なんもかも悔しがって、いやいや罪作りだことしたもんだ一って言って、雀っこよたねねに、山のほさ行っただおん。そやって、

すーずめどーな 雀どーな

お宿こァ どーごでーごんぜァ

って呼ばりながら、村のはずれっこの方さ行っただ。行っただっきゃ行っただっきゃ、笹原あって、雀んどァえっぺァーいたず。爺はいちだんと声高くして、

すーずめどーな 雀どーな

お宿っこァ どーごんでーごんぜァ

って呼ばたずおん。したっきゃ、

さーさわらーのー

かーげでごんぜァ ちゅんちゅん

って雀ァ泣いたずおな。爺は喜んで笹原の蔭こさ行ってみだっきゃ、爺のあずがった雀こァ綺麗だ前ぶりっこ〈前掛け〉当でで〈かけて〉出はてきて、「爺様爺様、よぐおん出アッタごど、さあさ、おはいられ」と言っって、いっぺごちそうしたず。まんず金のお膳こさ、金のお椀っこ、金の箸っこついで御馳走しただすけァ、爺はおもしろくて一杯よばれで、「雀っこェ雀っこェ、まだ来るすけはァ戻るァね」って言っただおん。したっきゃ雀っこ、「爺様爺様、お土産に葛籠上げるどもねァす、軽い葛籠ほしがえ、重でェ葛籠欲しがえ」て聞いたずおん。爺ァ「吾ァは年取ってるだへで、軽い葛籠っこ呉ろ」って言っって、軽い葛籠っこもらって、雀っこに見送りされできたずおな。家さ戻ってから、もらってきた葛籠下ろして、開げでみだっきゃ、中さ小袖だの銭だのって宝物がずっぱど入っただだずおん。爺は雀のお蔭だてへで、よろこんだずば、婆も羨ましくなたずおな。婆舌切て飛ばしてやっただことば忘れで、おらも雀このどごさ行っただくるべってへで、宿っこたねね〈尋ねる〉行っただおん。そやって、

雀どな 雀どな

お宿こァ どーごでごんぜァ

って呼ばりながら、村の端れっこの方に行っただ。したっきゃ雀っこ、「笹原のかげでごんぜァちゅんちゅん」鳴ぎながらではてきて、婆よ雀の家さ連でいっただ。そやって雀、婆ねば、猫の膳ね猫の椀、猫の箸をつけて、粟飯さ干菜汁で食へだずおん。婆が戻ると言っただっきゃ、「婆様婆様、お土産に葛籠あげるとごねすァ、軽い葛籠ほしかえ、重でェ葛籠欲しかえて聞いたずば、婆欲たげで〈欲深いので〉、「吾ァ重でァ葛籠ほしやね」て言っって、婆重でェ葛籠もらって、そて〈背負う〉来たずおん。爺ァ軽いのもらってもあっただね良いもの入っただのに、こったらね重でェのさだば、どったら良いの入っただなて背負てきたず。途中まで来たっきゃ、重だくてしかたなエだし、ヘィば見たくなっただしけゃ、下ろして開げでみだずおん。したっきゃ、中さ、化物だの、蛇だのなんだのって、汚いものばりずっぱどはいっただだだずィ。余り婆、よぐばって人まねしたんだへで、おおみず喰らっただずィ。へで、人まねするもんでねえずエ。どっとはれエ。

まず内容から、いきたいと思います。みなさん、今度はこれ（「舌切り雀」の資料）を見てください。私は近頃、年齢のいった人に話す機会が多くなりまして、特に話す機会が多いのは、女の人たちなんです。女の人たちがいっぱい来ているところで、こういう婆様の話をするのは、とても気が引けるものですから、私はこういう話をするようにしています。これは婆様と爺様、どっちが悪いんでしょう。そうすればやっぱり、婆様、て思いますよね？いやこれは爺様が悪いんです。普通、昔話っていうのは、こちらの良いお爺さんとお婆さん、隣の欲たかりなお爺さんとお婆さんって出てくるのが普通のパターンなんですけど、この舌切り雀は、一軒のうちにこういうお爺さんとお婆さんが住んで、しかも二人は、夫婦っていうのは、ちょっと変わっていると思うんです。だからこれは今はやりの言葉で言えば、家庭内別居。その家庭内別居になる原因が爺様にあつてですね、たった一言で語られているんです。みなさん見てください。2行目に、「なもかもめごがっていたずォん」そのなもかもめごがる（可愛がる）対象を婆様以外に求めた、この爺様が悪かったわけです。これが家庭内別居の原因。

私、うちの主人の両親の面倒も見てきました。うちのおばあさん 85（才）過ぎてから私にこう言いました。「爺様、おらのこと好きでなぐなった」え？って思うんですよね。「好きでなぐなったみたい。だんで（だから）もっと早くしゃべってければ（言ってくれば）、おらもどうがなったのに（どうにかしたのに）」だから、いやこれね、そう考えるお婆さんが悪いんじゃないんですよ。爺様に声をかけてもらいたかったんだと思うんですよ。だからこれはね、爺様悪いの。

今度はね、3行目を見てください。「糊替アこすィ糊こ皆飲んでしまったずォん」糊替っこする糊っこってどつたら（どういう）糊っこだがつて言えばですね、ご飯炊くときに鏝窯（腰に鏝がある窯）で炊いたりすれば、ぷくぷくってこう、すーっと糊っこ出てきますよね。あれが糊替っこする糊っこなんです。大事ななんぼもとれない糊っこですよ。それを、毎日、こうすつと取っては、溜めてるわけですよ。そしてその、大事な、糊替っこす糊っこっていうのはですね、五戸では、糊碗っていうのがあって、糊桶おけっこね、この、糊桶おけっこっていうのは、ご飯を炊くとき出来る、糊を入れる桶のことだそうなんです。で糊をつけるものが多いと、近所へ、「糊っこないがねー」ってもらいに行ったそうです。でこの糊もらいっていうのは、朝の仕事で、その糊桶おけっこを持って娘たちが「糊っこないがい」といって、近所の家々をめぐり、ある家からもらって、衣服へつける、これが、糊替っこする糊っこだそうなんです。こんな大事な糊っこ、まあ爺様にめんごがられてるがど思っている気になって飲んでしまったわけですよえ。

次にですね、私、今、調子っぱずれだけでも、「すーずめどーな 雀どーな」って歌いました。この、節を聞くときに、私、能田多代子さんの、姪っ子さんのところに行って、「この節知らない？」って聞いてきたんですよね、そしたら、なんか昔、盛岡のラジオ放送で、能田多代子さんの昔話を流してたそうです。その時に語った人が、能田多代子さんの親戚関係の人が語ったらしいんです。だから、たしか、こういうふうに歌ったよって言うのを、聞いてから、私は皆さんに話すようになりました。で、この歌を、書いてる字を見て

ください。平仮名と漢字、カタカナ、混ぜてますよね。これは、柳田國男さんたちの、採集する、採集の仕方があったんだそうです。こういう時はこう書くっていうの、これ、後でいろいろ知ったんですけどもね。だから私はそういうの知らなかったんですけども、昔話教室なんかでは、ひらがなで書いてるところは、ひらがなで音を出してください、漢字で書いてるところは、漢字で音を出してくださいって、なんだかわけわかんないことを言うんですけどもね、これ感覚です。だから、「すーずめどーな 雀どーな」って自分なりにね、漢字で言ったり、ひらがなで言ってるつもりなんです。だから、婆様が尋ねて行く時は、漢字で訪ねて行ってますよね。ひらがなっていうのは柔らかくて、こう、なんとも、優しい思いが入ってます。だからその違いを私は「すんずめどんなっ、すんずめどんなっ」ってやっていますけれども、その、最初の方の、「雀どーな」っていうところは、これはちゃんと、能田多代子さんの姪っ子さんから聞いてきて、言っています。

それから、歌が終わったところでですね、爺様が尋ねで行ったら「爺様のあずがった雀こゝ綺麗だ前ぶりこ当で出はて来て」前ぶりっこっていうのは、前掛けのことです。でも、綺麗だ前ぶりっこっていうのは、ただの、前掛けではないんですよ。それがですね、持ってきました重い思いして。これです。《持参した前掛けを着用して見せて》「三幅前掛け」って言います。五戸地方はですね、菱刺し、これこうしてね、こうやるんですよ。で、昔は、着物をいっぱい持ってお嫁さんに行けなかったわけです。そんな時にお嫁さんに行く前に、こういう前掛けを三枚ぐらい、作って、持って行って、お祭りとかの、晴れの場の時に、着物はぼろでも、これは、綺麗ですから、その時に使ったんですよ。日本にはですね、三大刺繍っていうのがあって、津軽のこぎん、これこぎんです、素晴らしいですよ。今日、いらしてる三橋さんから作っていただきました。なんだかんだ文句いっぱいしゃべって。これが、南部の菱刺し、であと一つは、庄内の庄内刺し子っていうのがあるんです。これはですね、東北の三大刺繍じゃないんですよ。日本の、三大刺し子ですよ。日本の三大刺し子、それが青森県に二つあるんです。

アミューズミュージアム^⑤っていうのが、浅草にあって、三月までで今はないんですけど、アミューズミュージアムっていうのがあったんですよ。で、うちの娘たちが「東京ハイジ」っていう名前で、アミューズっていうプロダクションに入ってるんですよ。その関係で、アミューズミュージアムに連れてってもらったんですよ、マネージャーの人に。そしたら、ここのアミューズっていうプロダクションはですね、福山雅治だとか、サザンオールスターズだとか、それから、星野源とか、そういう人たちがいる、儲かっているところだと思いますよー。だからね、(青森出身の) 会長さんにうちの娘が会った時には、オーラが出て言葉が出てこなかったって。でも名刺もらってきたって言って、見せてくれました。それをお母さんに頂戴してもらってきた名刺です。アミューズミュージアムに行きましたら、この《五戸の民具、「ばおり」を取り出してかぶる》、これあの五戸ですよ、五戸、これがね、何回も言いますが、五戸、「ばおり」っていうんですけども、これをね、かぶった、マネキンがね、十体ぐらいずらっとあったんですよ。私びっくりしました。何でここに五戸があるの、と思ったんですよ。そうしたら、黒澤明監督が「夢」っていう映画を撮った時に、その田中忠三郎^⑥さんっていう民俗学やってる方、その人に頼んで

集めてもらったそうです。三幅前掛けは今ほとんどないそうです五戸には。これは、新しく作ったんですけどね。これは「ばおり」って言うんですけど、私二つ持っています。というのは、こっち私作った方、こっちはね、先生が作ったんです。何が違うか、すごくおっきく違うんです。《先生が作った「ばおり」を指して》これがですね、ほら、しゅっとなってるでしょ、これがね、若い人が被るの、顔が見えるように。《自分が作った「ばおり」を指して》こっちはねこの段が少ないでしょ、こっちはね私みたいな年寄りがかぶります。

そして、そのアミューズミュージアムを出るときに、その人に、田中忠三郎さんの本の^のをいただいたんです。私それまで田中忠三郎さんの本を、見たことがなかったんですけども、それを読んで感動しました、それでぜひ、皆さんに一ページだけですけども、紹介したいと思うんです。南部の菱刺しについて、書いているんですけども、私、すごい感動したのがあれば、すぐこう朗読したくなるんですよ。で、うちの娘のところに、この本もらってきたんだけど素晴らしい、聞いてちょうだい、って言って私が、「暗く、貧しい生活の中でも、女として美しくありたい」読んだら、娘に言われたんですよ、「お母さん、標準語が訛ってるよ、自分で気が付かないでしょ」って言われて、あ、だったら標準語のところを、訛って言えばいいんだと思ったんですよ。それで、調べましたら、田中忠三郎さんっていう方が、津軽の方でしたら私読めません。ところが、下北の人だったんですよ。これは私に読めと言ってるもんだと思ひましてですね、私は、下北の方の生まれなんです。大畑、むつの上ですね、むつ市に今なってますけど、そこに、小学校四年生までいて、で、こっちに來たんですけどもね、そういう関係で、私は訛って下北弁で読みます。聞いてください。

民具をもとめる旅の途中、あるお婆さんがこんな話を聞いた。

でどごで泣くと、「おなごはでどごで泣くものではないわ」と、姑から言われ、夜寝どごで泣くと、「うるさい」と、夫がおごる。我慢しろと言われるばかりで、女には泣く場所すらなかった。現金収入の少ない当時、特に山間部に住む人々は、衣食住すべて自給自足の生活をよぎなくされていた。人々がどうにか身にまとっていた衣服のようなものから現代の衣服にいたるまで、道のりは長かった。普段着、労働着、晴れ着と、多様な衣服が、さまざまな材料で作られてきた。衣服作りは、婦女子にとって日中の激しい労働を終えてから、睡魔と格闘しながら行う夜なべ仕事であった。厳寒の冬、板の間に座って、針仕事をする主婦は、家族の者だちが皆寝静まった後、^{あど}囲炉裏の残り火をかぎわげ、その、^{あが}明るさと、僅かな暖で作業した。素肌のかだ膝の上での、麻の繊維をいどによる仕事は、べんごに苦痛を絶する苦痛を伴い、感覚の全く失われた、冷え切った膝を、道具として使ったという。

木綿の衣服はやわらかぐ、あだたかい。藩政時代から禁制がとがれだ明治に入っても、木綿のふぐはながなが手に入らず、貴重品として扱われ、この布を継ぎ足して、胴着とする程度であった。寒冷地帯には、何年がおぎで凶作がやってくる。半島大小の地主等による圧制、自然、風土どのただがいは、まさに、いぎ地獄絵図そのまま

あったのではないかと想像される。このような、食もおぼつかない状況の中でも、婦女子にとって、衣はかがせないものであった。いち枚の麻布が、多難な作業の末に出来上がる。それを紺に染め、麻布の粗い目を、木綿糸で刺し縫いすることは、包含、保温、補強の用便だけでなく、女として、美しくありたいという、願いがあり、だから、こぎん、菱刺しの模様を作り出してきた。

暗ぐ、貧しい青森と言われた地で、何故、豪華で緻密なこぎんや、色鮮やかな菱刺しが生まれただろう。そこには、自然とともに暮らした人々の、英知があり、四季折々の風土のながで、素直に生きだ証がある。南部の菱刺しは、樹皮衣、麻布衣がらの数千年の衣服の歴史の中で、最後の麻布衣として、大正末期にある、乾燥のかだすみで、その火を消してしまった。だからこそ、いち枚の菱刺しの、三幅前掛けに、当時の婦女子の衣に対する、業とも、執念とも言うべきものを、私は感じるのである。女の、哀歎と歓喜を語り伝えるものであろう。

という、文章がのっているんです。素晴らしいと思って、読みました。

それから、次にですねこの、最後のところに「大水くらったずエ」っていう所があるんですよ。なんでごごさ、大水。大水くらうってのは大変ですよ。この前も、災害でいっぱい大水くらってましたけれども。これがですね、川が氾濫する地帯の、昔話の最後に出てくるそうです。大水くらうってのは大変なことだから、大変な目にあっただってっていうのを、「大水くらったずエ」って言うんだそうです。ところがですね、私、すごい気になったのは、「へで、人まねするもんでなエズエ」なんでここに「へで」が出てくるんだろう。と思ったんですよ。そうしましたらこの、能田多代子さんの昔話に、池の中にじゃぶんと落ちて水くらって溺れてしまった。これが、人まねすると、大水くらるといふことの、始まりだそうだ。というのが出てくるんですよ。だから、人まねしたから、「大水くらったずエ」って出てきたんだなあと思ったんです。

うちの主人のですね、姉が亡くなった時に、お葬式が終わって場所を変えて法事をやりました。そうしましたら、和尚さん呼ぶの忘れたってその息子が言ったんですよ。だから食後、私が、五戸出身のお姉さんに五戸の昔話聞かせたことがなかったから私に、和尚さんのお経の代わりに五戸の昔話あげさせてください。と、皆さんの許可をいただいて「舌切り雀」これやったんです。みんな、ちょっと気持ちこよくなったんでないかなと思うんだけど、終わりましたら、「はい」って、手を挙げた方がいたんです。「質問です。」そしたらね、空気が、緊張したんです。というのは、そう言った人はただの人でなかったんです。モラロジー研究所っていうので、心についての講演をして歩いてる方だったんです。その方が手を挙げて、「なんで舌を切られた人が喋れるんですか」って言ってきたんですよ。それで、私がですね、「わあ、とってもいいことを言ってくれました。昔話の世界っていうのは不思議なことが当たり前の世界なんです。それに、おじいさんが”雀どーな”って訪ねて行ったときにそれに答えてほしいと思いませんか？聞いてる人は答えてほしいって思うでしょ、その思う気持ちが、舌を切られた雀に言葉を発せさせるんです」って言ったんです。そしたら「プラス思考の考え素晴らしいです」って言ったんですよ。私、昔話を語る人

はみんなプラス思考で素晴らしい人ばっかしだと思ってます。私は、五戸に住んだのは、うちの今 51 歳になる長女が、小学校二年生の時からだったんです。その前は八戸でした。八戸にいても私は 19 歳の時から「森のおとぎ会」に入ってますので、昔話をいっぱい集めてたんですよ。いろんな本を読む中で、五戸には『手つきり姉さま』というとても素晴らしい本があるというのをもういろんなので読んで知ってたんですよ。

例えばこれは、幼児と民話っていうのの中に、こういうふうに書いてあるんですよ。原話の採集者である、能田多代子さんは、この終わりに注を付けて次のように言うておられます。「爺に応える子供の哀れなこの再会の喜びが素晴らしいのだ」っていうふうに書いてあるんですけども。「数ある『舌切り雀』の原話の中でもこの、五戸の原話の中に出てくる爺と雀の歌ほど心に残るものは少ないように思います」もう絶賛です。

そして、例えばこれは大川悦生さん、皆さんよくご存じだと思いますけれども。この人はですね、五戸の『手つきり姉さま』の中の「ももたろう」が、素晴らしいって書いてあるんですよ。私ここの文章気に入ってんですけどもね。

爺と婆が子供がいなくて寂しがっていたということさえ省かれている。しかし、まるつきり偶然に拾ったのではない。神の申し子としてのももの子を授かる条件、あるいはその必然性がちゃんと、語り含められているのである。例えば、素晴らしい子供を授かる爺婆は、常に、気持ちの通い合った夫婦でなければならない。

「舌切り雀」はだめなんですね。

婆は、川で洗濯しながら、爺のことを思っている。たまたま、流れてきた桃を一つ拾って食ってみたら、なんもかもうまかったので、「爺に持って行ってけべでア」と川上に向かって歌う。その呼びかけに答えて初めて、命の宿った桃が流れよってくる。洗濯しているところへただ流れて来たのなら、桃の子は生まれはしなかつたらう。桃が一つだけ流れて来るのが本当か、二つ以上が本当かと議論した人達があつたが、五戸のような語られ方が最も自然であらう。

ってこれね。八戸にいる段階で私はこのことは知っていたんですよ。そしてこれが、大川悦生さんの『ももの子たろう』^⑧青森県は何でも「こ」付けるからってので、『ももの子たろう』なんです。そして、これにもですね、青森県五戸地方の昔っこを集めた、能田多代子さんの『手つきり姉さま』という本がある、そしてその最後に、「へんだへでエ、んがどオもちちばり飲んでねエんで、ママずっぱど食って、桃太郎のように大っきぐならねばならねエんでエ。これが桃太郎の本質だ」って書いてあるんです。だからここに、「だからして、次郎も三郎もお春も、好き嫌い言わねんで、まんまだの魚だのどつきり食べて、もものこたろうのように、大っきくならねばならねんで」っていれてる。これは、五戸の桃太郎なんですよ。

そして、これは最近の講談社で出している絵本なんですけど、これは大っきい絵本で見

ればもっと衝撃的なんですけどもね、ここの場面です。《絵本を示し》桃いっぱい流れてきているでしょ。「お婆さんが川で洗濯していると、つんぶらつんぶら、ああ爺さんさ食わせたいもんじゃ。お婆さんはさっそく手招きをした。うんまあい桃はこっちゃー来い、にんがい桃はあっちゃあ行げ。するといちばん大きな桃がつんぶらつんぶら寄ってきた。」こうして歌うからにはいっぱい流れてこなきゃならないでしょうね。これが五戸の桃太郎なんです。こんなに素晴らしい本があるわけですよ、五戸には。

個人的に言えば、主人の五戸の家は私たちがいるときは、お爺さん、お婆さん、お婆ちゃん、年寄りが三人いたんですよ。そこへ二十代の私が行くことになるわけですから、周りの人に大反対されました。「佐々木さん行けば苦勞するよ。今はもうちょっとしてから行ってもいいんでないの」って言われたんですよ。でも私は、いや、五戸に行けば憧れの『手つきり姉さま』の本が手に入るっていうことで喜んだ。そんな人の話なんか全然聞く耳を持たずに、そういう風に言う人に、いや私はそういう環境に自分を入れてみたいのよって言ってですね、来たんですよ五戸に。引っ越し終わってまず行ったのが、図書館でした。

『手つきり姉さま』という本貸してください、「何それ？」図書館に言われたんですよ。無かったんですよ図書館に。「え？」と思った。なんで私が五戸に来たのってそう思ったんですよ。それで、そこで黙って帰ればいいのに私、悪態ついたんですよ。「全国的に有名な能田多代子さんの本が無いなんて、五戸の文化はどうなってるんですか」って、言ったもんだからそれから図書館に行けなくなった。でも今はですね、五戸の図書館にはちゃんと揃ってますよ。いろいろ、説明しましたが、五戸の『手つきり姉さま』はこんなに素晴らしいのだということですね。その『手つきり姉さま』という本、見れながったわけですよ。ところが今は私の手元には『手つきり姉さま』という本があります。

これはどうして手に入ったか。それはですね、川合勇太郎さん、みなさんこの方の本持ってると思うんですよ、ふるさとの伝説とか青森県の昔話とかいっぱい本出してます。この川合勇太郎さんが、「八戸童話会」の会員だったんですよ。それで、東京の息子さんのところに行っても、一年に一回の「森のおとぎ会」のときには、来て、参加してくれたんですよ。そして、いろいろ話してくれたんです。その話がおもしろくて、私いつつもくっついてましたけれども。新聞記者だったんですよ、デイリー東北とか東奥日報の。んで、「自分たちは、取材したのを書くときには腹で書いた。」と言うんですよ。私、「ええ？腹でメモするってどういうこと？」って聞いたら、昔はね、袴を履いて着物を着ていたそうです。着物から手を入れて、《着物の胸元の部分に手を入れて》こここのところにメモを置いて、この中でメモしたそうです。そうでなければしゃべってくれないっていうんです。そういう風に、おもしろい方だったんですけど、この方がお亡くなりになって、遺族の方が「八戸童話会」の人たちで、うちの父の本を使ってくださいって寄付してくれたんです。それ整理しに行ったらあったんです、これが。あら～これは私へのプレゼントだ～って思っ

て持ってきて一生懸命使ってます。そして、ここに来るときみなさんにこれをちょっと見せればいかなって思っ

童話会のメンバーとして「森のおとぎ会」、「八戸童話会」を創った方だそうです。わ～すごいなと思いました。

あと一人ですね、私がとても会いたい方がいました。その方は弘前の人でした。私が高校一年生の時に、理科の先生だかが風邪ひいて来なかったときに、教頭先生が来てくれたんです。その教頭先生は森山泰太郎先生でした。その先生が、恐山の話をしてくれたんです。私は、も～うすっかりその教頭先生の虜になってしまったんです。ていうのは、私小さいときにむつにもいたことがあって、うちの母が下駄屋さんのお手伝いで恐山の盛りのときに、下駄売るのを手伝いに行ったことがあったんですよ。それに私もついて、盛りの間だから、まあ4、5日はいたと思うんですよ。恐山にあの頃みんな下駄でしたので、下駄履いて恐山に行けば、帰りは下駄買わないともう緒が擦り切れてしまうので、下駄屋が出たんですよ。私は4歳ぐらいだと思うんです、すごい盛りでしたねぇ私の印象では。外に出れば人さらいがいるから、外に出ないでテントの中にいろって言われて、だぁまって、おとなしい子だったもんですから、座ってて。そして今でも覚えているのは、確かあそこは混浴でしたよね、混浴で、夕方になればうちの母たちは電気無いから薄暗くなってからでないで風呂に行かないわけですよ。そして、湯ぶねからさらげてくれるまで私おとなしく入ってるから毎日、のぼせてたんですよ。だからてっきり私は心臓が悪いんじゃないかって、ずっと気にしてたんですけど、おとし、恐山に行って温泉に入ったら三分以内であがってくださいって書いてるんですよ。なぁに私、子供のときに五分も十分も入れさせられたって思ってますね、んじゃあ私、やっぱり心臓は強いほうなんだって思ったんですけど。その森山泰太郎先生に必ず話したいと思ったのに、次の新学期でいなぐなっちゃったんですよ。弘前のどごだの高校の校長先生になって。会いたい会いたいとずう～と思いつけました。そしたら、機会が来そうになったんですよ。ていうのは、うちの主人が弘前南高校に転勤になったんですよ。そうして、やあ、森山泰太郎先生のところに挨拶に行つて、夕食ごちそうになってきたつて言われた時のショック、私が話をしたいと思ってるのになんで、と思ったんですよ。主人が弘前にいる間に必ず連れてってもらおうと思つたら、主人が2年で帰ってきてしまったんですよ。会えなくて、いや、それでもまた会いたいと思つたら、大下由美子先生が五戸の図書館のアドバイザーになって来てくれたんですよ。んで、何をやるかって言つたら、能田多代子さんについての研究会を開こうということになって、そして、じゃあ誰がいいか、森山泰太郎先生。じゃあ森山泰太郎先生のところに頼みに行こうってことで、うちの主人を通してお願いしに、あれは東北女子大に会いに行ったんです。会いたい話したいって思つてから30年経ちました。話しかけたいんだけど、大下由美子先生がとても理路整然と素敵にしゃべるもんですから、言葉が出ないの私。出ないわけですよ胸いっぱい。それでもね、30年30年、もう大下先生の声なんか私聞こえてませんでした。どこで私しゃべろうってそればかり考えて、やっと「あの、森山先生、私、実は能田多代子さんの昔話つてやってるんですけど、聞いていただけますか」つて言つたら、「あ、やってるの、どうぞ」つて言つてこの「舌切り雀」をやつたんです。そしたらですね森山先生、私にちゃんとハガキをくださいました。「あなた様の南部昔話の語り口の巧みなことに驚きました。能田女子がお聞きになられたら、さぞ

手を打ってお喜びになったと存じます。」と書いてくれたんですよ。大下先生には、「和子さんあなたもなかなかやるわねえ」って言われましたけれども、そりゃもういいんです、憧れの30年来の人に会って、能田多代子さんについて結局6時間話を聞くことができました。

これが私の「舌切り雀」に対する思いです。これは私の過去です、言ってみれば、過去がつながったっていう風な思いを抱いてます。

じゃあ、最後に、今年、「ほら吹き大会」に出たんです。おいらせ町。おいらせ町っていうのは、青森県のトップセールスマンをやってる慎吾ちゃん⁹の出たところですよ。私、「ほら吹き大会」では昔話とのコラボをやりたと思ってたんですよ。で、昔話とのコラボをやってみました、これをちょっとやってもいいですか。

あんださんがた、よーくおんであったなすー。おら今年でほら吹き3回目。2回目の時みんなで、いだこになるべしっていう話をしやんした。なーにしたってへればなすー、おら百石いだこ様に救われやんした。今日は、どうやって救われだかを教えたくてたス。十年ひと昔ってへるべ。そのひと昔前の話っこ。

おらはア、夫婦仲よくってエ、喧嘩したごとア、一回もありやあせんがった。こごア本当よ。

いっつも二人で話ッコしておりアンした。これがらア年取って、どっちが先にいぐがアわがんねエども、おだがい一人になってもオ、後添いは貰わネ。御家入りもしねッコ。かだい約束したのに、人の命は分がらねエもんだ。その後、旦那様ぼっくりど死んでしまいやんした。

おら力落として、大変だったンども、そのうち、あれだけのお茶好きが、あの世で、お茶っこ飲んでるべがア。極楽でお茶飲みしてるってエ話ッコ聞いたこどもねエしなア。と
思っア、あだら新しい土瓶に茶碗をそろえて、お茶も高いの買って、なんでも川さ流せばあの世さ届ぐと教えられでいだもので、神秘の湖、十和田湖がら流れでいる、この、おいらせ川までわじゃわじゃ来て、流してやりやアンした。

そのうち寒くなってきたベエ。おらア旦那様、冬になれば、こたづがら離れられねエ人であったが、今頃はどうしてるベエ。せめてエ、ちゃんちゃんこでも送ってやるべど、さっとほろけで〈ボケ〉来たおばちゃんがら聞いて、指さア針刺しながら、ちゃんちゃんここさえてエ、墓どわらさア置いてきやんしたア。なんでも墓どわらさ置いておげばア、あの世さア届ぐもんだアど。

三回忌も過ぎだ頃オ、旦那様の声っこ聞きッたくてエ、イタッゴ¹⁰のとこさア、でがげやんしたア。有名な百石イダコ、そごのイタッゴさまを、弓張いだごってへってなすウ。弓の弦をベロレーン、ベロレーンって鳴らして、死人さ口寄せして喋るわけだア。

「どうが、おら旦那様を、あの世がら呼び出してもらいてエ。」ってへったつきや〈と言ったら〉、いだっこさん、仏様さア、お灯明あげてエ、クツチャクツチャクツチャクツチャ、祈りに祈ったら、旦那様出はってきて、「あア〜らア〜なづ〜がシイ〜やア、かず〜ちゃ

ア～ん。」おらもう胸がいっぱいになってエ、「なアにしてぼっくりど逝ってしまったのオ」
って泣きくどいて、「ほんだほんだア、あれだけのお茶好きもあんださの為にイ、土瓶に茶
碗を揃えてエ、お茶も高エの買ってやったンどもオ、届いだがエ？」って聞いたっきや、
「届ぐ～こど～は～届い～だ～けど～もオ～、ベベローン、あっちの河原さ～ガ～ラガ
ラア～、こっちの石さア～、ゴオ～ロゴロオ～。転び転び、来たものでエ～、皆ア割れで
しもうてエ～。土瓶のつるだけが届いだっちゃ、ベベローン。」っていうでねエの。「いや
ア～、そつたらこどあっていいもんだがア。そいだよそのあど秋になってエ、なんぼが寒
がべどちゃんちゃんこ送ってやったンどもオ、あれは届いだがエ？」「届ぐ～こどは～届い
だがアの～、ベベローン。あっちの枝さア～バア～リバリ～、こっちの木の根っこさア～
ビィ～リビリ～。袖も裾も皆切れでエ～。襟もおぐみもわがらねエ～。おんぼろさんぼろ
のぼろっきれになって届いだがアベベローン。」「へだばあの世で茶も飲めず、ちゃんちゃ
んこもなぐて震えているのがエ。可哀そうに。」ってへつたっきやなスウ。「ベベローン。
おらの～こどなら～心配～いらねエ～。三途の川の婆さが、後家で寂しいって言うもんだ
がら、おらア～、閻魔様の仲人で後家入りにすることにイ決めだア～。ベベローン。」ってへ
たもんだ。おらなすウ、びっくりどんでんシアしたア。「なんつぽおら旦那様がハンサムで
カッコイってへつたつたてエ、あれだけどっちが先に逝つてもオ、後は一人で暮らす、
後添いも貰わねエ。後家入りもしねエ。って約束したべなア。あんまりだアあんまりだア
…して、その婆さま年はなんぼになるの？」ってきいだっきや。「ベベローン。歳は～25で
エ～おなござがりよ、ぼい～ん」ときたもんだ。おらなすウ～腹立って腹立って、いだご
さまの弓ばへし折ってしまう所だったんだイ。

ところが、あの世ど、この世での、はじめでの夫婦喧嘩の後、ワリワリワリと元気出は
てきアンした。あア、あの世に逝った人は逝った人で、元気に楽しく暮らしているんだ。
なアンも心配いらね。へだら、この世にいる人はこの世にいる人で、ポォ～っと生きでい
ねんで、元気に明るぐ、「ほら吹き大会」に出だり、昔語りやったり、25歳年下の彼氏作
ったりして、楽しぐ暮らせばいいのだと、思えるようになったんでスウ。さばかぱつとし
やんしたア。これも、百石イダッコさまのおかげだね。おらア、お礼に、おいらせ町の中心
部に、百石の百をとって、100メートルのタワーを建ててエ、そごに、イダゴ養成場を
作って、高い所がら皆様をまぶって〈守って〉、元気にしてくれる、イダゴさまにいでもら
うつもりだエ。じえんこ〈銭っこの費用〉は、「元気は、美容にとって一番の薬」ってへつ
てなスウ高須クリニックの院長が出してくれる事になっておりانس。おらは、方言イダ
ゴになってエ、人の気持ちッコを、明るぐ、元気にしてやりたいのス。どんだべ？いがべ
が？へだら、おしずがっこにおがえりやんせ〈さようなら〉。どつとはアーれエー。

と、やりました。

《絵本『赤い鳥』を示しながら》これは、うちの主人の、父親が、小学校の先生してた
人みたいで、『赤い鳥』が、ぞろっとあつたんですよ。それ見た時、私、「ああ私この為に

嫁に来た！」ってその時は思ったんですよ。で、これにですね、一冊持ってきたのは、「ごんぎつね」が載っているんですよ。で、新美南吉が、この本が出た時は確実に、生きていたんだ！って思えるだけで幸せです。今日は、持ってきた本については全部しゃべりました。以上です。

【注】

- (1)令和元年 10 月 31 日午前 2 時 50 分ごろ、沖縄県、那覇市の首里城で火災が発生した。首里城の正殿、北殿、南殿が全焼。正殿前にある御庭(うなー)に入る入り口の「奉神門(ほうしんもん)」や、南殿に隣接する「書院」にも燃え広がった。「首里城で火災 正殿、北殿、南殿など 6 棟が焼失」『朝日新聞デジタル』
<https://www.asahi.com/articles/ASMB01BRBMBZTIPE03N.html>(2020.2.7 入手)
- (2)民俗学者。民俗学研究所を設立するなど、斬界の第一人者となる。著書に『遠野物語』『石神問答』『海上の道』などがある。『日本国語大辞典 第二版』小学館
- (3)女性民俗研究の第一人者として知られる。柳田國男や詩人福士幸次郎の影響を受け、青森県五戸や九州の民俗調査に当たった。五戸の地域や生活に根ざした研究活動が評価され、36 年青森県褒賞、42 年第 20 回東奥賞を受賞。著書に『五戸の方言』『村の女性』『青森県五戸語彙集』『手つきり姉さま』などがある。「能田多代子とは」『コトバンク』
<https://kotobank.jp/word/能田%20多代子-1652059>(2020.2.7 入手)
- (4)能田多代子編 (1958)『手つきり姉さま：五戸の昔話』未来社
- (5)東京・浅草にある、布文化と浮世絵の美術館、和のセレクトショップ、イベントホールが一体となった、複合型アートビル。「::Amuse Museum:: [ABOUT US]」
<http://amusemuseum.com/info/index.html>(2020.2.7 入手)
- (6) 青森出身の民俗学者・民俗民具研究家・著述家。民具の調査・収集に奔走した在野の学者で、2 万点以上の骨董、古民具、衣服などの貴重なコレクションを個人所有していた。これらのコレクションは、寺山修司、黒澤明、都築響一らの映画作品等にも貸与されている。『TSUNAGU JUTSU 「田中忠三郎が伝える精神」』
<http://towadaartcenter.com/wordpress/wp-content/uploads/2016/08/2014-2-spirit-of-life-in-the-north-of-japan-press-release.pdf>(2020.2.7 入手)
- (7)田中忠三郎 (2009)『物には心がある』アミューズエデュテインメント
- (8)大川悦生 (1967)『ももの子たろう』ポプラ社
- (9)青森県知事、三村慎吾氏。
- (10)青森県、岩手県・秋田県北部を中心に活動してきた伝統的な民間巫者。盲目の女性であることが多く、死霊を自らに憑依させ、その言葉を語る「口寄せ」を主たる巫業とする。朝倉邦造 (2009)『祭・芸能・行事大辞典(上)』朝倉書店

(2) 榎谷伸夫氏による「南部昔コ語り部養成講座」のワークショップ

次に本会会長の榎谷氏からは、「南部昔コ語り部養成講座」と「南部昔コキャラバン隊」の設立事情などをお話しして頂いた。

実践講座の前に、参加者の頭を柔らかくしようということで、榎谷会長が南部弁の川柳「けな、なづぎ まなぐ、あぐども 今は死語」など9句詠みあげて、共通語の意味をみんなで確認し合った。ここで、同じ青森県の方言でも、南部弁と津軽弁で違いがあることがわかった。



次から、その様子の文字化を掲載する。

体験講座で榎谷会長が南部弁の川柳を披露した時の、会場とのやり取りの様子

- ・榎谷…榎谷伸夫会長の発言 ・今村…今村の発言
- ・() …榎谷会長、参加者の動きや反応 ・参加者の発言は【参加者 A～D】で表記する
- ・〈〉 …分かりにくい単語の共通語の意味・アクセントの違いは「傍点」で表記する

※敬称略

【榎谷】少し、頭をやっこくしましょう。「けな、なづぎ まなぐ、あぐども 今は死語」
分かる？「けな、なづぎ まなぐ、あぐども 今は死語」

【参加者 A】けな？

【榎谷】けな！うで、腕。津軽弁で何て喋るの？

【参加者 A】うで。

【榎谷】まあだ～。えふりこぎ。え、津軽では？

【参加者 A】けなってしね。うで！

【参加者 B】聞いたことね。

【榎谷】はいじゃあ次行きます。「げほ、このげ うすらこんども 今は死語」

【参加者 C】私分かんないわ、そんなの。

【榎谷】ハハハ、喋られだ。なづきげほ（おでこを押さえる）、このげ（眉毛を撫でる）、
うすらこんど（後頭部を押さえる）、ごはしらみのへんづ（項を押さえる）。

（参加者どよめく）

【榎谷】あららら。はい、えー。「ここまれね すりまぎ、歩ぐ ぎっくらへんき」

【参加者 A】ぎっくらへんきだば分かるけども、ここまれねは分からない。

【榎谷】ここまれね（前に屈む）

【参加者 A】ああ、かんがまえにとって事。

【榎谷】ああ、津軽弁でかんがまえにとって言うの？ありやあ、全然違うんだね。面白い。

【今村】こまるはこまるって言うんですか？

【参加者 A】そうそう。

【柗谷】「ごしゃがれで じれっとなるわ へちやもぐれ」

【参加者A】わがんね。

【柗谷】ごしゃがれる、ごしゃぐ。怒ること。「何ごしゃがれでるって！」ごしゃぐ。じれっとなるってのは、(うな垂れて) 意気消沈。へちやもぐれってのは、意気地なして事。ああ、じゃあこれは。「この頃は 見なくなっただね にぎたらし」

【参加者C】ハハハ。

【参加者A】ん～？

【柗谷】にぎたらし、(鼻の下を撫でて) 青っ鼻。

【参加者A】それは初めて知った。

【参加者B】にぎたらしって、鼻たらしって言う。

【柗谷】鼻たらしって喋るの？まあ、こっちでも鼻たらしって喋る。え～、「いだしね 何でも投げる もじゃべなす」いだしね、勿体ない。何でも投げる。もじゃべなすは、粗忽者かな。何でも捨ててしまう。え～、「いんずいでや すびが入って 背中かぐ」いんずいでや。〈気持ち悪い〉

【参加者A】それは分かる。

【柗谷】すび、薫くず。

【参加者A】すび。

【柗谷】すび？こっちではすび。

【参加者D】すびってというのは、あかぎれの事？

【柗谷】すびってというのはそうそう。こっちではどっちでも喋る。「んがでんで 息子に尋ねる にどわらす」にどわらすは？

【参加者A】歳いった人？

【柗谷】ううん、ボケた人。もう一回、赤子になるって事。

【参加者A】あ～、なるほど。

【柗谷】んがでんで、お前は誰だ？って。

【参加者C】全然分からないわ、だって私が住んでるのアメリカの隣なもの！
(参加者みな笑う)

【柗谷】「運動会 いっつもげっぱで けね息子」

【参加者A】これは、分かる。これは津軽弁でも言う、同じ。

【柗谷】いっつもげっぱで、けね、か弱い。遊びながら作った僕の詩の、一番反応が良い詩です。

「きびア悪い顔」

「冷蔵庫の整理するすけ〈するから〉」

宣言して ^{なが}中から取り出す食 ^{しょぐりょう}料品

「あんだ、食ってけさい〈食べてちょうだい〉」

あめだが〈傷んでいるか〉どんだが試すのは いっつもわ〈私〉の役目

「高い、生命保険をかけてるがら、気にしなくていい」とへられ〈言われ〉でも

食う気にならないわの面〈顔〉よ見で

「気にしねえで」とへる母のニヤッと笑るきびア悪い顔

(参加者みな笑う)

【榎谷】気にしねえ、気にする。遠慮する、遠慮しない。じにしねえでかせ〈食え〉。あへ、結構聞いてて津軽弁と南部弁やっぱり、あるんですね。

次に、実際に『南部昔コ語り部養成講座 V』で使用しているテキストを基に、南部弁を語りながら学ぶ体験講座を行った。一つの文を区切って、榎谷会長の後に続いて語る、という口移し形式は、南部弁話者ではない人たちにも取り組みやすいものであった。以下に使用したテキストを示す。

「南部弁・南部昔コ体験講座テキスト」

正部家種康さんへ捧ぐ 南部昔コ集【5】八戸市公民館『南部昔コ語り部養成講座 V』用テキストより

「不思議なふぐべ」

むが〜し、むがし、あつたじ。

ある酒屋の店先さ、ほごりっくるめのぼろ布の着物 き みつもないたび ぼさま あらわ
ちや 小っこいふぐべよ差し出して、こうへつたじ。

「これさ酒っこよけれ。」

「フフフ……。こつたら小っこいふぐべだば、五合 (0.9 ㍓) も入ながべ。」

酒屋の小僧っこア、酒っこよ入れでみだ。ところが、そのふぐべさなんぼ入れでも、一杯
になんながつたじおな。

心配した 小僧っこア、あわてた様子 ぼい が ぼい が 店 の 主人 さ 報告 に行つたじ。

「それはな、きっと、ただのお方ではあるまい。粗相よしないようにしなせ。」

主人がこうへつたどごで、とにかく、その小っこいふぐべさ、入るだけの酒っこよどん
がどんが注いだじおな。なんでもなんす、一斗 (18 ㍓) 近い酒っこが、その小っこいふぐ
べさ入つたどいうごどであんすえ〜。

坊様ア、にこかこ笑いながらいなぐなつたじ。それ以来なす、その酒屋は大繁盛 する
ようになったどいうごどであんすよ。

はい。人よ見かけだけで判断してはならないどいう、『不思議なふぐべ』の話っこアどつ
とはれエ〜。

「南部昔コ語り部養成講座」の活動報告と南部昔コキャラバン隊の設立事情・活動につ
いての榎谷会長のコメントを文字化したものである。(校閲はご本人による。)

南部昔コ語り部養成講座の実践報告および 南部昔コキャラバン隊設立事情・活動についての柗谷会長コメント

南部弁を津軽の方たちが全然分からないという言葉ありましたけれども、南部地方に住むお年寄りの方たちも、忘れてしまって使ってない、ああ懐かしいということをよく聞きます。ですから、そういうものを情報としてどんどん提示していくのがいいのかなあと思っています。

(南部昔コ語り部養成講座に) 1年目は100人を超える人たちが、午前の部・午後の部に来てくれました。僕の1つの狙いは、児童・生徒に直接接する小学校、中学校の先生方に来てほしいということでした。だから、当然、新聞にも案内を出しますけど、市内全部の小・中学校にも案内を出しました。ただし、参加は毎年1人か2人くらいです。学校の先生忙しいのはわかっていますから、夜の部は7時半からにしたんですけどね。ところが、7時半でも、やっぱり、まだ早すぎるっていう先生がいたり。あと、やりたいんだけど、家で子供が待ってるから来れないとか。いろいろ難しいことがありました。今は、夜の部は7時からにしています。僕も佐々木さんも、それなりに歳をとって、できれば早く終わりたいという、気持ちが無いことではないですネ。

一昨年でした。この講座を受けている千葉在住の方から、「母が八戸の老健施設に入っていて、月1回世話をしに来ています。どうでしょう。老健施設の人たちに、ここで学んだ昔コを話してあげるのはどうかしら」という呼びかけがあって、この南部昔コキャラバン隊が結成されました。この前、八戸のケーブルテレビに出てましたけれども、老健施設は勿論、いろんなイベントに積極的に参加することによって、1年半で2000人くらいにお話したというんです。たった1年半ですよ。いやいや、どんでんしちゃいました。佐々木和子さんとも話したんです。「彼らの語りを聞くたびに、みなさん上手になっている。私たち童話会も、負けないように練習しなきゃだめよ」と。そうなんです。キャラバン隊の方々のレベルが上がっているんです。今、八戸市内で、何かイベントがあると、キャラバン隊の旗がはためいている。竹ノ子さんをはじめとする方々が、いろいろな所で、一生懸命活動なさっているんですネ。

僕らが考え付かないような工夫もしていらっしゃいます。聞く人たちが、又は見る人たちが喜ぶような工夫をなさっています。今日はその一端をみなさんにご紹介するそうです。

それじゃあ、竹ノ子さん、その辺、もう少し詳しく、南部昔コキャラバン隊のことをお話ししてください。お願いします。

次から、代表の竹ノ子みさ子氏による南部昔コキャラバン隊の紹介コメントを文字化したものを掲載する。

竹ノ子氏による南部昔コキヤラバン隊の活動紹介コメント

柗谷先生にお話ししてもらったみたいに、ちょうど2年前に発足しました。受講生に、私の前の代表の郡司さんが、「語り部やりませんか～？昔コキヤラバン隊を作りたいんですが、やりたい人はどうぞ～」っていうのに手を挙げたメンバー20人位で始めました。

でも、その時なぜ入りやすかったかと言うと、一番最初はテキストを見ながら読み聞かせでいいですよっていうのがあったので、私たちも昔コは好きだけど、覚えでしゃべるってのはまだぐ～っと階段高すぎて、それはちょっとできないと思ったけれども。見てもいいよっていうのがあったので、見たら言えるかも、というので参加しました。

(活動は) 高齢者施設中心に動いたんですが、行くとやっぱりすごい、さっき(語り部ネットワーク情報交換会)津軽の方が「まだ来てね」って言ってもらうのがあってあったけど。そう言ってもらえるのが私たちも楽しくて、嬉しくて。「面白かった～。懐かしかった～。まだ来てけんア。」って言われれば、「はい！いつでも来ます～」っていう感じで続けています。

高齢者施設から介護養護教室。そういう所のお互いに聞き合った情報で、他の所からも声を掛けて頂くようになって、介護養護施設とか行ったり、社協さん(八戸市社会福祉協議会)の方で繋がって声を掛けて頂いたりという風に、しゃべる場所がもちろん高齢者が多いんですけども。元気な高齢者がいる所とかっていう風にしゃべる場が広がって来ます。

それで、私も少し欲が出てきて、「もう少しいろんなどころでしゃべりたいね」っていうので、歩行天(歩行者天国の略)に申し込んだらホコテンからも「いいですよ」って言われて、路上でしゃべったりとか。こないだは市民活動フェスティバルで、役所前の広場でステージでしゃべらせてもらったり、という風にして、聞いてくださる対象が広がったので、じゃあ小っちゃい子にも分かるように何か、どうやったらいいかねってみんなで意見を言い合っている。「ゆっくりしゃべればいいんでないか」とか「むずかしい言葉んときにちょっとこれはこういうことだよって付け足せば良いんじゃないか」とか。あと、柗谷先生をお呼びして、勉強会をした時も、柗谷先生から「動作も付けければいいよ」とか。「書いであるとおりにでなくて、そのとおりにしゃべんなくても良いから」っていう風にも言われてちょっと気が楽になって。

そのうちに慣れてきたら、やっぱり下見てるんじゃないなくて前見てしゃべりたいなとかって。そうなる、語り部なんてそんなとんでもないんですけど、ちょっと自分なりに楽しくしたり。そういう風にやって今、私たちもなんか面白い、しゃべるのが面白い。声掛けってもらうのが面白いっていう感じで続いています。

「お金はいりません」って言っているんですが、ちょっとご褒美もらうと、それでみんなで親睦会の足しにしたりしながら、みんなの輪を作りながらやっています。

若い人は40(歳) ちょっとの人から、一番上は85歳の方まで。年齢も幅広いんですが、みんなで言いたいことを言い合って、月一回の定例会は非常に盛り上がっています。

あと、寒くなってくると施設はインフルエンザとか、いろんながあるので今からはち

よっとおとなしくはなるんですけども、毎月 5,6 回ずつ声を掛けて頂きながらやっていました。

(3) 南部昔コキャラバン隊による方言紙芝居

南部昔コキャラバン隊（代表：竹ノ子みさ子氏）は、柗谷会長の勤務する八戸公民館で開催されている「南部昔コ語り部養成講座」の受講生の中から、2017年に発足した。南部弁の語りや子守歌などを、工夫を凝らして披露している団体である。今回は下坪利都子氏と金浜良子氏のお二人が、南部の昔コ「浦島太郎」の紙芝居を発表してください。この紙芝居は、一人はナレーターと浦島太郎以外の登場人物を担当し、浦島太郎役のもう一人が浦島太郎の顔がくり抜かれた部分に顔を出して読み進める、というとてもユーモア溢れる紙芝居となっている。隊員の皆さんが考えた工夫を凝らした紙芝居は、幼稚園などでは見られる形式で、保育園などでの読み聞かせや演者の経験を活かした作りになっている。



2.3 語り部活動情報

以下に、日ごろの活動内容について、各団体から寄せていただいた情報を中心に掲載する。(五十音順)

【団体】

いたやなぎ昔っこの会（板柳町）

- 毎月1回の定例会（8月・1月～3月休み）を行っている。
（津軽弁コでの情報交換・ひとりずつ持ち話を披露）
- 定例会の後、老人施設で昔っこを語っている。
- 毎年、いきいき大学入学式に出演（つがる弁コで劇を作成し、14名全員参加を目標としている。そのためにシナリオを書く。）
- 町の広報（隔月）に昔っこを書いている。（11月で10回目）
- 年1回研修会及び交流会を開催している。
- 社協・行政などからのオファーに対応している。

絵本の読み聞かせの会すいみー（青森市）

- アピオあおもり児童図書室で津軽弁の絵本を、夏と冬に読み聞かせをしている。

お膳の会（むつ市）

- 普段方言での読み聞かせ等はほとんどしていないが、下北の昔話を、方言を入れての紙芝居作りを年1作ずつ制作している。
- 子育て支援センター、保育園、小学校での読み聞かせ、読み聞かせ講習会での講師等の活動をしている。

おはなしいっぱい（平内町）

- 読み聞かせグループの一人として津軽弁の素話をしている。
- 平内町の二か所の小学校の朝の自習時間帯に各学年一回、他に年一回、紙芝居・絵本素話に分かれ、全校児童が各自好きなものを選んで聞いている。（15分位）
- 実行委員会主催の敬老会で10分間語っている。
- 町の図書館お話コーナーで30分間、毎月一回定例で行うお話会で10分間素話を担当する。

おはなしるんるん（弘前市）

- 小学校や保育園でのおはなし会が多く、メンバーが交代で行っている。昔っこを語る人や、昔っこの手作り紙芝居をする人がいく時は、演じることがある。

語りの会 こま草

- 小学校、幼稚園、保育園、誠幸園で月一回、読み聞かせをしている。

子育て支援サークル とんとん（青森市）

- 今年は太宰治生誕110周年で、太宰作品の朗読会に参加した。
- 11月3日に五所川原市民文化祭で「走れメロス」を朗読した。

潮風おはなし会（中泊町）

- 小学校時代、64歳違いの祖母から聞いたむがしっこが、ポロポロポロっと口からこぼれ出て、自分も祖母のように語れると知った昭和48年から、祖母が語ったむがしっこ、本などで知ったむがしっこ、また語ってきたら生まれ出てきた故郷（下前・小泊）にちなんだむがしっこを、すべて生まれ育った浜どころの津軽弁で語っている。
- 中泊町こども園、小学校、グループホーム等施設でおはなし会をしている。要望に応じて、町外・県外でも開催している。
- 小中学校夏休み期間、小泊施設の12町内をラジオを持って回り、NHKラジオ体操の後でおはなし会を開催している。
- 太宰治生誕百年の年より、家庭の事情で一時期休みもしたが、小説「津軽」の像記念館（月2回）津軽鉄道金木駅（毎月19日）での太宰治作品の朗読を含むおはなし会を継続している。津軽鉄道中里駅ナカにぎわい空間（毎月27日）での活動も継続している。
- 令和元年11月23日、小野正文先生生誕百年（2013年1月4日）記念継続事

業「校歌と昔っこ・朗読の集い」～校歌よ響け！令和の時代も～を開催した。
小野正文先生生誕百年の平成 25 年より年 3 回（①5 月第二 or 第三土曜日②
8 月 15 日③11 月 23 日）開催し、この回に 21 回目となる。

つつじの会（田子町）

- 年 2 回の紙芝居と読み聞かせをしている。（図書館）
- 会員が施設で方言を使った紙芝居の上演をしている。

南部昔コキヤラバン隊（八戸市）

- 定期的に 高齢者施設 月一回、2 か所
 高齢者施設 3 か月に一回、1 か所
- 不定期（依頼を受けたとき）
 - ・ 高齢者施設
 - ・ 高齢者支援センター…介護予防教室
 - ・ 社会福祉協議会…一人暮らしの高齢者の集まり
 シニア教室
 - ・ 老人クラブ
 - ・ 公民館 など
- 不定期（申し込んで）
 - ・ ホコテン
 - ・ 市立図書館
 - ・ 史跡根城まつり
 - ・ 市民活動フェス
 - ・ ロビーイベント
- 11 月 高齢者施設… 2 か所
 介護予防教室… 1 か所
 社教主催 祭り… 1 か所
- 12 月 高齢者施設… 3 か所
 介護予防教室… 1 か所

野辺地町立図書館（野辺地町）

- 毎年、春に新一年生を対象に、『のへじ昔っこ』語りを開催している。

八戸市読み聞かせボランティア「青い鳥」（八戸市）

毎月数回

- 八戸市内小学校での読み聞かせ・昔語りをしている。
- 八戸市の幼稚園・保育所・公民館で地産地消紙芝居上演をしている。
- 八戸市健診センターで新生児親子への絵本読み聞かせをしている。（八戸ブック
 スタート事業協力）
- 八食センター読み聞かせ劇場での絵本・紙芝居上演を年数回行っている。

- イベント等での読み聞かせ・朗読・群読披露をしている。

八戸童話会（八戸市）

- 森のおとぎ会（96回目）一週間、毎朝5時半から6時半ごろ。
- 江陽児童館で昔物語をしている。

むがしっこ語る会「ゆきん子」（五所川原市）

- 6月～9月中の毎土曜日「旧平山家住宅」で昔話を語っている。11:00～11:30まで。
- 5月～10月まで月2回（月曜日午前中）「みんなの教室」昔ばなし教室を開催している（公民館）。
- 11月3日、市民総合文化祭で昔ばなしを語っている。
- 11月16日、公民館まつりで昔ばなしを語っている。

昔こ 北の会（つがる市）

- 旅行者やグリーンツーリズム体験者に語っている。地域の行事や老健施設などで、トークと歌を交えて演じている。

読み聞かせボランティアネットワーク「おはなしの木」（むつ市）

- 年3回図書館にて（春、秋、冬）お話会をしている。
- 小学校での朝読書（8:00～8:10）時間での読み聞かせをしている。
- 土曜日、図書館のおはなしのへやにて読み聞かせをしている。
- むつ市乳児健診での読み聞かせ（離乳食教室、10ヶ月健診）3才健診ミニ図書館お手伝いをしている。
- 学童保育へ出前お話会をしている。
- その他依頼があれば読み聞かせしている。
- 秋の日のおはなし会を行った。

【個人】 ※敬称略

佐々木和子（五戸町）

- 五戸で「夕涼みおとぎ会」年一回（26年目）行っている。
- 敬老会で昔話をしている。
- 鷗盟大学（年配の方々）で講話をしている。
- その他要望があれば随時語っている。
- 「昔話教室」（7年目）午前、夜の部1日2回を5回行っている。
（童話会活動は柗谷さんと一緒。）

長谷川久美子（青森市浪岡）

- ボランティアで、デイサービス（月一回一人で）や児童館へ、時々お呼びがかかれれば出かけている。

梶谷伸夫

- 五月の連休に市内の小学校で、3・4年生を対象に一時間ほど、昔話をしている。
- 今年から、中学校でも昔話をしている。
- 高齢者の方にも、公民館などで語っている。
- BeFM で、「おもしろ南部弁講座」をやっている。(今年で 5000 回目)。

2.4 発信！方言の魅力 かだるびゃ・かだるべし青森県の方言 2019 参加者アンケート

以下に、参加者のアンケートの結果を示す。有効回答数は 15 である。

Q1.ご参加になった理由をお聞かせください（複数選択可）

①	趣旨に賛同したから	6
②	興味があったから	7
③	他の団体と顔見知りになりたかったから	3
④	他の団体の活動情報を知りたかったから	7
⑤	他の団体と一緒に活動してみたいから	1
⑥	自分たちの活動を知ってもらいたいから	3
⑦	他の団体と協力して、積極的に方言を残す活動をしていきたいから	1
⑧	その他	2
未記入		1

具体的には？

- ・方言や語り部活動に関する講話に興味があったから。
- ・八戸工大からの参加です。
- ・地域文化である方言の継承に取り組まれる皆様の活動について少しでも知りたかったから。
- ・他の団体の方（特に離れた地区）の活動を知りたかった。

Q2.情報交換会の満足度

①	満足	11
②	まあ満足	0
③	多少不満	0
④	不満	0
未記入		4

具体的には？

- ・津軽の昔話を聞くことができ、楽しかったです。
- ・活動内容だけでなく実演もあり、今後の参考になった。
- ・津軽弁、南部弁、語り口調のちがいを感しました。
- ・今村先生のお話、(現在の学校教育現場の方言の扱い) はとても興味深かったです。
- ・津軽弁が聞けてハッピー。タクシーでも聞きました。たぶん「せばだば」を初めて聞いた。
- ・津軽と南部の交流、初めてですが、とても楽しい時間でした。
- ・津軽と南部の違いがわかって良かったです。

Q3.研修会：佐々木和子副会長の講話と「舌切り雀」の語りの感想

- ・わかりやすい語り口に感動しました。
- ・和子先生の情熱を感じました。いつも魅かれます。物語そのものの魅力のみならず、佐々木先生の歩まれた人生観やバックグラウンドが語りに深みを強く感じさせるのを実感しました。
- ・普段聞くことができないような、昔話との出会いやエピソードをうかがうことができ、非常に楽しめた。「好き」を極める、とても大切ですネ！
- ・和子先生の語り方がやわらかく、間の明け方(取り方)がとてもよくわかりました。
- ・もっとたくさんの方に聞かせたい
- ・一話の昔かたりについて、これほど調べていることに感心致しました。ビックリです。一時間はあっという間でした。楽しかったです。
- ・自分で感じた物を素直に表現されているのが良かった。？のもつ大切さ→このこだわりが良い
- ・舌切り雀は、小さい頃から、よく聞いていたお話ですが、南部の方言で聞いてみるとその土地のあったかさ、方言でしか表せないなつかしさを感じました。そして和子さんの語りについての考え方、長い間続けるため自分から疑問に思ったことをつきつめ、行動すること大事だと思いました。私も好きなことを続けられるよう自分から行動していきたいです。
- ・そろそろ舌切り雀が真似できそう…！和子さんのお家でも聞いたので。是川でも聞いたので。
- ・ただ一言「素晴らしい！！」ユーモアありでパーフェクトな語りでした。
- ・とても勉強熱心な方だと感心しました。本当に好きだというのが伝わってきました。お話の語り口もスマートで勉強になりました。
- ・女性の目線から見た語りとか、人や本のつながりの話がとても感動しました。

Q4.研修会：柗谷伸夫会長の「南部昔コ語り部養成講座」のワークショップの感想

- ・南部と津軽、同じ青森県でことばも文化も大変違うことを改めて知らされました。柗谷先生ならではの味っこが大いに出ていて楽しかったです。
- ・年々、講座の内容が充実していて毎年楽しみにしながら参加しています。講義の意義を客観的に見ることができて新鮮でした。
- ・尊敬している先生。やっぱり話術はすご〜いです。とても参考になり、お話が聞けてうれしかったです。
- ・昔ばなしが桃太郎から金太郎、おむすびころりん等つながっていく術を取り入れたい…！と思いました。
- ・小人から大人までを対象にすごいと思います。いっぱい勉強します。
- ・継続して開講されていることで、南部昔コキャラバン隊のような後身育成がなされるのだなあ…と、講座の意義は非常に大きいと思います。
- ・柗谷先生は語りに動作、手ぶりが付いて、身をのり出して聞いてみたくになります。
- ・うらやましい。リーダーがあるから育っているのですね。リーダーの力ですね。
- ・柗谷先生が南部弁を話すと津軽の方々が聞いたことがないというのに驚きました。比べることの面白さを実感しました。
- ・語るうえでお話をそのまま行うのではなく、その型をくずして人を楽しませようと工夫を行ったり、なんととっても空気を生み出す、先生の話し方にとっても感動しました。

Q5.研修会：南部昔コキャラバン隊による方言紙芝居の感想

- ・楽しい浦島太郎をみさせて頂きました。
- ・発想が面白かったです。チームワークも良さそうだし、向上心が強く感じられました。羨ましい限りです。
- ・新しいことにチャレンジしつつ、根幹を大切にしながら積極的に活躍する団体になってほしいです。
- ・活動の中が広いというのが感じました。私も、子供達への語りに、紙芝居風をまねをしてみたいなと思いました。
- ・工夫は大事！紙芝居、身振り手振り等、少し考えたい（自分のことです）。
- ・目からうろこです。紙芝居おもしろい発想です。まねしたいです。子供にきょうみをもってもらえると思う。聞いて楽しい、見て楽しいです。
- ・読むことから無理せずかたることに移行したのが素晴らしい。工夫した、楽しいやり方でした。人数多く協力し合っているのが見えるようでした。
- ・語ることが好き、というのが伝わってくるお話でした。やはり1人で行うのではなく人がたくさんいればアイディアや、語るうえでできるパフォーマンスもたくさんでくるのでとても良いと思いました。

Q6.地域の方言について、保存・継承していく必要はあるか？

①	大いにある	1 1
②	ある程度ある	2
③	わからない	0
④	あまりない	0
⑤	全くない	0
未記入		2

その理由は？

- ・言葉の大切さ、持っている力を残してほしい。
- ・今村先生の午前中のお話でもありましたが、方言はその土地の文化だと思っています。絶対に守っていくべきです。
- ・言葉のみではなくイントネーションも失われず継承されるためには受動的な活動では限界があると感じています。
- ・私は、小学校の時、学校より、津軽弁の会話禁止令が出ました。
- ・子供だけでなく、若い大人の方に、自分の郷土のすばらしさを受け継いでもらいたい。
- ・自然に…は無理。意識的に広めないといけない。
- ・継承だと感じました
- ・津軽弁と南部弁の違いが青森県でも知らない人がいるのだから残したい。
- ・日本語学者は基本的にことばの生死に干渉しないものと思っていますが、記録し公開することが継承につながるとしています。

Q7.今後のこの会に関するご要望

①	今後も定期的開催してほしい	1 1
②	会誌・会報など情報発信の場があればいい	1
③	その他	0
未記入		4

具体的には？

- ・皆さんと会って交流を通じて、他のグループからたくさん言葉を学びたいと思っています。
- ・有意義な会へご招待いただきありがとうございます。今後の開催も期待しています。
- ・勉強になることが多いので、またぜひ参加させて頂きたいです。

3. 南部弁さみっと in 八戸 2019

第7回南部弁の日

3. 「第7回南部弁の日 南部弁サミット in 八戸 2019」

2019年12月7日(土)、八戸ポータルミュージアム はっちにて、弘前学院大学・岩手大学・南部弁の日実行委員会の共催のもと「第7回南部弁の日」を開催した。また、青森県教育委員会、八戸市教育委員会にご後援いただいた。「南部弁の日」は昼の部と夜の部に分けて行われた。

1階「はっちひろば」にて14:00～15:30にかけて行われた昼の部「たくさんの昔コを楽しみましょう」では、青森県の津軽弁、下北弁、南部弁の他、岩手県釜石市の語り部の方による語りや紙芝居、方言劇などが行われた。夜の部「南部弁さみっと in 八戸 2019」は、17:00～19:00に2階シアターで開催され、南部弁や津軽弁、岩手県釜石市の語り部の皆さんの語りの他、方言研究家の渋谷伯龍氏による、津軽方言を中心とした青森県の方言に関する講話が行われた。

様々な地域の方言を耳にすることで、方言が持つ魅力や面白さについて確認する機会となった。

3.1 『たくさんの昔コを楽しみましょう』

1階「はっちひろば」で行われた「たくさんの昔コを楽しみましょう」では、津軽、南部、釜石の話者の方々による語り、紙芝居、演劇などが為された。今年は話者の方の年齢層も幅広く、八戸聖ウルスラ学院高校3年生の佐々木香乃さんや、八戸市立明治中学校1年生の皆さん17名にもご参加いただいた。また、当日飛び入りで小学5年生の一二三華月さんによる方言訛り歌も披露された。観客の方々からは笑いが起こり、終始和やかな雰囲気であった。

以下は当日のプログラムである。

『たくさんの昔コを楽しみましょう』プログラム

司会：榎谷伸夫氏(八戸童話会・語るびゃ語るべし 青森県の方言の会・会長)

1. 【紙芝居】

越膳昌子「天狗の管弦」(むつ)

金浜良子・下坪利都子「浦島太郎」(八戸・南部昔コキャラバン隊)

2. 【語り】

佐々木香乃「フウフウパタパタ」(八戸聖ウルスラ学院高校・3年)

田名部綾乃「避けられない歳取り」(八戸)

北村弘子「七福神のかがととど」(釜石・漁火の会)

中村洋子「山の背比べ」(八戸・南部昔コキャラバン隊)

千葉涼子「娘と面こ」(弘前)

榎谷伸夫「殿様どそばはっと」(八戸)

3. 【方言劇】

明治中学校1年生「サルどカニの話」(八戸)

次から、話者の方々のご厚意により紙芝居、これまで文字化されていない語りの文字化、方言劇の台本を掲載する。〈 〉で括られた部分は、共通語訳を補った。なお、校閲はご本人による。

「天狗の管弦」

語り：越膳昌子(むつ)

画：土佐そう子



下北の昔話「二〇一一制作」

脚本 越膳昌子

絵 土佐そう子

天狗の管弦

①

むがし むがし

下北の山奥に 三人の天狗あ住んでいだん

だど

この天狗だぢあ はあ いたずらこぎで

村のあつちこつちさ行つてあ悪さして

村の人どの大騒ぎする姿見では 喜んでい

たんだど

.....間.....

さて

一人目の天狗あ



②

むつ市の二又^{ふたまた}ってへる村^{むら}の山奥^{やまおく}さ

『天狗林^{てんぐばやし}』って呼^よばいでら所^{どこ}あつてごこさ住^すんでらのが

“二又天狗^{ふたまたてんぐ}”であつた

この天狗^{てんぐ}

空飛^{そらと}びまわるのあ得意^{とぐい}で 今日^{きょう}も 自慢^{じまん}の鼻^{はな}は

まだまだ高^たくして

二又天狗

「どおら！今日^{きょう}あどこさ行^いつておどがしてやるがな」って
村々^{むらむら}の上^{うえ}ば

“びゅう びゅう”風音^{かざおと}たで飛^とび回^{まわ}っていだら

二又天狗

「おおっ！あそごにすべ！」

ほりゃ〜二又天狗^{ふたまたてんぐ}さまのお通りだああ」

.....さつとぬく.....



③

“びゅう びゅう”

「ゴケッー ゴケッー ゴケッコー！」

にわとりあおどろって 卵あ産まなぐなるし

「ヒヒーン ヒヒーン！」

放飼いの馬つこあ

とんでもねえ所さ 走って行ってまったど

それば見で

二又天狗

「あつははは！ おもしろえ おもしろえなあ」つ

て

高え鼻ば ぐいっと上さ向げで

大笑いする

二又天狗であった



④

二人目の天狗あ

同じむつ市の角違いつてへる村の山奥に

『天狗岩』つて呼ばいでる 大つきた岩あつて

その 岩穴さ 住んでらのが

“ 角違天狗 ” であつた

この天狗

大雨ふらすのあ得意で

村の人 一生懸命 山仕事してば

いたずらしだくなつて飛んで行くんだと

角違天狗

「さあくとと 今日あどこの山さ行つて見がな？

おっ！ あそごいいなあ」つて飛んでつた



親方

「吾作！今日あ 天気いいして 仕事はがいぐなあ」って
らきや 急に雨あ

“ザアー” っって降って来た

吾作

「親方！こいだば 今日の仕事あ はあでぎね」

そこで しかだなく帰りの支度せば まだパツと晴れで

親方

「ありやあ？ 天気になたど 吾作！まだ始めが」って

締まってまった ノゴやマサガリ まんだ出し始めば

“ザアー” っって大雨降ってくるんだど

それば見で

角違天狗

「わっはは どうだ！」 っって大笑いして喜ぶ

“角違天狗” であつた

⑤



⑥
三人目の天狗あ

脇野沢滝山^{わきのさわたぎやま}つてへる 村の山奥^{むらのやまおく}に

『クラデエ山^{やま}』つて呼ば^よい^どこ^じる所あつて

その岩山^{いわやま}さ住^すんで^らのが

“クラデエ天狗^{てんぐ}”であつた

この天狗^{てんぐ}

大風^{おおかぜ}おごすのとくいで

村^{むら}の人達^{ふとだち}が 積^つんだ わら束^{たば}だり 干^ほし物^{もの}だりば

吹^ふきとばしてあ 喜^{よろこ}んでいたんだど

クラデエ天狗

「さあして

今日^{きょう}はあ 浜^{はま}の方^{ほう}さでも行^いつて見^みるがな」つて

涙^{なみだ}さぶつ飛^とんでつた



⑦

村人

「やあ 今日もいい潮だなあ

あれ？

風っこあふいできたなあ」ど思ったきや

村人

「わあっ！わあっ！わわわわ」

「とっけらがる とっけらがるじゃ！」

あっという間に 大風にあおらいで 船あ

グラグラど揺れだしたもんだから

魚とつてら人ど 船の上で 大騒ぎこいだど

それば見で腹かかいで喜ぶ

“クラデエ天狗であった”

.....ゆっくりぬく.....



⑧

そのころ

天てんの地蔵菩薩じぞうぼさつさまは

天狗てんぐだちの悪わるさは じーと見みでいらした

そしてある時とき

三人さんにんの天狗てんぐだちば呼よび こう話はなされだのだった

地藏菩薩さま

「天狗てんぐだちよ

人間にんげんは人間にんげんで一生いっしょう懸命けんめい働はたらいておる

それをいたずらして 喜よろこんでいるとは情なさけない

それよりも 今いまがら お前まえだちに これを与あたえる

がら

これからは 霊場れいじょう恐山おそれざんをしつかり守まもるようにな」と

三人さんにんの天狗てんぐに 地藏菩薩じぞうぼさつさまは・・・



⑨

「二又天狗」には 笙を

「角違天狗」には 横笛を

「クラデエ天狗」には 太鼓をそれぞれお与えになった

地藏菩薩さまがら頂いた 管弦を手に

三人の天狗たちは

その日がら

宇曾利湖のほとりの 大尽山の上で 管弦の合奏を

しては 霊場恐山を守っていたんだど

.....ぬきながら.....

ある日のごと



⑩

一人の男が 宇曾利湖の 極楽浜の砂ば

カマスさ やつこらせど詰めこんでいだんだど

それば見つけた天狗だちは

二又天狗

「こらあ！ なに罰あたりだごとしてらば」

角違天狗

「霊場恐山のものは 商売さ持ち出すとは 許せね」

クラゲエ天狗

「この天狗さまがこらしめでやるぞ！」

怒った天狗だちあ

.....さつとぬく.....



⑫
それからは 村々の人どの間では
おそれさん 恐山を 汚すよんだ事すば
かなら 必ず天狗だちの管弦が聞こいできて
おおかせ おおあめ 大風と大雨あおごるって へらいるようになったん
だど

・・・間・・・

いたずらこぎの天狗だちも

じぞうぼぎつ 地蔵菩薩さまの言いつけば守って

いまま 今でも

れいじょうおそれさん 霊場恐山をしっかりと 守っているんだべの

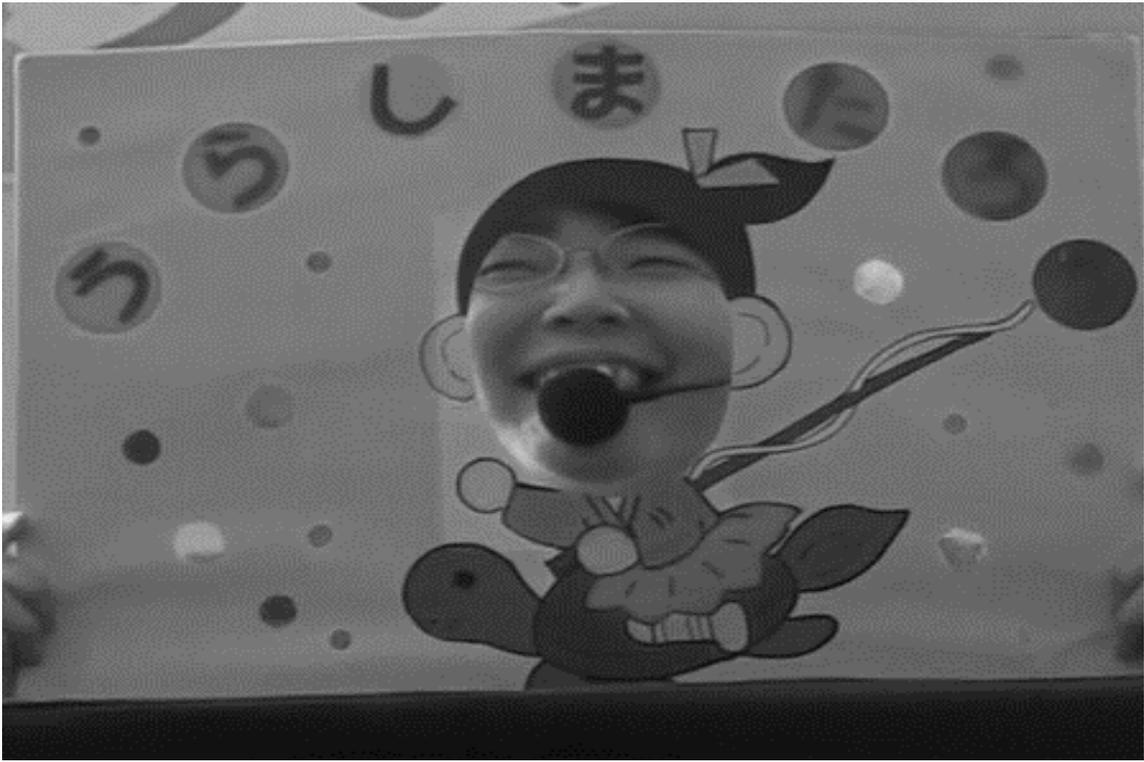
どんとはれ



「浦島太郎」

語り：金浜良子・下坪利都子(八戸・南部昔コキキャラバン隊)





むがーしむがし、海辺の近くの村に、浦島太郎ずわげもの〈若者〉、かっちやど二人でして暮らしておりあんした。

太郎あ毎日沖さ出て、魚を採って暮らしてらった。



「あーあ。今日はさっぱり魚採れねがったなあ。ん？
童んどまんだ、なーに騒いでらっけえ、何かあったん
だべか。」

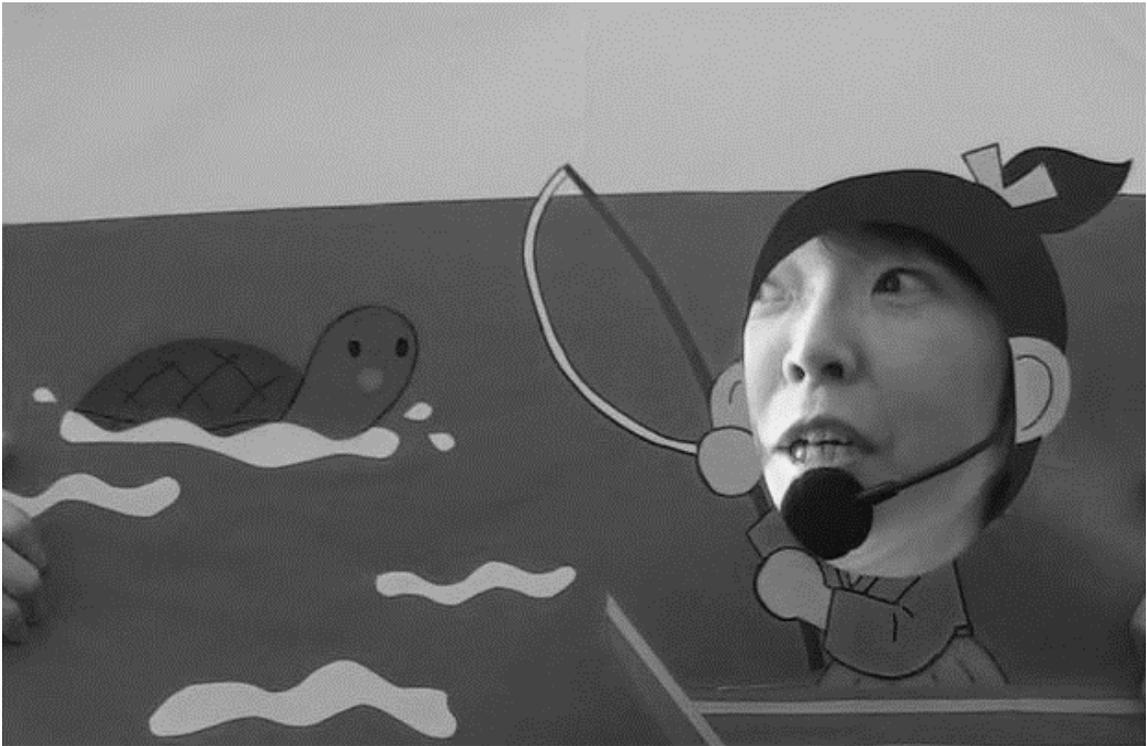
太郎はがんだの傍そばこさ行ってみたっきゃ、ちやつこ
い〈小さい〉亀っこよ、棒でたでだりへたたいたり〉、
突つついだりして、いじめでいだったのさ。

「こおりゃ、何やってらっけ、なあして亀よいじめる
のえ。見ろほら、メロツ〈涙〉流して泣いてらでばな。
弱い者いじめしねで、海さ戻すべあな。亀さん、童子ん
どあ、すまねえごどしたなあ、ケガしねがったか？い
だがつたべせ、氣いつげで帰るんだよ。へばな〈それじ
やね〉。」



太郎は、いじめられて弱つてた亀よ、助けであげあん
したんだ。

亀あなんけもなんけも〈何回も何回も〉振り返り、振
り返り、海の沖の方さ行ってしまいました。



何日かたったある日のことだ、太郎が沖さ出て、
魚っこ採ってだっきゃあ、

「浦島さーん、浦島さーん」

「ん？でえが、わよよばったが（誰か私を呼びましたか）？」

「浦島さーん、ここですよー」

「ありゃ、おめーもしがへば（もしかすると）あの時の亀でねーが？」

「その節は助けでいただき、ほんとね（本当に）ありがどがした。あの時のお礼に竜宮城に案内したのですが、どうぞ、私のへながっこさ（背中に）乗さってけろ。」

「いらねでば、お礼だばなんだば、それに亀さん、おらー、ほったらね（そんなに）泳げねすけなあ。」

「それだば心配いりあんせん、私のへなか（背中）さ乗さってければ（乗っていれば）、泳げなくても大丈夫ですから、さあさあ、どうぞどうぞ。」

「竜宮城ずども気になるし、へば、ちよごつとだけ行ってみるがな。」



太郎は、亀の背中さ乗ると、ぶぐぶぐぶぐぶぐど、
海の底さ潜って行きあんした。

まんずまんず、シュノーケリングもつけねでだよ。

「いや海の中だのさ、まなぐ〈眼〉も開けらえるし、
息も苦しくね。それにしてもうまそっだ〈おいしそうな〉
魚ばりいるごどー。ん？おーおー、たまげだ〈すごい〉
あそごさめできだ〈見えてきた〉立派だあ建物あ、あり
やー。」

「はい、あれが竜宮城であんす。」

むかしむかし浦島は 助けた亀に連れられて
竜宮城に来てみれば 絵にも描けない美しさ。



竜宮城では、門の前で、うづくしい〈美しい〉乙姫様が、待っております。

「初めまして、わだしあ、浦島太郎と言うもんです。今日あ、竜宮城さ、わよ〈私を〉よばってけで、ありがとうございます。」

「浦島さん、その節は亀を助けてくださって、本当にありがとうございます。お礼にたくさんご馳走を用意してますので、どうぞ、ゆっくりしていただくさいね。さあ、中へどうぞ。」



「うーん、うめこどー。こつたらに〈こんな〉うんめえごつつおー〈おいしいご馳走〉食うのあ、はずめでだあ〈初めて〉。おまけに、鯛だのヒラメが、めのめえ〈目の前〉で見事だ踊りこよ見へで〈見せて〉けるし、いやあたまげだ〈びっくりした〉。」

こうしているうちに、あつという間に三日たちました。

「あー、そうへれば〈そう言えば〉、かつちや今頃何してらべな。わのこどば案じでるんでながべが。

こうやっていらいね、家^えさ戻らねば。」



「乙姫様、オラあ十分に楽しませてもらいあんした。そろそろ家こさ帰りあんすどうもどうも、ありがとうおがした。」

「そうですか、いつまでもここにいてほしいのですが、仕方がありませんねえ。あなたにこの玉手箱を差し上げましょう。これがあればまたいつでも竜宮城にこれますからね。でも、ひとつだけ約束をしてください。決してこの玉手箱を開けてはなりませんよ。」

「はあ、わかりあんした。開げればわがねのなへだめなんですね」ありがとうあした。」

こうして、太郎は亀の背中に乗って村に帰って来あんした。



「なんだが村の様子っこあ変わってしまったなあ。わの家っこあどこさへどこに」いったべ。村の人も見だこどねえつらばりへ顔ばかりだし、そんだ、あの人ふとがら聞いて見るがな。」
「あの、この辺りさあつた浦島太郎ず人の家っこお、知らねがい」つてきいだつきやあ

「ああ、ずんぶと昔にそつたら名前この人いたんだども、何百年もそこの息子あ帰つて来ねつて話だよ。今、はあ、家もねし、誰も居ませんよ。」

つて、おへらえだへ知らされた」。

なんと竜宮城で過ごした一日は、地上の百年と同じで、太郎は知らないうちに竜宮城で二百年もの月日を暮してらつたのさ。

「あーあこれからどうやって生きてけばいかべ。あつ、そんだ、この玉手箱よ開ければ、元さ戻るがも知れねえ。」



そう思った太郎は、あれほど開けばわがねって約束したのに、元さ^{もと}戻りたくて、玉出箱を開けでしまったんだよなあ。
したつきやなあ何ということか、箱からもくもくもくもくと煙が出てきて太郎はあつという間にじさまになってしまいかんしたのさ。

はい、これで浦島太郎の昔こはどつとはらい。

「フウフウ パタパタ」

語り：佐々木香乃(八戸聖ウルスラ学院高校3年)

むが〜し、むがし、あつたじ〜。

ある所どご おしよ さまさ和尚様ど二人の小僧こそっこアいだつた。

和尚様ア、なもかも〈とても〉餅もちっこよ好ぎで、晩ゲになれば、小僧っこんど〈たち〉よ、
「早く寝ろ、早く寝ろ。」って、寝かせてしまる。して〈そして〉、小僧っこんどア寝でしまれば、炉で餅はやっこよ焼いで、“フウフウ”ど餅あぐっこ冷ましながら、“パタパタ”ど、餅あぐっこさ付いだ炉の灰よはだぎ始めだ〈叩き落とし始めた〉。して〈そして〉、一人で喰ってしまった。

小僧っこんどア、なんとかた〈どんな方法を使つても〉その餅もちっこよ喰つたくて、喰つたくて、考えに考えだ。

ある日の晩方ぼんかた。寝る時に、一人の小僧っこが、

「和尚様、和尚様、ワ〈私〉よこれがら呼ぶ時ア、フウフウって、呼ばつてくんせエ〈ください〉。」

「ああア、いがベエ〈いいだろう〉、いがベエ。」

したっきゃ〈そしたら〉、も一人の小僧っこも、

「和尚様、和尚様、ワよこれがら呼ぶ時ア、パタパタって呼ばつてくんせエ。」

「ああア、いがベエ、いがベエ。」どいういうごどになった。

さあ、晩ゲになった。

和尚様に寝ろどへられだんで〈言われたので〉、小僧っこんどア、部屋さ行つて、寝だふりよしていだ。

和尚様ア、いつつもの〈いつもの〉ように戸棚がら餅もちっこよ出してきて、炉で焼いだ。

餅もちっこア焼げだどごで〈ので〉

“フウフウ”、“パタパタ”

“フウフウ”、“パタパタ”

餅もちっこよ冷ましながら、付いだ灰よはだぎ始めだ。

小僧っこんどア、今だど思つて、

「はア〜い!!!」ど叫んで、起きではへで〈走つて〉来たじおん。

和尚様ア、とうとう小僧っこんどさ、餅もちっこよけねばなんなぐ〈あげなければならなく〉なつたじおな。

はい、これで、「フウフウ パタパタ」の話っこアどつとはれエ〜。



「避けられない年取り」

語り：田名部綾乃

むが～す、むがす、あつたず～。

ある所さななたかた〈どんな方法使っても〉歳よ取りたぐねえど念じている男あ、いだおどこった。〈いた〉ある年の、暮れも押し迫ったころだ。

「あ～、歳イ取りたぐねえ。あ～、歳イ取りたぐねえ。」その男ア、で～つたらだ〈大きな〉声よ、張り上げで、村の街道けんどよ歩っていた。したどこで、村の人んどあ、笑いながらおじょくった〈からかった〉。

「はははっ...あのおよ、いくら歳ば取りたぐねえってへつたつて〈言つたつて〉、いが〈お前〉ばかり歳よ取らねえず訳にはいがながびゃあな〈いかないだろうよ〉。」

「うるさしねえ〈うるさい〉。わあな〈俺はな〉、年取りの晩ゲには、大根穴でえごあな〈大根の穴〉さ隠れで、年神様ど出会わねえようにする。せば〈そうすれば〉、歳よ取らながべ〈ないだろう〉。」

そやってらうちに〈そうしているうちに〉大歳の日あ来た。もちろん、晩ゲになって、男は自分の家の大根穴え でえごあなさ隠れたずもな。

さあて、さて、年神様あ、袋さのろ～つと〈たくさんの〉歳よ入り詰めで、村の人々にさ歳よ配っていた。

したんどもえ〈けれども〉、急にあの世さ行った人んどがおつて、袋さのろつと歳よ余したじおん。

「じゃい、や～い〈あ～あ〉。どやすべが〈どうしたらいいだろう〉。こつただに〈こんなに〉良い歳あ余ってしまったであ。持つて帰るのも重たがべしけえ〈重たそうだし〉、クウ〈面倒〉だし.....。どごだりさ〈そこらじゅうに〉、どんずぐず

〈やたらに〉なげる〈捨てる〉わけにもいがねえし.....。はあ～参つた、参つたなあ～。」年神様あ、村中を捜して歩いてまわつた。

したつきゃあれ〈そしたら〉、村の外れの畑さ、おっきだしねえ〈大きな〉大根穴でえごあな〈大根の穴〉があるでねか。

「こごだ〈ここだ〉、こごだ。こごあ、良いごつた〈良さそうだ〉。こごさなげでいぐが。」で、歳神様の袋をガバ～つと開げで、さがしまに〈逆さまに〉ドバつとぶちまげた〈放り投げた〉じおん。

じゃい、じゃ〜い（あらまあ）。大根穴さ、隠れででえごあないだ

おどこ男の頭さ、歳あ、ごさ〜（どさ〜）と降りかがったんでねえが。

さあ、ごどで、ごどで〜（さあ、大変大変）。男おどこの頭、みるみる白髪になって、白髪になったどびっくらこいているうちに、髪の毛あ、ぼろぼろ抜けて、テッカテカの禿げ頭になったじおん。それだけでねえ。顔は皺あ寄って（皺ができて）、腰あ曲がったずもえ。

おどこ男あ、よ〜やらやっつとで大根穴がら、すりまって（はいずりまわって出はってきたんども）、がっばらやど（完全に）年寄りになっていだったじもえ。

なす〜（だから）、歳ずものあ、なんぼ大根穴さ隠れでいだって、ぼっかげで来て（追いかけてきて）、歳よ取らねばなんねえずこどだえな〜。

はい、これさで、「避けられない歳取り」の話っこあ、どっとはれ。

「山の背比べ」せえくら

語り：中村洋子（八戸・南部昔コキヤラバン隊）

ある日のごどはしかみだけであるす。階上岳くじひらだけど久慈平岳あ、お互いに自慢話っこよしているうちに、どっちが背が高いがどいう話になりあんした。

「それは決まっているべ。なんとへったって（言っても）オラの方だ。」

「な〜にへってらっけ （言っているんだ）、わんつかだんども（少しだけれども）、オラの方あ、イが（お前）より背あ高い。」

どくぢもめ（言い争い）して、なかなか決着がつがながつたであんす。したどこで、どっちがらどもなぐ、

「ようし、したら、公平な審判よしてくれる者よ探して、高さをくらべてらうべし。」

したどごで、誰さ頼むがど、辺りよ見回した結果、はるか南西の方にそびえでいる岩手山さ頼むびゃ（頼もう）ずごどに （ということに）なりあんした。

さて、頼まれだ岩手山は、「よ〜しよし、引き受けだ。オラどの所ごんげんの大ワシ権現の使いよしているワシさ、その役目ば言いつけてくるすけ。」

どへって（言って）、で〜ったらだ（大きな）ワシよ早速使いに寄越してくれあんしたんだ。



ワシは、「そつたらごどぐれえだら、空がら眺めて比べでみだら、すぐ見当あつぐべ。」
どばがり、階上岳ど久慈平岳の上よ、ぐるぐる飛んで眺めてみだんだども、どっちの方角
がら比べで見でも、さっぱり見当がつかながったずもえ～。あまりげえに〈あまりに〉、背
の高さが同じぐらいだったからだなす。

「これだばどうにもなんねえ。イがんど〈お前たち〉の背の高さよ比べるには、特別な
道具よ使つて測らねばわがね〈だめだ〉。オラあこれがら、はるか彼方からのくにの唐の国まで行つて、
道具よ見つけて〈見つけて〉借りてくるすけ〈から〉、それまで静かに待つててくんせえ。
こう言い残して、ワシは唐の国へ飛んで行つてしまひあんした。

あどにのこ残されだ久慈平岳と階上岳あ、急にあんずられ〈心配になる〉できあんした。な
にしろ、岩手山のワシが戻つてくれれば、すぐど〈すぐに〉決着あついでしまる。どっちが
勝つにしても、わんつか〈少し〉の差だべし、なんとかんだ〈どんなことがあつても〉勝
ちたいと思ひあんしたんだなす～。

かぐなるうえは、体がわんつかでも大っきぐ、背がちょぺつと〈少し〉でも高く見る工
夫よしねばど、階上岳も久慈平岳も考えだ。したどごで、二つの山あ水よがぶがぶ飲み始
めあんした。水よてゑいっぺえ〈限界ギリギリまで〉飲んで、わんつかでも、体よ大っき
ぐ見せべどしたんだべなす。

もうハア、これ以上あわがね〈ダメだ〉ずくらい水よ飲んで待ち構えておりあんしたん
ども、唐の国まで飛んでいったワシはながなが戻つて来あんせん。

そのうち、あんまし〈あまりにも〉一回にのろつと〈たくさん〉水よ飲んだもんだすけ、
だんだんと我慢が出来なくなつてきあんした。そごで久慈平岳あ海の方よ向いで、しゃあ
しゃあどやりだしあんした〈小便をし始めた〉。

階上岳の方もつられで、陸の方よ向いで、これまんだ勢いよぐしゃあしゃあど始めあん
したんだ。じゃいやいやいやい〈まあまあまあま〉！なんと、このとき放出した水の勢
いあものすごいものであんしたずもえ～。まんず、海。この時、海あ掘れで、三陸沖の海
あ深ぐなつたずす〈という〉、陸の方では、大地が掘れで、島守盆地おがが出来だずどらしが
ん〈ことらしい〉すえ？本当だべが？

そうこうしているうちに、ようやつと〈ようやく〉で、唐の国まで飛んで行つたワシが
戻つてきあんした。「どうもどうも、待だせで申し訳ねえ、申し訳ねえ。ながながちょん
どいい〈丁度いい〉道具あなくて、ようやくやつと〈ようやくのこと〉探してきたのが、こ

の長い金の樋だ。これよ使って測ったら、一目瞭然、背の高さはすぐど分かるべ。」

ワシがはるばる持参してきたのあ、ものすんげェ〈すごく〉長い金の樋であんしたんだ。この長い樋を、二つの山のとっぺんさ渡して、それさ水よ入れて、背の高さよ比べるびや〈比べよう〉ずごどだ。んだべなす。

「どんだっきゃ？名案だべ？早速取り掛がりたいいども、階上岳に久慈平岳よ、このやり方さ文句あながびやあな〈文句はないだろうな。〉」

頼んで審判になってもらったワシのやるごどさ、階上岳も久慈平岳も依存があるはずあねえものなす。早速、ワシは仕事に取り掛がりあんした。

ワシは慎重に二つの天のとっぺんさ、金の樋を渡してのせだ。それがら水よ汲んできて、樋の真ん中の辺りさ水を注ぎ入れあんした。ワシの考えでは、水は高い方から低い方さ流れで、そごで勝負がつぐ筈であんした。したんども、したんどもなす、水は両方さ流れで、そのまんま動がなくなってしまうあんしたんだ。「じゃいやいやいやい、これは弱った。せっかぐ立派だ道具よ借りできたのさ、これではオラの見立てと同じ結果になってしまう。ん・・・、このまんまだば勝負なしの引き分けだ。それにしても、全ぐ同じ高さとは不思議だなあ～どりゃが、もう一回オラのこのまなぐ〈目〉でたしかめでみるごどにするべ。」

ワシはぐだぐだ文句よ並べながら、空さ舞い上がって、ゆっくりど輪っこよ描きながら、二つの山のげェ～ぐり〈周囲〉よ飛んでみあんした。その時、ワシのまなぐさ、久慈平岳の足元さ、なんだがごちゃごちゃしたのが見えあんしたんだ。

「おい、久慈平岳、それあ何だっけ？」ワシが叫びながら久慈平岳の足元さ舞い降りて、よぐよぐ見だっきゃ、な、なんと、それは馬が履ぐ古ワラジよ積み重ねで、その上さ立っておりあんしたんだな～。「こんの、卑怯者あい！」

ワシがその古ワラジよ蹴飛ばしたとたんに、二つの山に渡してあった金の樋は、急に南の方さ、つまり久慈平岳の方さ傾いで、ものすんげェ音よたでで流れ出し、海さ落ちで、海の底さ突き刺さってしまいあんしたんだ。

なんでもなす、海の底さ突き刺さった金の樋は、わんつかちょぺっと〈ほんの少し〉だげ海の上さ頭よ出して、その出ている所が金華山になりあんしたずえ。本当だべが、なす。

まずえ、こうやって階上岳ど久慈平岳の背比べは、階上岳さ軍配が上がるどいう結果になりあんしたんだ。

この間、地図よ見あんしたんだ。しったきゃなす、階上岳は 740m、久慈平岳は 706mど

なっておりあんした。やっばし階上岳の方が高^{たが}がんとしたんだなす。

はい、これで「山の背比べ」はどっとひとはらい。

「娘ど面こ」

語り：千葉涼子（弘前）

昔^{むがし}、ある村さ、母親ど娘ど暮らしてら家っこあつたど。父親^{ちちおや}、早くに死んでまって、わんつかだ畑^{はだけ}こ耕して、その日食うのもやっとのへずね〈苦しい〉生活^{くらし}していだんだど。

娘のお千代、13 になつたどこで、山ひとつ越えだ、町の酒屋さ奉公に出る事になつた。お千代の家さ、いつがらあつたもんだがしら、柱さおかめの面こぶら下がってあつたど。

何年も煙被^{かぶ}っていだどこで、煤^{なづき}けでまって、頬^{つら}ぺたも額^{しわ}も輝割れで、その面、まるで皴^{しわ}寄^{しわ}ってらオガ〈母親〉どふとじ〈同じ〉であつた。

奉公さ行けば、二年や三年だば〈では〉家さ戻^こって来^もらいねど思^もって、お千代、その面こば奉公先さ持^{すま}って行^{すま}って、オガだど思^{すま}って女中部屋の隅^{すま}こさ置^{すま}いだおぼぎ〈行李〉の中さ入^{かぶ}れで、手拭^{かぶ}い被^{かぶ}せでおいだ。

朝^{あさま}起^{あさま}ぎれば「オガ、きょうもまみしけて〈元気で〉でらが。我^わ、これがら仕事して来るはんで。」夕方戻れば「オガ、今仕事終わったじゃ。きょう、こした事や^{はなし}って旦那樣さ褒められだ。こしたきや叱^{はなし}らいだ」ってその日あつた事ば何でも面こさ話^{はなし}して聞^{はなし}がせで、他人の家で一人で仕事するへずなさ〈辛さ〉、淋^{さび}しさ、心細^{さび}さだのば紛^{さび}らわせでいだど。

同じ酒屋で働^{わけもの}いでら若者、時々女中部屋の前通ればおぼぎ〈行李〉のぞいで、喋^{しゃべ}てるのば見^{しゃべ}で、「あの娘一体何や^{しゃべ}ってるんだべ」って思^{しゃべ}って、誰も居ね時にコソラッと〈こっそりと〉部屋^{すず}さ入^{すず}って、行李の中見^{すず}だきや、真黒^{すず}に煤^{すず}けだオガメの面こ入^{すず}っていた。

「何だば、こした面^{はなし}こど話^{はなし}してらんだな。」若者、わんつか悪戯心だして、般若の面こば買^{はなし}って来て、オカメの面こどとりかえておいだど。

お千代、仕事終わって、行李の中見^{みたい}で、腰ぬげるほどびっくりした。般若も夜叉も見^{みたい}だ事ねえ娘、薄暗^{うすぐ}れ灯^{あがし}の下で見^{みたい}だオガの顔、「わい苦し^{へず}じゃ。切^{へず}ねじゃ。誰か助^{へず}けでけろ」って叫^{みたい}んでいる様^{みたい}に見^{みたい}えだ。「あれえ大^{みたい}変だ。オガ、死^{みたい}んでまるんた〈死^{みたい}んでしまう〉病^{みたい}気^{みたい}さ患^{みたい}ってらじゃ。早^{みたい}く戻^{みたい}ねばまいね〈戻^{みたい}らないといけない〉。」

お千代、旦那様のどこさ行って、「一日でいいほんで暇こけでける」ってお願いした。

「若げ女子童一人でこの真暗だ夜道、山越えで行ぐんだば危ねくてまいね。朝、明るぐなつてがら行け」って止めるのも聞かねで、オガの家さ急いだ。

山の上の地藏様のお堂の前で、何人もの男、火囲んで酒のんで、バグチ打っていたど。

お千代、困ったど思ったばて、廻り道もねし、男達の後ばコソラッ^{おどごんど}と行くしか無^ねど思つて、静かに通り抜ける気なたばて〈なつたけど〉見つかつてしまった。「いい処さ女子きた^{どこ おなご}じゃ。アネコ、ここさ来て〈ここに来て〉お酌してけろ。」って無理矢理引っぱらいで行つたど。「アネコ、火どんどん焚いで、酒の爛してけろ」

お千代、火の前さ座つて木くべたばつて何たつて生木だもんだどこで、ブスブスど燻^{えぶ}らど。煙たくて煙てくて、目痛くて開けていらいね位目さしみて、懐さ入れでおいた般若^への面こば被^{かぶ}て、フウって思い切り吹いだど。

火、勢いよく燃え上がった時、丁度一人のバグチ打ち、娘^{ほじ}の方ば見だきゃ、モヤモヤどした白い煙の向さ、恐い鬼、口がら火吹いでいだんた〈いたように〉に見えだど。

「ワァー！！鬼いだ」って叫んだきゃ、あどの男達もみんな振り返つて見だどごで、お千代もびっくりして立ち上がった。

漆ば流したけんた〈様な〉闇^{うるし}の中で、そごだけ、ポワーッと明るくて、そごさ、口てば耳迄裂げで、目ギラギラど光らせだ鬼、バチバチど音立でで、真赤に燃えでら火の向うがら、皆とばジューッと睨んでいだ。

「ワァー！！逃げろ逃げろ。鬼さかいでまるど〈食われてしまうぞ〉」って、バグチ打ち達、ボンゴ〈うなじ〉さ足つぐ位駆けて逃げで行つた。

お千代、一体何起こつたか解らねくて、ポカンとして面こ外してみだきゃ、誰も居ねぐなた後さ、銭こいっぱい散らがつていだど。お千代その銭こば拾い集べて懐さ入れで、山坂下つてオガの家さ急いだど。

夜中に、余念無ぐ〈必死に〉戻つて来た娘ばみで、オガ、びっくりして訊聞いだど。

次の日の朝、二人して庄家様の処さ行って相談したきゃ、庄家様、

「これあきつと親とば案じて、恐い山道ば走^はけで来たお前の気持こさ、山の地藏様、バ



グヂ打ちの錢こぼ授げで呉れだんだびょん。貰っておけ、貰っておけ」って喋ってけだのば聞いて、親子二人、涙流して喜んだど。

それから、オガとお千代ど、山越えだ酒屋の旦那様が暇もらって、親子仲良く、^{しあわせ}幸福に暮らしたんだど。とっちばれ。

「殿様どそばはっと」

語り：柗谷伸夫(八戸)

むが〜し、むがし、なもかも〈とても〉狩りの好きだ殿様アいだったじ。
ある日のごどだ。殿様が狩りよした帰りに、庄屋の家さ泊まったじおな。
そごで、庄屋の家では、そばはっとよこさえて〈つくって〉、御前に差し上げだ。

※そばはっと＝南部地方では、蕎麦生地(幅広又は太)麵にたくさんの具を入れた汁物で、郷土食の一つ。似ている物に蕎麦生地を三角に切った「そばかけ」がある。

したどころが〈ところが〉、殿様のお言葉があつたじおん。
「ネギが足らん!!ネギを持って参れ!!」

ネギ?初めて聞いた。さあて、さて、庄屋の家の人んどア〈人たち〉へぎまった〈あわてた〉。「ネギ?何だつきや、それア?イが〈お前〉、知らねど?」

「知らねえ、知らねえ。何だのよそれア?」

ネギずのァ〈という物〉どつただ〈どんな〉もんだが分がながつた。げエぐり〈周囲〉の人んど〈人たち〉さ聞いたんども、誰も分がながつたじおな。

ところがでエ、村の年寄りの一人が、「あ〜、それアよ〜、きつとね〈きつと〉神社の禰宜^{ねぎ}のごどだごつた〈ことだろう〉。」

どへつたどごで〈言ったので〉、

「んだ〈そうだ〉、んだ〈そうだ〉!!そんだごつた〈そうに違いない〉!!」

早速、神社さ禰宜よ連れに行つた。

※禰宜＝神社で、宮司・権宮司を補佐する職。また一般に神職の総称。

ようやつとで〈ようやく〉、禰宜よ連れで戻つてきた。

庄屋様よろごア、喜んで殿様さ申し上げだ。

「ただ今、ネギよ持って参りました。」

とごろが、なんと!!殿様が申されだ。

「もう喰い終わった。土つちにでも埋めでおけ!!」

「ハア……？」

「ハアではない。土にでも埋めでおけ!!」

「ははア!!」

さあ、こどさが〈大変〉だ!!何にしる殿様のお言葉だもな。逆らう訳にはいがねえ。

早速、さぶろう〈スコップ〉で穴よ掘って、禰宜よ入れて、くびた〈首〉だけよ出して、土よかけだ。

「禰宜めアい申し訳ねえ。殿様ア、イが〈お前〉よ土さ埋めろってへって〈言って〉ら。こらえでけろ〈我慢してくれ〉。」

さて、あぐる朝マ〈翌朝〉だ。

ながのくち〈玄関〉よ出だ殿様ア、かど〈庭〉の土さ埋められだ禰宜めよ見っけで、どんでん〈びっくり〉した。

庄屋を問い質した。

「何だ、これは!!」

「いや、あの、その、お殿様が埋めろとお命じになったどごで〈ので〉……。」

そごで、初めて、こごわけ〈ここ〉の村の人んど〈人たち〉ア、ネギわけの〈というもの〉よ知らないどごに気わけアついだ訳だ。

殿様ア、禰宜よ掘りだしてやって、お城さ戻って行ったじおん。

して、ネギの種おへよ村の人んどさ分け与えで、ネギのおがし方〈育て方〉よ教だじおな。

それがらだんだ〈なんだって〉。村の人んどア、そばはっとさネギよ入れて喰うようになったどいうのア。

はい、これで、「殿様どそばはっと」の話っこアどっとはれエ〜。

「サルどカニの話」

構成：梶谷伸夫

出演：八戸市立明治中学校 1年生

語り：『サルどカニの話』。むが〜し、むがし、あるど所ごさ、カニっこにアいったじ。

お〜い、何なにイぼやっとしてらっけ？ 柿かきの木、みんなで柿かきの木よこさねば〜!!

柿の木1：ちょ、ちょこっと待で。この辺りは渋柿しか採れながびやな。

柿の木2：んめおいしいェ柿ど渋い柿をどやすのよ。

柿の木3：サルしぶがきァ渋柿だばなんだばかねよ。

柿の木4：それもそんだ。へだば、柿の木かきァ撒収てっしゅう。

柿の木5：(撒収しながら) あ〜あ、上手じょうずにできだど思ったのになア。

語り：へだら、話それじゃアっこよ変えるべ。むが〜し、むがし、あるどごさ、たいした稼とともぎ手かせの
カニあぎっこあいだったじ。秋あきになつて、カニあぎっこあ、稲刈りの終わった田んぼ
さ行ぼつて、落ち穂じょうずよ拾精白してつて、上手もちにしらげで、ペッタンペッタン餅つぎよして
いだったじおな。

カニ：ペッタン、ペッタン、ペッタン……。

サル：(カニを見つけて) おう、カニなアっこあい、何なにイヤつてらっけ？

カニ：(杵おを降ろす体) 見だら分もちがるべ。餅つぎしてら。

サル：それはこどだ。どりゃが、すけでやる。
オラが代わりについでやるウア。

カニ：いらね、いらね。自分やるからのごどは自分でやすけ。

サル：カニ遠慮っこあい、なんもじぎしなくてもいいでばな。身体からだのちやっこいウがより、
オラほうがついだ方仕事が早く終わるがはがだるうにァいぐべに。オラまがさ、任せでおげ。ペッタン、ペッタン、
ペッタン……。

サル：あ〜、こわエ。腰いたア痛くて、こしっぽね腰を真っ直ぐできないアのびねエ。オラたのだからがついだんだすけ、
この餅もちァ、み〜んな、オラ全部が喰くう権利くァある。
ダメダメだだダメだよ。

カニ：わがね、わがね〜!!

サル：どりゃが、アッチチチ……!! (おいしそうに食べ始める体) ムシヤムシヤ、
ムシヤムシヤ。あ〜、うまぐねエ。よぐこつたらおいしくないのよ喰こんなうもんだな。ムシヤム
シヤ、ムシヤムシヤ。

カニ：オラの餅もちだ。オラの餅もちだ〜!!

サル：あ〜、うまぐながった。カニおいしくなかったっこあい、ウがお前の分少しよわんつか残のごしておいだすけ、
ホラほらが、喰くえるもんだら喰くつてみろ〜!!

語り：なんと、サルうすァ、白けよ足で蹴と飛ばして、ゴロゴロころ転がしたんでねエがっ!!

白：ゴロゴロゴロゴロゴロゴロガロ。ゴロゴロゴロゴロゴロゴロガロ……。

カニ：〜っ!! わんつか残のごった餅もちっこあどろくるまになつて喰泥だらけれなくなつたっ!! エ〜
ンエ〜ン、エ〜ン……!!

サル：カニっこアい、ありがっとうな。餅っこ喰ったつきや、はらアつやぐな^{もち く ら お腹がいっぱいになった}った。
それじゃ またね～
 したら、まだな～。

語り：あっ？ クリア出はって来た～。

クリ：カニっこアい、カニっこアい。どやした^{どうしたんだい}つきや？ な～して泣い^{どうして}でるのえ？
どうしたもこうしたも ない

カニ：どやしたもこやしたもねエ。かくかくしかじかで、サルっこの野郎にこな^{いじめられた}され
 だ。エ～ン、エ～ン。

クリ：ちゃっ!! 酷い奴だ、サルこの野郎。
ふんど やづ

語り：あっ、次がら次と出はって来た。ん～と、ビクタリビクタリ出はって来たの^{べご くそ}ア
 心張棒。ベッタラベッタラ出はって来たの^{ばり}ア牛の糞。ピョンカラピョンカラ出
 はって来たの^{ばり}アタダミ針。

三人：カニっこアい、カニっこアい。どやした^{どうしたんだい}つきや？ な～して泣い^{どうして}でるのえ？
どうしたもこうしたも ない

カニ：どやしたもこやしたもねエ。かくかくしかじかで、サルっこの野郎にこな^{いじめられた}され
 だ。エ～ン、エ～ン。

三人：ちゃっ!! 酷い奴だ、サルこの野郎。
お前たち こっちへ こ このままだと かわいそ

クリ：ウがんどアい、こっちや来お。このまんま^{かわいそ}だば、カニア可哀想^{かわいそ}った。
そうだ

心張棒：ほんだ、ほんだ。このまんまにはしておげねエ。
オレ たち 手を貸せば

牛の糞：オラんどがすければ、なんとかなる。

タタミ針：サルよやっつけるいい方法アあるはずだ。

クリ：カニっこアい、カニっこアい。

クリ：カニっこアい、カニっこアい。
もう

心張棒：ハア、泣がなくていい。

牛の糞：オラんどが、力を合^えわせで、サルよやっ^{かたぎう}てけでけるウア。

タタミ針：これがら、サルの家っこさ行^{一緒に}って、敵討ちだ。
一緒に

四人：あべっ!!

五人：悪いサルを やっつけろ
 なんて奴だ サルの奴
 カニをいじめた 悪い奴
 サルを八つ裂き かたき討ち

クリ：お～い、サルっこア～い!! お～い、サルっこア～い!!

心張棒：残念、留守だ。

牛の糞：よ～し、サルっこが戻^{め かぐ}って来る前に隠^{かく}れべし!!
お前たち

タタミ針：ウがんどア～い、いいど～!!

五 人：(拳を突き上げ) お〜っ!!

語 り：みなさま、ご存じだとは思ひあんすんども、^{いちおう かぐ}一応、隠れた場所をお知らせいだしあんしょ。え〜、牛の糞は、^{べご くそ}入り口さぬたばって、^{ぐち うつ伏せになって}心張棒は、^{とぐち てんじょう}戸口の天井さ隠れで、^{かぐ}クリは、^{なが かぐ}囲炉裏の中さ隠れで、^{ろぶち ひそ}タダミ針は、^{そうだった}炉縁さ身よ潜めだじ。ん？あ〜っ、^{ホラ}ほんだった、^{みずかめ}ほんだった。忘れでらった。カニっこな。カニっこア、^{なが}ホレが、^{へエ}みなさま、ご存じの通り、水瓶の中(箱の後ろ?) さ入っておりあんす。フ〜っ、ようやととで終わった。おっ、サルっこア、戻ってきたようであんすよ〜。

サ ル：お〜、^{さむ}寒寒寒……。^{寒い}しばれるなあ。^{凍えて}すぐだまって、^{からだ}身体ア動がねエ。どりゃが、^{温まる}どりゃが、火っこさ手っこオかざしてぬぐだまるべ。(しゃがんで囲炉裏の火に手をかざす体)

ク リ：バ〜ンっ!!

サ ル：ギャ〜っ!!アッチ〜っ!! (驚いて跳び上がり尻餅をつく体)

タタミ針：ジグっ!!

サ ル：^{いだ}痛っ〜!! ^{いだ}痛だだだっ〜!! ^{アッチチチっ!!} (熱さと痛さで跳びはねている) ^{み、み、水っこ〜!!} (水瓶の所へ移動し、中に手を入れる体)

カ ニ：ジョッギ〜ンっ!!

サ ル：^{いだ}痛っ〜!! ^{いだ}痛だだだっ〜!! ^{怖いよ〜}な、なんだっきゃ〜!! ^{おがしいっ!!} おがしいっ!! ^{おっかねエ}おっかねエっ!! ^{逃げろ〜!!} (戸口の方へ移動する体)

牛の糞：ヌル〜っ!!

サ ル：^{すべ}(滑ってステンと転ぶ) ^{いだ}痛っ〜!! ^{いだ}痛だだだっ〜!!

心張棒：^{エ〜イっ!!} (箱の上から跳び下りて、サルを叩きのめす) ^{エ〜イっ!!} ^{エ〜イっ!!}

サ ル：^{いだ}痛っ!! ^{いだ}痛っ!! ^{いだ}痛だだだっ〜!! ^{あやま}悪がった。^{なんけエ}オラが悪がった。謝る。何回でも謝る助けでける。命だけは助けでける〜っ!! ^{この通りだ!!}

心張棒：^{飢渴}いいや、許されねエ。米が満足にとれねエここごでは、毎年、ケガジになるここごでは、^{だま}他人よ騙す、^くそれも、^{ぬす}騙して喰い物よ盗み取るよった奴は、^{やづ}死んでもらうごどになっている。^{ひとさ}タダミ針ァい、サルの心臓よ一刺しだ。

サ ル：^{ください}許してけさい。命だけは助けでけさい。

タタミ針：^つ分がった。サルっこァい、^{オレ}観念しろ。^{すん}大丈夫だ。ワの長さは五寸。心臓まで一^{なあん}突ぎだ。^{心配する}あっという間にあの世行き。痛いもなんもねえ。何もくうすごどァねえ。

サ ル：^{オレは}オラァ死にたぐねエ。死にたぐねエ～!!

牛の糞：サルっこァい。イが、カニっこの気持ちよ考えだごどがあるのが？
 一生懸命稼いで、落ち穂よ、よやっつとで拾い集めで、餅よついだんだ。それよ、
^{お前}イがが横取りした。死ぬしかねエベ。

サ ル：死にたぐねエ!! 死にたぐねエ!! 助けでける!! 助けでけさい!!

心張棒：^{早く}タダミ針ァい。ちゃっちやどやってしまれっ!!

サ ル：助けでけさい!!

ク リ：タダミ針ァいっ!!

タタミ針：ほいきたっ!!

カ ニ：^{もう}やめせ～!! やめでけさ～いっ!! ハア、いい。

牛の糞：^{なアに}何ァ、ハアいいのえ。

カ ニ：^{かわいそ}サルっこァ可哀想った。

心張棒：「嘘よつぐ」「騙す」は死刑。^{この辺}ここいらのしきたりだ。

カ ニ：サルっこァ、反省してら。

タタミ針：反省だら誰でもでぎる。

カ ニ：^{もち}餅っこ喰ったぐれエで、殺すごどァねエ。

ク リ：カニっこァい。いいのが？ サルっこよ逃がして、本当にいいのが?

カ ニ：^私いい。オラが責任、取るっ!!

ク リ：^{そうか}ほうが。^{めエ}お前がそごまでへるのなら仕方ねエ。今日だけは、^言しきたりよ破るべ。

牛の糞：^{良かった}サルっこァい。命よ助けでけるってれ。えがったな。

サ ル：ありがとっ!! ありがとっ～!! カニっこァい、この恩は一生忘
^{ないから}れねエすけ。ありがとっ～!!

カ ニ：サルっこァ～い!! サルっこァ～い!! 忘れ物～!! 忘れ物～!!
^{きんちやぐ}巾着の忘れ物～!!

タタミ針：クリっこァい、しきたりよ破っていいのが?

ク リ：^{わけ}いい訳ァあるってがな。しきたりはしきたりだ。

タタミ針：^{それじゃ}へば?

ク リ：うん。カニっこの気持ちは気持ちだ。^{でも}しても、しきたりの方が優先だ。

牛の糞：^{こっそり}へば、あどから、こそつとだな?

ク リ：んだ。

心張棒：^{そうじゃなきや}それで安心した。^{ほが}ほでねば、^{しめ}他さ示しがつがねエ。

ク　　リ：(タタミ針に) いいが。カニ^わっこさ分がねエように、心臓^{ひとつ}よ一突きだ。

タタミ針：ワよ誰だ^{るんだ}ど思^{ひとつ}ってらっきゃ。一^{なんだぞ}突^{失敗する}ぎのタダミ針だんでエ。そじる筈アねエ。

四　　人：(顔を見合せ、不気味な表情で笑う) フッフッフフ……。

牛の糞：へば、こそっと行って。

心張棒：サル^せの地獄^う行きよ、見物さへでもらるが。

牛の糞・心張棒：あべ^{とごろ}。

語　　り：なす^{なづ}〜。所^{いろいろ}変われば品代^{かつせん}わる。いろんたサルカニ合戦^{はちのへ}の話^{わらし}っこア、あるもんだ夏^{もぢろん}のヤマセで、農業に適さない、この八戸^{はちのへ}地方。童子^{わらし}さ語り聞かせる南部昔^{かだ}昔コは、面白さは勿論大事だ^{もぢろん}んども、食糧不足ならではの教訓^{もぢろん}が入れられてい^{もぢろん}るんだなす。このあど、サルっこア、どうなりあんした^{もぢろん}んだが。(手を合わせて) ナンマイダ〜、ナンマイダ〜。はい、これで、『サルどカニの話』っこア、

全　　員：どっとはら〜いっ!!

3.2 「南部弁さみっと in 八戸 2019」

1階はっちひろばで行われた「たくさんの昔コを楽しみましょう」に続き、2階シアターにて、「南部弁さみっと in 八戸 2019」を開催した。青森県の津軽弁や南部弁だけでなく、岩手県釜石市、洋野町種市にお住まいの語り部による語りや、方言研究家でNHKテレビ「お国ことばで川柳」の選者としても有名な渋谷伯龍氏による「わらはんどさ あずましまちコのごすべし」と題して、津軽弁を中心とする青森県の方言を題材とした講話など、盛りだくさんの内容となった。また、八戸を拠点に語りを行っている「八戸童話会」の皆さんも登壇した。17時からの開始にも関わらず、たくさんの方にご来場いただき、会場一体となつて方言が持つ魅力を味わうことができた。

以下は当日のプログラムである。

『南部弁さみっと in 八戸 2019』プログラム

司会：小島聡子(岩手大学)

岩崎真梨子(八戸工業大学)

1. 開会のことばと「南部弁の保存と継承にむけて」 今村かほる(弘前学院大学)

2. 【語り】

上條佳子「ソローリ、ソロリの話っこ」(八戸童話会)

大柳悦子「どんつぐ」(種市)

藤原マチ子「芍薬娘」(釜石・漁火の会)

磯崎彬子「白蛇伝説 八雲神社」(釜石・漁火の会)
木下勝貴「ネズミ穴に入った爺様」(八戸童話会)
三橋光子「おしら様のはなし」(木造)
久慈瑛子「狐のほっ腹焼き」(三戸)
佐々木和子「幸せな爺さま」「正部家先生のおはこ」(五戸)

3. 【講話】

渋谷伯龍「わらはんどさ あずましまちコ のごすべし」(弘前)

4. 閉会のことば 大野眞男(岩手大学)

次から、語り部の方々のご厚意によりこれまでの文字化していない語りの文字化、演劇の台本を掲載する。〈 〉で括られた部分は、共通語訳を補った。なお、校閲は本人による。

「ソローリ、ソロリの話っこ」

語り：上條佳子(八戸童話会)

むがし、あったんず、あるどごろさ、お寺っこあって、なんぼ教えでも教えでも、お経をおぼえねえこぼっ子おったんず。和尚様、あぎれでしまって、「おめえは、なんぼ教えでもわがねえすけ、どっかさ行くんだあ」ってへったず。こぼっ子は、しかだなく、お寺ではって、とぼとぼとぼとぼと歩いて行ったんず。いぐどごねーすけ、とにかく歩いて行ったら、日あ暮れるごど、寒くなるごど、雪っこ降ってくるごど、だんだんだんだん、寒くなってきて、したら、大っきだ松の木見えだすけ、はあこころで一晩休むべがなあと思つて、火っこ燃やして、ぬぐだまってらったんず。

したら、どごずごどはねえ、いいかまりっこしてきて、なんだべど思つてらったら、ポタランポタランって上から水っこおちできたんず、なんだべがなあと思つて、上見たら、松の木の上さ、大っきだ松茸おがってらったんず。火っこ燃やしたぬぐみっこで、雪っこ溶けて、松茸からポタランポタランっておちできたんず。舐めってみたら、そのうんめえごどうんめえごど、「いやー、ぬぐだまったし、腹つやぐなったし、はあ、寝るがなあ」と思つてらったら、ずーっと向ごうの方さ灯りっこ、ピカカンピカカンと見えだんず。なんぼ鬼の家でもここで寝るよりや、いがべえと思つて、まんだこいで歩いていったんず。

「トントントントン、すみません、今夜一晩だけ、泊めでけさい。」ってへったら、中から出てきたのは、じさまとばさまだったんず。「やいやいやいやい、こつたら雪の降る中、なんぼが、なんぎしたごど。さあさあ、入つて火っこさ当たってけさい。」ってへつ

たず。こぼっ子は「よがったあ」と思って、火っこさぬぐだまってらったら、じさまとばさまが、「こぞっこぞっこ、おらんどあこつたらだ、山の中さ、ばりいるへんで、お寺さ行ってありがてえお経を聞きあんせんた、どうか一つ、お経ば教えてけねんべが。」ってへったず。さあ困った、なんたって、お経おぼえれねえへんで、お寺追い出されたんだもの、どやって教えるべがなと思っただ。

困って困って、周りっこ、キロカロキロカロって、見でらったら、戸の口から、大きだしねえねごソロリソロリと歩いてきたんず。こりゃいいあんばいだと思って、「ソーロリ、ソロリと、クールガネ、カンカン」ってへったず。なんも知らねえじさまとばさまは、それば真似して「ソーロリ、ソロリと、クールガネ、カンカン」ってへったんず。「さあ、次なんとへつたらいがべがな」ってまんだ、キロカロキロカロって、あだりっこ見まわしてらったら、ねご、炉のどごさきて、クルンと丸くなつたず。「はっ、こりゃいいあんばいだ」と思って「カイグルマッテ、ネールガネ、カンカン」ってへったんず。したら、まだじさまとばさま「カイグルマッテ、ネールガネ、カンカン」ってへったんず。さあ今度はなんとつたらいがべがなと思っただ、キロカロキロカロって見でらったら、なんとねごが、まんだ、ソロリソロリと戸の口さ戻って来つたんず。「はっ、こりゃいいあんばいだ」っと思っただ、「ソーロリ、ソロリと、モドルガネ、カンカン」ってへったんず。したら、じさまとばさま、まんだ真似して、「ソーロリ、ソロリと、モドルガネ、カンカン」ってへったんず。したら、ばさまが、「じさまじさま、今日はこの辺にして寝るべし。ありがたいお経を習ったこどだし。」ってへだどごで、こぞっこ「はあ、良かった」と思って、なんも、喋らないうちに、グイっと寝てしまつたんず。



んだども、じさまとばさま、まんだ、寝れんで、ぐやめえでらつたんず。「じさまじさま、今日ありがたいお経を習ったすけ、もう一度習ってみるべし。」二人して、「ソーロリ、ソロリと、クールガネ、カンカン」って喋ってらつたんず。そごさ、ちょんど、泥棒がソロリソロリと入ってきてらつたんず。「いや、あのじさまとばさま、わのごど見えでらんだべが」と思って小さくなって丸まつたず。したら、じさまとばさまが「カイグルマッテ、ネールガネ、カンカン」ってへったんず。したら、泥棒「やいやいやい、おらが丸

くなっただのおべでら、やいや気味の悪い家だ。」と思って、ソロリソロリと逃げるっきゃ、したっきゃ、「ソーロリ、ソロリと、モドルガネ、カンカン」ってへたどごろで、「やいやいやい、気味の悪い家だ、こつたら家さ泥棒さ入れねえ」って慌てて逃げで行ったんず。この話しはこれでどつとはらい。

「どんつぐ」

語り：大柳悦子（種市）

むが～す、むがす、あつたじもな。

ある所さ、30 過ぎたんだども〈けれども〉、嫁のいねえ炭焼きがいだつたず〈いました〉。ある日のごどだ〈ことです〉。きれいな姉さまあねが来て、

「わあこど〈私を〉、かが〈自分の奥さん〉にしてけせ〈ください〉。」

炭焼きアどんでしただども〈びっくりした〉、ちょんど、

「かがア欲しいえなあ。」

ど思っていたどごで〈と思っていたところで〉、その姉さまよ、かがにすることにしたじよ〈しました〉。

このかがの稼ぐごど〈働くこと〉、稼ぐごど。炭焼きのとどあ、

「あ～いいかが貰った。えがった〈よかった〉、えがった。」と喜んでいだつたじよもんな〈でいました〉。

ほやっているうち、〈そうやっているうち〉男童子おとごわらすあ産したず〈生みました〉。とどどかがと〈父と母と〉相談こして男童子おとごわらすっこさ「どんつぐ」ど名前っこつけたずもな〈名前をつけました〉。

ある夜のごどだ。かがアが、どんつぐよ、えんつこ〈ゆりかご〉さ入れて、かででらつたず〈あやしていた「かでる」(あやす)〉。

したっきゃ〈そしたら〉どんつぐは腹がへえ減って、泣き始めたことで、えんつこ〈ゆりかご〉から出して、かがア、乳つつよけで〈お乳あげて〉いだつたじよもんな。

したっきゃ、それを、なんとなく見ていだ途端、あ？そごさ、あもけア〈化け物〉いるんでねえか。なんと、耳なげあ長くて、鼻くちも長え、口きづねあ耳まで裂げだ狐だったじおな〈のです〉。

とどあ、たましぼろぎして〈とても驚いて〉、「ぎゃ～っ」と大声上げたじよ。この声よ聞いだかがあ、びくくらこいて〈びっくりして〉狐の姿のまんま、後ろ振り返り、後ろ振り

返り、山さ逃げで行ったじょおん（行きました）。どんつぐのことは、気になったんだべな。
どんつぐといえは、泣いで泣いで泣き止まねえ。して〈そして〉、とどアどは、困ってどや
したらいかべ〈どうしたらいいのか〉と考えて、考えて—「は〜…これしかねえな」
と、松明たいまつを持って山さ出かけたじょ。山さ入ってあっちゃこっちゃ走り回って、大声を上
げて叫んだじょ。「どんつぐのかがあ〜い！！どんつぐさ乳つつよけでやってけろ〜！！〈乳
を飲ませておくれ〉」「どんつぐのかがあ〜い。どんつぐさ乳つつよけでやってけろ〜。ほお〜
い。」

したつきや、山奥やまおくの方から、狐きつねの声アした。

「コ〜ンコ〜ン。」と聞こえて、あかりっこ〈明かり〉が下がってくる影あ見だじおん。
家まさ、戻ってみると、かがアどんつぐよ優しぐ抱いで、唄うたっこ唄いながら、乳つつよけでらっ
たもん〈乳を飲ませていた〉。

へせげっこせき〈堰〉 ぷ〜んと 跳ねで
花見はなみさ 行〜って
めぐり〜に かがって
大山おおやま 行って
きぐらにや〈きくらげ〉 どこで どこ
で どこで



どごだがな あっ めっけだ〈見つけた〉 めっけだよ
それを見でいだ父とどあ、のうばなくさば〈目には〉、めつつ〈涙〉はたまてらったじもな。
ほやって〈そうやって〉、乳つつをけ終わった〈乳をあげ終えた〉かがア、「ほに〈本当に〉、
長い間お世話になりあんした。どうが、これよ受け取ってけさい。」

なんぼも重ねだ小判と、饅頭よのろっと〈たくさん〉けで〈くれて〉寄ごしたじ〈寄こ
しました〉。どんつぐさば、〈どんつぐには〉「きぎ耳」ず〈という〉の〈物〉あ、けだずも
な。〈くれました〉「きぎ耳」ずのあ、どっただ〈どんなに〉遠ぐおどの音おとっこも聞こえて、鳥
の声こどばっこあ人間の言葉になって聞こえるものだったじおな〈のです〉。
ほやって、とどア、どんつくよ〈を〉抱きながら、「どんつぐや、お前めえのかがア、一緒に暮
らされねえ〈暮らすことができない〉。もだへんで〈化け物だから〉。泣き止むんでえ。」
ど、だまし〈あやしながら〉だまし、教えたじょ。

それからというもの、どんつぐはぐんぐんおがって〈育て〉、立派おどなだ大人になつたず〈な

りました)。

勿論、《きぎ耳》のおかげで、立派だ大人おどなになって、何をやってもうまぐいったじおな (いきました)。

ほやって、とどと二人幸せに暮らしたじよ。

はい、これで、「どんつぐ」の話っこあ、どっとはれ。

「ねずみ穴に入った爺様」

語り：木下勝貴(八戸)

昔々、あるどごさ、心の優しい爺様じさまと婆様ばさまいだったんだ。ある日のことだ、爺様、畑さ出はって、やっせ〈せっせと〉ど畑ば起ごしておりあんした。そごさ婆様ア来て、
「さあさ、爺様アい、疲れあんしたべ、ソバ餅もちばこさえやんしたから、一つ、おあがりあんせ〈お召し上がりください〉」

「いやあ、申し訳ねえなあ。ちょうど今、一服するびやど〈しようど〉思っただごごろだ。ハァーこわエ〈疲れた〉こわエ。ヨッコイショ」

爺様、腰ば下ろして、婆様がら、ソバ餅ば受け取ろうとした。ところが、ソバ餅ア、手がら滑って、ポトンと土の上さ落ちでしまった。落ちだソバ餅アコロコロコロコローっと転がって行って、畑のすまっこ〈隅っこ〉のねずみ穴さ、ストーンと落ちでしまった。

「じゃい、やいやいやい〈驚き、悔しがる様子〉、いだわしねえ〈もったいない〉ごと、いだわしねえごと」

爺様ア、くわ鋤ばたなって、ソバ餅の落ちだ穴のげえぐり〈周囲〉ば掘ってみだった。したども、ソバ餅出はってこね。そのうち、掘ってるうちに穴アだんだんだんだん大きくなってきて、爺様アそごさ、ストーンと落ちでしまいやんしたんだ。さあ大変だ、穴の底であたりほどり〈周囲〉ば見渡してみだっきゃ、お地藏様ア立ってらった。

「ありゃあ、穴さ落ちで、お地藏様ア見える。ここは天国だべが、地獄だべが。お地藏様お地藏様ア、オラのソバ餅ば知りあんせんがい？」

「ソバ餅？ああ、あれだばさきた、あっちゃ転がってったエ」

爺様、お地藏様さ教えられだほうさ、どんがどんが〈どんどん〉進んでいった。したっきゃ〈そしたら〉、2番目のお地藏様ア立ってらった。

「お地藏様お地藏様ア、オラのソバ餅ば見やあんせんでしたがい？」

「ソバ餅？ソバ餅、ソバ餅... ウンウンウン、あああああ、さきたな、あっちゃコロコロコロコロ転がっていったエ」

爺様ま～だどんがどんがど〈どんだん〉歩いてったんだ。したっきゃ、したっきゃさ〈そしたら〉、今度なに出はって来たと思ろ？3番目のお地蔵様立ってらったんず。

「お地蔵様お地蔵様、オラのソバ餅ば、見よあんせんでしたがい？」

「ソバ餅、ソバ餅... ありゃあ、申し訳ねえ。いやあ本当に申し訳ねえ。転がってきたんだども、何だか美味そうだなあと思って、食ってしまった。いやあ申し訳ねえことをした。その代わりにイがさ〈お前に〉、^{たがらもの}宝物ば授けてやるべし。」

お地蔵様、爺様さこそと耳打ちしやしたんだ。爺様、お地蔵様さ教えられだ通り、どんがどんがど〈どんだん〉まだ進んでいった。したっきゃ〈そしたら〉、ずーっと奥のほうさ、明がりっこアポツンと見えできたんだ。爺様、その明がりのする方さ近づいていった。したっきゃ〈そしたら〉、何だか賑やかだ、面白そった〈面白そうな〉歌っこア聞こえてきやんしたんだ。

「百になっても二百になっても猫の声っこア聞きたぐない。トントンカン。トントンカン」明がりの下でア、うんじゃらうんじゃらと〈とてつもなくたくさんの様子〉ねずみんどア〈ねずみたちは〉、こつただ歌、歌りながら餅つぎばしてらつただ。爺様、お地蔵様がら教えられだ通りに、

「コッケコッコー！」

と、^{にわとり}鶏の鳴き真似っこばしてみだつた。ねずみんどア〈ねずみたちは〉、

「ハァー！一番どりが鳴いだ！間もなぐ夜明けるー！急げー！」

「百になっても二百になっても猫の声っこア聞きたぐない！トントンカン。トントンカン」と急いだ急いだ。爺様、そごさ〈そこに〉もう一つ、

「コッケコッコー！」

と鳴いたっきゃ〈鳴いたら〉、ねずみんどア〈ねずみたちは〉、

「二番どりも鳴いたー！餅つきは止めだー！」

って、後片付けにとりかかりあんした。したどごで〈なので〉、爺様、もう一回、



「コッケコッコー！」

ど、鶏の鳴ぎ真似っこばしたっきゃ、ハァーもうねずみんどア〈ねずみたちは〉どうもせなぐなつたんだべな、

「三番どりが鳴いたー！夜ア明けてしまるー！片付けもハァー後だー！みんな家さ戻れー！急げー！」

ってサァーつとねずみんどア〈ねずみたちは〉居なくなつたず。ねずみんどア〈ねずみたちが〉いなぐなつた部屋さば、ねずみんどア〈ねずみたちが〉集めできた宝物ア、のっこど〈たくさん〉残されでいだつたんだ。爺様、お地蔵様がら教えられた通り、つぎたての餅っこだの、大判小判だの、宝物だの、のろつと〈たくさん〉家さ持つて帰つたず。して〈そして〉、婆様さ見せて、二人して喜び合つてらつたず。

したっきゃ〈そしたら〉、そごさ来たつたのは、隣のよくたがり婆様だつた。

「すみあせん。火種っこ分けてくださりやんせんか」

昔だば、火種っこば消す嫁は失格だつて話だつたども、よくたがり〈欲張り〉の婆様ア、

「火種っこばけさい〈ください〉」

つて来たつた。そごさ爺様と婆様ア、宝物ば持つて喜び合つてだどご〈ところ〉で、それば見だり聞いだりして、はあ婆様アへぎまつて〈あわてて〉走つて戻つたんだ。して、爺様さ、鍬ば持たせで畑さ出がけさせやんした。自分は下手くそで美味くなさそうつたソバ餅ば一つこさえて〈こしらえて〉、畑さはへで〈走つて〉行つて、爺様の足元さ、ドンつと、やぐど〈わざと〉、ソバ餅ば転がした。したども〈しかし〉、下手くそに作つたソバ餅だべ？ながながコロコロ転がつてがねェんだ。きもアやげだ〈怒つた〉婆様、足で、足でで〜！？「この！この！」つて、足の餅ば蹴飛ばして、畑のすまっこ〈隅っこ〉さあるねずみ穴さドンつと蹴落としたず。

「さあさ爺様アイ！今からこの穴ば掘つて、ちゃっちゃどねずみのどごろさ行つてこォ！」

爺様ア、めつたくたに〈めちゃくちゃに〉穴ば掘り広げて、ようやつとで〈ようやく〉穴の底さたどり着いたず。穴の底さば、お地蔵様ア立つてらつたんだ。

「おう、地蔵！わあ〈わたし〉のソバ餅ば知らねが！」

「ソバ餅？さあ、知らねえな」

爺様、どんがどんが〈どんどんと〉まだ進んでつた。したっきゃ〈そしたら〉二番目のお地蔵様立つてらつたんだ。

「おう、ソバ餅！でながった〈じゃなかった〉、お地蔵！わあ〈わたし〉のソバ餅見ながったが！」

「はあ？ソバ餅？いやあ見たよった見ねがったよった〈見たような見なかったような〉、いや、わあ〈わたし〉知らない」

爺様まだどんがどんが〈どんどんと〉進んでった。したっきゃ〈そしたら〉、三番目のお地蔵様ア立ってらったんだ。

「おい！くそ地蔵！わあのソバ餅ば知らねえがい！」

お地蔵様なんて答えたど思う？

「さあソバ餅、ソバ餅。ああーあれのことか！ああ何だか転がってきたな。何だか美味くなさそうだっただも、オラァ我慢して食った。」

どへった〈言った〉もんだ。はア、これさば〈これには〉爺様ア、頭さ来たんだ。

「わあのソバ餅食ったんだら、ちゃっちゃどねずみの宝の在りかば教えろー！」

と怒鳴った怒鳴った。あぐねはでだ〈呆れ返った〉お地蔵様、まるで「あっち」^とどでも言う^かがのように指ば差しあんしたんだ。爺様ア、お地蔵様ア差したほうさどんがどんが〈どんどんと〉進んでった。したっきゃ〈そしたら〉、奥の方さ明がりっこア見えできたんだ。

「おー？おー！？ねずみんどア〈ねずみたち〉、餅つぎばしてらなー！？」

爺様、明がりの見える方さ、こそらーっと〈こっそりと〉近づいで行きやしたんだ。したっきゃ〈そしたら〉、あの歌っこア聞こえてきやしたんだ。

「百になっても二百になっても猫の声っこア聞きたくない。トントンカン。トントンカン。」

「おおー、あの歌ば聞いたがらには、しめたもんだなあー！へへへへへえー」

と、爺様ア、で〜ったらだ〈大きな〉声で

「ニャアーオー！」

と猫の鳴ぎ真似っこばしやしたんだ。したっきゃ〈そしたら〉、したっきゃなす〈そしたら〉、明がりパッと消えて、

「そらっ！猫の真似っこばする泥棒ア来たー！」

ねずみんどア〈ねずみたち〉、爺様ば目がけて飛びかかかってきたんだ。いやいや、ハア、勝手の分がんねエ、暗すみ〈暗闇〉の中で、爺様どうもせね〈できず〉、体じゅうかっちやがれだり〈ひっかかれたり〉噛みつかれだり、ああもうひどい目にあつて、オーイオイオイ泣きながら家さ戻ったず。家で爺様を迎えだ婆様、なんてへったがずどなあ〈言っ

たかなあ)。

「イヤイヤイヤイヤ、爺様、何だか歌っこ歌りながら戻って来たあ。イヤイヤイヤイヤ、見だごどもない高そった〈高そうな〉着物っこまで着てら。こりゃえがったえがった〈よかったよかった〉、やあえがった〈よかった〉あーアツハハハ……」
ってへった〈言った〉ず。イヤイヤイヤイヤ、罰当たりだずんだが〈というか〉、いい気味だずんだが〈というか〉、どうもこうもなりあんせんな。

ねずみ穴に入った爺様の話、ソバ餅コロリンの話。これで、どっとはらい。

「おしら様のはなし」

語り：三橋光子(木造)

昔々 津軽の国に何ほど金持ちだ長者様がいであったど。

長者様の家裕福だどこで家来も一杯いであじましく〈安楽に〉あったど。
かつちやもいい人で、あじましく暮していただって〈いたけれど〉、童子無えんだど。
したどこで、二人して相談して、馬頭観音様さ「童子授けでけろ。頼む。」て、三・七・二
一〈21日間連続してお参りして〉願かけだきや、めごいめごい女童子生まれたどこで、
「ひめ」って名前つけてめごがって育てだど。

「ひめ」15歳の時、近隣の金持ちから、2歳の仔馬っこ買って育てたんだど。
何もかんも良い馬っこで〈せんだん栗毛〉って言われて、これ程いい体コ^{からだ}の馬、この世にあるべと、思うような立派な馬っこであったど。

立つにせんだん〈注1〉 座るにせんだん 歩くにせんだん三千余だんの形だど
前足のふみ台見れば天目茶碗〈中国の焼き物の茶碗〉ごとかぶせだみたいで、後ろ足のふ
み台見れば蓮華の花みたいで、眼付ぎあ大判・小判^{まなご}みたいね光ってるんだど。

雨降ったりアラレ降ったりして、毎日、何人もの人が馬っこ見にくるだど。

「ひめ」16歳になって、「せんだん栗毛」3歳の駒っこになっていたど。
金持ちの家だどごで、銀のくつわ^{あやぞ}、綾染めの手綱^{いえ}つけて「ひめ」こと乗せだど。

「ひめ」たいした喜んで「どこまでいっても、おら家の「せんだん栗毛」みった〈みたい
な〉いい馬っこいねな。これ、もし馬っこでねふて〈なくて〉、人であればおら家の婿にする
じな。」と、思ったど。

それから「せんだん栗毛」ごと、馬屋^{まや}さ入れて「ひめ」寝床さ寝だど。

したけあ〈そうすると〉、夜中にちょこちょこと階段上がる落として「ひめ、ひめ、ひめ」と三回も呼ばれたところで、「ひめ」びっくりしてまなぐ開けて見たけ、いい男立っていたど。

「わ、せんだん栗毛だね」ってしゃべって、ちょこちょこ階段降りていったど。

それから「せんだん栗毛」悪くなって〈病気になって〉、物喰わなくなったど。

笹^{すすき}だの、薄^{すすき}だの、葛の葉だの取ってきてやっても、何も喰わねだど。

「ひめ」、2階から降りて、人参の葉ッコやったけあ、わんちか〈少しだけ〉喰ったど。

長者様ど母っちゃ〈奥様〉どそれ見で感じたど。

一人娘の「ひめ」に恋煩いしてんでねがのと、

たいした心配したど。

困ったごとになったばって〈なったけれど〉、

どうすることもできねんだど。

それから1週間もしたけあ「せんだん栗毛」瘦

せでまったど。

皆^みんな寝でから「ひめ」2階から降りて馬屋さ行ったど。

「せんだん栗毛」前膝立てで、ポロポロ涙落としながら、「ひめ」さお辞儀したど。

それ見で「ひめ」、かわいそうだな「せんだん栗毛」助かねがもしらねなと思ったど。

それから、「ひめ」2階さ寝でばって〈寝たけれど〉眠れなぐってあったけど、朝まねおぎだけあ、「せんだん栗毛」死んであったど。長者様、あきらめで、家来に「せんだん栗毛ごと、山さ投げて〈捨てて〉来い。」ってしたど。

次の年の3月の節句に、「ひめ」が「父ちゃんにお願いがある。」ってしたど。「なんだば。」
聞^きいだけあ、「わ〈私〉「せんだん栗毛」を投げだどこさ花見に行きて。」って頼んだど。

「まんだ寒びしてまいねはんで〈まだ寒くてだめだから〉来月まで待だなが。そへば駕籠
さ乗せで家来つけでやるはんで。」としたことで

山奥さ来て、家来「「ひめ」さま、ここ「せんだん栗毛」投げたどこだ。」って知らせだど。

酒・肴出して、みんなして花見して、戻る支度してらっきゃ〈していると〉、「ひめ」でっ
たらだ〈大きな太い〉桂の木の下さ、ねまって〈座って〉「おいの家の「せんだん栗毛」一
目でも見て。」3回叫んだど。

さ一、急に天気いぐねぐなって、天風乱風ねなって、大きい雷鳴る、五色の雲出だと思っ
たきゃ、つむじ風吹いて、せんだん栗毛の皮、天井から降りてきて、「ひめ」ごと包んであ



っという間に天さ昇っていったど。

家来達、あわくって、手延べたり、竿延べたりしたばって、どうすることもできねがったど。いっごま〈一瞬〉の間のことだっただど。

家来達泣く泣く戻ってきて、長者様さ知かせたばって〈知らせたけど〉長者様達もまだ、これもまだ前世からのあだわい〈運命〉だと思って諦めることねしたど。

そして、次の年の3月になって、坪で赤い虫12匹、白い虫12匹、長者様見つけたど。

赤い虫の面っこ見だけあ、せんだん栗毛ね似でいだど。白い虫の面こ、ひめに似であっただど。

村中の人集めで、名前こ聞いだばって、誰も分がんねんだど。

「何んて、し〈何という名前の〉、虫だべの」みんなして喋って、芋だの・かぼちゃだの・豆だの・麦だの・喰せだばって何も喰ねだど。

したけあ、そこさ七十過ぎの爺^じっちゃ、桑^{くわ}の木の杖ついて来たど。したけあ、その桑の木の杖さ昇って、カリカリってかじったど。それで、桑の木だば喰うかも知らねど思って、葉っぱいっぺい取って来て、喰へだきゃ何んぼでも喰うど。

何ぼでも喰うもんだどこで、大きくなって一人前になって、巢、作っただど。その巢、真綿、絹糸など、いい織物にいいんだど。

一竿かければ二竿でおりにできて〈注3〉、二竿かければ四竿でおりにできて、四竿かければ八竿でおりにできて、八竿かければ一六竿になったんだど。

親ごと悲しませだことも有るばって、これを親^{さず}さ授けて、それが今になって、おしらさまのいわれになったんだど。とっちばれ

〈注1〉せんだん センダン科の落葉高木。四国・九州以西の暖地に自生するが、ふつう庭木・街路樹として栽培される。高さ七層に達し、樹皮は立てに裂ける。葉は2回または、3回羽状複葉で長さ50センチメートル。

『日本国語大辞典』 第12巻 発行所 株式会社 小学館より引用

〈注2〉天目茶碗 (中国浙江省天目山の寺院で使用していたのを五山の僧などが持ち帰って賞したところからいう) 茶の湯に用いる、浅く開いたすり鉢形の茶碗。また、すり鉢形をした茶碗の総称。

『日本国語大辞典』 第14巻 発行所 株式会社小学館より引用

〈注3〉おりできて 「おりできて」というのは、まゆを紡いで機械にかけることであ

る。つまり、「一竿かければ二竿でおりできて」というのは、まゆの糸を1回機械にかければ糸が2つできあがるという意味である。(解説：三橋光子)

「^{きつね}狐のほっ腹焼き」

語り：久慈瑛子（三戸）

昔々、ある所にたまげだ物知りの男がいだったず。村の人みんなでねぎ殿って呼ばっていだったずもな。ある日、ねぎ殿が村の人から聞いたず。「この頃、人をだます狐がたまげだ出で困る」って。そごでねぎ殿が「よし、せばおれが退治してける。」って、よぐ狐が出るずいう村のはずれの山さ行ったず。

そして、道端さ酔っぱらった振りしてごろんと寝でいだったず。ところが中々、狐は来ながったず。したと、来た来た、なんと、一匹の大きだ狐が頭下げだで山がら降りできたず。そして、道端さ来たらすぐ化げ始めだずもな。木の葉っぱこ取って、田んぼの水こで濡らして、さっさっさっさと ^{あだま} 頭こ、^{からだ} 体こ濡らしてはだいだ〈たたいた〉きゃ、たまげだ、綺麗だ綺麗だ姉様になつたんず。そして、しゃなりしゃなりど歩いてきて、ねぎ殿ば見つけると声を掛けだず。「ややや、ねぎ殿、酔っぱらってこつてだ所に寝でれば、風邪こ引ぐね。ほらほら、おら送って行くすけに、起ぎろ。」って言つたず。

そごで、ねぎ殿は酔っぱらったふりして姉様の腕っこにすがって起ぎだず。そして、確かめだずもな〈確かめたんだそうだ〉。なんでも、人間の腕の骨は四角いけれども、^{けもの} 獣の腕の骨っこは丸いもんだず。それで確かめでみたら、やっぱり



この姉様は腕の骨っこは丸がったず。さあ、ねぎ殿は、酔っぱらったふりして、姉様さくつがって〈くつついて〉、家さ戻つたず。

^{ばさま} 「婆様、婆様、今帰ってきたよ。この姉様に送られできた。寒かった寒かった、さささ、^{まぎ} しぼとさ火こいっぱい燃やしてけろ。」って。そごで、婆様は柴こだの薪こだのにいっぱい焚いでごーごど火こ燃やしてけだず。「さあさあ婆様、おらこっちの姉様の手っこ持つてるすけに、おめそっちの姉様の手っこ持つてろ。」って。そして姉様にも火こさあだつてもらうべしって、さあ二人で両手捕まえで、ずんずんど〈どんどんと〉その火のそばまで近づけだず。さあ、びっくりしたのは、姉様に化げだ狐。ほっぺたは熱くなるべし、ほっ腹〈腹〉

は熱くなるべ、二人に手を掴まれていけるべし、「ああ、これだば二人に焼き殺される！」そう思って狐は思いっきり手を離して、そして、がにゃーんがにゃんど鳴いで、元の狐になって逃げでいったず。

さあ、その晩のことだずもな。ねぎ殿がきどころ寝〈ごろんと横になって〉していだら、なんと、家の前の田んぼの方でたまげだ高い音鳴りがして、ながなが止まながったず。何事起きだべ、ど思ってねぎ殿は戸を開げでみだら、なんと狐きつねどんがいっぱいいで、盆踊り踊っていだったず。物知りねぎ殿ほっ腹じよんず焼き上手だ、物知りねぎ殿ほっ腹焼き上手だ、さあ唄いながら太鼓、手平鉦てびらがね〈祭りの拍子をとる楽器〉叩いで、大変な騒ぎだったず。よくよく見だらなんと、狐殿がみんな合わせて、今植えだばがりの苗こ蹴散らして、その苗がぶんぬぶんぬと飛ばされでいだったず。

さあ、ねぎ殿どでんびっくり、は～昼間いたずらした狐が、仲間こ連れできて、盆踊りして、おらに仕返ししにきたんだ。さあねぎ殿は家さまつすぐ戻って行って、大事にしまっていた赤飯持って来て、「ややや、狐殿、狐殿。昼間は悪がった。おら申し訳ないことした。どうがこの赤飯食べて怒り鎮めでください。どうが怒りを鎮めでください。盆踊りはここでは止めでける。」ってお願いして何度も謝っていだったず。

さて、家にいだ婆様が、なんぼしても爺じさま様が帰ってこないがら、外さ出でみだず。そしたら、十五夜の明るい田にいで、爺様が一生懸命誰もいない所で、ぺこぺこぺこぺこ頭下げでいだったず。それ見で婆様が、「爺様何やってらっきゃ！」って声を掛けだず。「やや、婆様見でみろこら、植えたでの苗こ、この狐どんが盆踊りでみんな蹴散らしていだの。ほらこっちの田んぼ見でみろ。」って。「苗こがみんな逆さまに植えられでいだ。」って。泣き声たでだず。したら婆様、「爺様！おめ狐にだまされでいだんだべ！狐一匹もいねや！しっかりせい！」って。それ言われでねぎ殿が目こすって見だらなんと狐殿は一匹もいねし、蹴散らした苗こもなんも飛んでない、青々とした苗こがちゃんと植えらさって〈植えられて〉いだったず。逆さまに植えらさっていだったど思った苗こだってちゃんと元通り。風こに吹かれで青々どしていだったず。そして自分は田の中さ入って、水浸しになっていだったず。「ああ、おれはあの狐にだまされだ。」と思ったのだず。

物知りねぎ殿、いらねぐ狐にいだずらして、おっきぐおっきぐ仇討ちされだ話しっこ、どっと晴れ。

講話「わらはんどさ あずましまちコ のごすべし」

渋谷伯龍(弘前)

方言研究家でNHK テレビ「お国ことばで川柳」の選者としても有名な渋谷伯龍氏に「わらはんどさ あずましまちコ のごすべし」と題して、津軽弁を中心とした講話をしていただいた。渋谷氏によれば、津軽弁の単語に共通することがあり、「転訛」「経過省略」「経過変化」の3つの働きとして紹介した。観客の方々に津軽弁の意味を答えてもらうクイズなどもあった。

以下は講話の内容をまとめたものである。

【言葉の変化の仕方について】

- ・転訛 …元々あった言葉が、訛って変化すること。
- ・経過省略…長い時間をかけて、言葉が短くなること。
- ・経過変化…長い時間をかけて、言葉が変化すること。

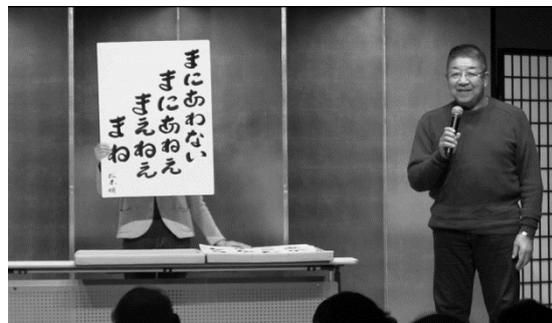
【転訛の例】

1. 「ざ」の音が「じゃ」に転訛した例。

- ・「ざいご」〈田舎者〉→「じゃいご」

2. 「せ」の音が「へ」に転訛した例。

- ・「せなか」→「へなが」
- ・「せんせい」→「へんへ」
- ・「せんたく」→「へんだぐ」
- ・「せかせる」→「へがへる」



【経過変化の例】

1. 「いっとまが」〈少しの間〉の例

元々「いっときま」という言葉だったのが、時間の経過とともに「いっとごま」→「いっとま」→「いっとまが」というように変化した。

2. 「まね」〈だめだ〉の例

元々「まにあわない」という言葉だったのが、時間の経過とともに「まにあねえ」→「まねえ」→「まね」というように変化した。

【よく使われる津軽弁】

津軽弁において、「たがれ」〈集まっている、くっついている〉という言葉がよく使われている。

- ・「あがたがれ」〈身体に垢がたくさんついている様子〉
- ・「こびたがれ」〈足の裏やかかるとに厚く汚れがついている様子〉
- ・「がんぶたがれ」〈頭皮がボロボロとはがれたり、フケがたくさん発生している様子〉
- ・「しらみたがれ」〈しらみという虫が大量に発生している様子〉
- ・「よぐたがれ」〈欲が深い人のこと〉
- ・「ほいどたがれ」〈とてもけちんぼな人のこと〉
- ・「ばちたがれ」〈罰当たりな人のこと〉
- ・「あぐたがれ」〈いつもいたずらばかりしている人のこと〉
- ・「ごうたがれ」〈ごう→業。業が深い人のこと〉
- ・「しんけたがれ」〈とても神経質な人のこと〉
- ・「貧乏たがれ」〈とても貧乏な人のこと〉
- ・「らんきたがれ」〈らんき→乱気。異常な行動を取っている人のこと〉
- ・「ちゅげたがれ」〈ちゅげ→脳卒中。脳卒中になってしまった人のこと〉
- ・「すけべたがれ」〈すけべな人のこと〉

「幸せな爺さま」

語り：佐々木和子（五戸）

昔々、あつたず。あるどごに、ちっちゃい茅ぶき屋根の家コあつたず。そごさ爺さま^じ たったひとりで暮らしていだど。田も畑もわんつかしかねがったすけ、貧乏な、かつつかつの暮らしだつたず。

ある冬の吹雪の晩に、爺さま、布団の中さ入って寝でらっきや、トントントン、トントントン戸っこ叩ぐ音、聞こえだど。爺さま、布団の中で、「いやあ寒^{さんび}いであ、誰だべ^{だい}今ごろ。起きるのあ、大義^{てえぎ}だなあ」ってながなが起ぐねがったど。したきや、まだ、トントントン、トントントン^{ただ}って叩ぐど。爺さま大義で大義で仕方ねがったども、やっどご

せえで起ぎで行って、

「だいだべ、こつたらに遅くなつてがら来る人あ」

しんばり棒取って戸っこ開げだど。

したっきゃ、髪真っ白で、ひげも真っ白で、眼玉だけギロギロず、やせだ爺さま立っていただど。



「いやあ、申し訳ありあんせんでも、今夜一晩げ泊めでもらえねべが」

「いやあ、なして〈どうして〉まだこつたら〈こんな〉吹雪に歩いてらの。なんもないども、こつたらどごでも良がったら、さあさあおあがりあんせ〈あがって下さい〉。」

爺さま、柴たいで、火っこさあでだど。そして、熱い干し菜汁ごっつおうしたど。それがら泊めるたて、爺さま敷いでら布団一枚に、掛けでら布団一枚しかないがら、爺さまど爺さまどくつついで寝だど。

そうしたっきゃ、朝まになつてがら、「やあ、ゆうべポカポカしてあんべいぐ〈調子よく〉寝た。本当にありがとごあす。」て白髪の爺さましゃべったど。

それで、泊めだ爺さまは米櫃ガラガラはだけで〈ひっくり返して〉、おがゆっこ作ってごっつおうしたど。そうしたっきゃ、白髪の爺さま、何回も何回も、「うわあ、ありがとごあす、ありがとごあす。」て頭こ下げで、玄関のどごまで行つたっきゃ、「たいした世話になりあんした。なんのお礼もねえして、これ一つだけけでいぐすけに。」ふとごろがら何だか包み出したど。爺さま開いで見だきゃ、歯こ一枚しかついでねえ足駄であつたど。しかも、片一方だど。

爺さま、いやあこつただ歯こ一枚の足駄、しかも片一方だけ、どやせばいいもんだべ、と思つたんども、「あれえ、ありがとごあす」つてもらつたど。炉端でその足駄ことつきり見で、この足駄、何さ使うもんだべ。まるで天狗でもはぐんだ足駄だな、んでも天狗でも二つねえばなんねえべ〈2つなければならぬだろう〉。一つだけ、な〜んさ〈何に〉使うんだべって、転がしていただど。

そのうち、「どらどら、足さはいでみるが。」って鼻緒さ足入れでみだど。そうしたっきゃ、爺さま足入れるが、入れねうちに、コロンで転んでしまつたず。その時、なんだがチャリンって音っこ聞こえだど。あ、今の音、あれあ何だべなて、こうやって、あだりほど

り〈周り〉を）ようぐ見だきゃ、そごさ小判こ一枚落ちでいだったど。「あんらあんら、小判こ落ちでらじゃ。んにゃんにゃこりゃあまだふしぎだもんだ。」爺さま、まだコロんと転がったきゃ、まだ、チャリンって小判出だど。爺さまコロんと転べば、チャリンて出はるど。

コロん、チャリン、コロん、チャリンって、爺さま、なんもかも、心持ち良くて、ただただ転んだど。

そうしたきゃ、だんだんだんだん、小判の山出来で、爺さま、見上げねばなんねいだけ、おっきい山になつたず。

うわあ、こつたらいい宝もの、どごにもねえな。こりゃいいものもらったもんだ。喜んで、喜んで、朝から晩まで、コロん、チャリン、コロん、チャリンて転んだど。

山あますます高くなっていったたって、気あついでみだら、爺さまの^{からだ}体っこ、一寸法師よね〈のように〉、小っちゃぐ、小っちゃぐなつていってらんだど。

ところが爺さま、それに気あつがねがったんだど。それで、コロん、チャリン、コロん、チャリン、その音っこ聞いて喜んでるうちに、一番最後に出だ小判が、爺さまのなずぎ〈額〉さコツンてぶつかつて、爺さまコロんと転がったけあ、にこかこつと〈ニコニコと〉したまま死んでしまったど。

どつとはれ。

「正部家先生のおはこ」

語り：佐々木和子（五戸）

むがしああつたど。ある所に、じさまどばさまどいだったど。

ある日、じさま山さたぎぎ〈焚き木〉取りにいがながつたずおんな。ばさま川さ洗濯にいがながつたずおんな。

なにしたがって〈何をしたかと〉へれば〈言えば〉、じさま川さじゃっこつり〈魚つり〉にいったずおんな。

したきゃ〈そしたら〉、川上がら、なんだんだが、どおんぶらこ どおんぶらこつて流れできたずおんな。

「何流れできたど思う？」「桃？」

「いや、桃でないの。桃はつんぶら つんぶらつてめんこく〈可愛く〉流れでくるべ。これは、どおんぶらこ どおんぶらこ」

たんす流れできたの。

いやあ。こりやいいのあ流れできた、ってじさま、どっこいしょっと川がらさらげで、たんすあげでみだっきゃ、きれいだ着物あ入っていったず。

ばさまのどごさ持って行って、「ばさま、ばさま。いいのあ流れできた。この着物、何枚入っているべ。数えてみるびゃ。一枚、二枚 いやいや、いい着物だから、『お』つけて数えてみるびゃ。」お一枚、お二枚、皆さんも一緒に数えて下さい。最初から、お一枚、お二枚、お三枚、おしまい。はい、どっとはらい。

3.3 第7回「南部弁の日」「たくさんの昔コを楽しみましょう」

「南部弁さみっと in 八戸 2019」 来場者アンケート

次から、2019年12月7日（土）八戸ポータルミュージアム「はっち」で行われた「第7回南部弁の日 たくさんの昔コを楽しみましょう」について、来場者アンケートの集計を示す。有効回答数は58である。但し、5. 回答数の属性の有効回答は57とする。表は、百分率で示した。小数点第2位以下を四捨五入して計算。それに続いて、具体的なコメントを示した。

「第7回南部弁の日 たくさんの昔コを楽しみましょう」

1. プログラムに関する感想をお聞かせください。楽しかった演目は何ですか？

(複数回答可) (%)

紙芝居	語り	中学生の方言劇	その他 (方言の訛り歌)	未記入
26.5	31.6	25.6	10.3	6.0

具体的には？

【紙芝居】

- ・浦島太郎は工夫があって楽しめた。(50代・女性)
- ・紙芝居の方が分かりやすかった。(60代・男性)
- ・間のとり方、感情表現に惹き込まれた。(60代・女性)
- ・紙芝居の「天狗の管弦」が良かった。(70代・女性)
- ・(語りにも○をしたが)特に紙芝居は、工夫の跡が見られた。(70代・女性)

【語り】

- ・方言が良いね。(60代・男性)
- ・語りを聞きながら、想像するのが面白い。(60代・女性)
- ・言葉の抑揚素晴らしいです。(70代・女性)
- ・フウフウパタパタ上手でした。(70代・女性)
- ・若い人なのに面白い話し振り。将来が楽しみだ。(70代・女性)

- ・フウフウパタパタの話し方のスピード・声の大きさとても聞きやすかったです。
(80代以上・男性)

【中学生の方言劇】

- ・中学生の方言劇は、練習したんだろうなという事が伝わってきてうれしかった。みんな
で取り組んだことが中学生にとって記憶に残るだろう。(40代・女性)
- ・パプリカが良かった。(60代・男性)
- ・チームワークが良くて頑張っていた。(60代・女性)
- ・とても楽しかった。(60代・女性)
- ・あるとの耳ざわりが良いです。(70代・女性)

【その他】

- ・サプライズのダンシングヒーロー（方言の訛り歌）が可愛かった。良かった。(4名)

【全体】

- ・聞いたこともない方言もあり、ためになった。(60代・男性)
- ・今回の発表者は、言葉や口調がゆっくりで、声が高くて良かった。(80代以上・女性)
- ・とても楽しめた。(5名)
- ・全部よかったし、面白かった。また懐かしく感じた。(6名)

2. 地域の方言について、保存・継承していく必要はあるとお考えですか？ (%)

大いにある	ある程度ある	わからない	あまりない	全くない	未記入
70.7	17.2	3.4	1.7	0.0	6.9

その理由は？

【大いにある】

- ・方言の良さを残してもらいたいから。(50代・女性)
- ・方言は日本の文化だから、これからも語り継いでいきたい。(60代・男性)
- ・何てへったって、そこの（土地の）方言コあ、そこの特徴だったナス。共通語とか標準語にはいつものが方言だかナス。(原文ママ) (60代・男性)
- ・土地らしさがなくなるから。(60代・女性)
- ・南部弁は八戸にとっての宝物だから。(70代・男性)
- ・方言がなくなってしまうから。(70代・女性)
- ・生まれた土地の文化であり、言葉であり、歴史であり、何ととっても心でもあるから。
(70代・女性)
- ・方言を聞くと、心がほっこりするし癒されるから。(3名)
- ・保存・伝承していきたいから。(5名)

【ある程度ある】

- ・継承したいが、難しいと思ったから。(70代・女性)
- ・その土地だからこそそのことば・ニュアンスがあると思う。(60代・女性)
- ・地域性が失われるような気がする。(70代・女性)
- ・地方の言葉を維持していくことも難しいと思う。(70代・女性)

【わからない】

- ・普段話しているので、考えてなかった。(60代・女性)
- ・わからない。(70代・男性)

【あまりない】

- ・都会に出た時、なまりがあると田舎者だと思われたから。(70代)

3. プログラム全体のご感想やご要望などをお聞かせください。**【感想】**

- ・いつも楽しく拝見している。(60代・女性)
- ・もし、保存・継承するならば、若者達に聞かせてもらう工夫が必要だ。(60代・女性)
- ・興味をそそるようなチラシがグッドアイデアだった。(70代・男性)
- ・楽しい時間を過ごせてもらいました。また、足を運ばせてもらいたいと思います。
(70代・女性)
- ・関係者の皆様のご努力に敬意を表します。今後も引き続き敬意を表したいです。
(80代以上・男性)
- ・もう少し時間が長くても良かった。(2名)
- ・今後も楽しみだ。(3名)
- ・サプライズの5年生の「ダンシングヒーロー」の方言の訛り歌が良かった。皆さん上手だった。(4名)
- ・とても楽しかった。(5名)
- ・色々なバラエティーにとんで楽しいひと時だった。(7名)

【要望】

- ・どんどんもっと方言を広めてほしい。(50代・女性)
- ・紙芝居にライトを当ててほしかった。(60代・女性)
- ・5列目にいたが、紙芝居が見えなかった。もっと上に台を置いてほしい。
(70代・女性)
- ・後ろの方が良く聞こえなかった。マイクの音量を大きくしてほしい。
(80代以上・男性)
- ・アクセントが飾りすぎ。純粹な南部弁ではない気がする。(80代以上・女性)
- ・会場外のざわつきが響いていた。工夫が必要だ。(3名)

4. 今日の催しのことを、何で知りましたか？ (%) ※HP：ホームページの略

新聞	ラジ オ	ポスター・チラシ	友人・知 人	はっちHP	その他	未記入
37.9	3.0	13.6	25.8	6.1	10.6	3.0

【その他】

- ・自分で調べた (40代・女性)
- ・とびこみ (2名)

・広報（2名）

5. 回答者の属性（%）※有効回答数は57とする

	10代以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
女性	0.0	2.6	0.0	2.6	10.5	39.5	44.7	0.0
男性	0.0	0.0	0.0	0.0	13.3	40.0	26.7	20.0
未記入	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	50.0	50.0

	10代以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
全体	0.0	1.8	0.0	1.8	10.5	36.8	40.4	8.8

次から、2019年12月7日（土）八戸ポータルミュージアム「はっち」で行われた「第7回南部弁の日 南部弁さみっと in 八戸」について、来場者アンケートの集計を示す。有効回答数は50である。表は、すべて百分率で表しており、小数点第2位以下を四捨五入して計算した。表記は、百分率で示した。それに続けて、具体的なコメントを記した。

「南部弁さみっと in 八戸2019」

1. 各地の方言による「語り」に関するご感想は？（%）

楽しめた	まあ楽しめた	あまり楽しめなかった	楽しめなかった	その他	未記入
78.0	12.0	2.0	0.0	0.0	8.0

【楽しめた】

- ・八戸の出身でないので地元の方言との違いに気付きながら聞いてとても楽しかった。（10代・女性）
- ・ネズミ浄土、宮城では豆ですけど、ソバモチというのが興味深いです。オシラサマも今まで聞かない独特のものでした。（20代・男性）
- ・とても良かったです。（50代・女性）
- ・方言による語りは何となくほっとする。（60代・男性）
- ・岩手の方の言葉少しわからないところもあったが大変面白かった。（60代・女性）
- ・3番目 イラスト語り共に、吸い込まれるように聞き入りました。（60代・女性）
- ・「どっとはらい」なつかしい言葉でした。（60代・女性）
- ・おなじ釜石でも北と南とでは、違うすごとあ知りませんでした。太平という所は、釜石の北ですか それとも南ですか？（60代）
- ・南部と津軽の昔っこが良かったです。（60代）

- ・それぞれ味があってすばらしかった。(60代)
- ・それぞれの方言がすばらしく話にひぎ込まれました。(70代・女性)
- ・初めての参加でしたが、又参加します。(70代・女性)
- ・子供の頃、祖母に読んでもらい寝たことを思い出してウツラウツラして気持よし。
(70代)
- ・初めて参加して津軽弁、南部弁の違いとか面白かった。(70代)
- ・久々に聞いた語り部、どの話もすばらしかったです。(70代)
- ・南部弁ばかりではなく各地の方言聞けて楽しめました。(70代)

【まあ楽しめた】

- ・「どんつぐ」という話を初めて聞きました。よかったです。(40代・女性)
- ・南部弁になじめなかった。(50代・男性)
- ・聞いた事のない新鮮な内容が楽しかった。(60代・男性)

【あまり楽しめなかった】

- ・言葉が分かりづらい。(70代・女性)

2. 渋谷伯龍氏「わらはんどさ あずましまちコ のごすべし」に関するご感想は？ (%)

楽しめた	まあ楽しめた	あまり楽しめなかった	楽しめなかった	その他	未記入
82.0	6.0	2.0	0.0	0.0	10.0

【楽しめた】

- ・津軽の言葉の語源やルーツが知れて楽しかった。(10代・女性)
- ・クイズもっとほしかったです。(20代・男性)
- ・ていねい、口調がいい、わかりやすい。(40代・男性)
- ・津軽弁のわとなについてよく分った。(50代・男性)
- ・とても良かったです。(50代・女性)
- ・津軽の表現の多様さも楽しめた。(50代・女性)
- ・方言の変化が、面白かった。(60代・男性)
- ・南部弁で川柳やってみたいですね。(60代・男性)
- ・津軽に伝わることば新鮮味がある。(60代・男性)
- ・さすがの話術でした。ただ... 耳たぶは標準語では？ (60代・男性)
- ・方言には歴史があるのがわかっておもしろい。(60代・女性)
- ・時間が足りないくらい楽しめた。もっと聞きたかった。「大和ことば」から転かした言葉の方言、興味深かった。(60代・女性)
- ・クイズ形式や、おしゃべりや、お人柄もすてきで、とてもよかったです。(60代・女性)
- ・分かりやすく説明して頂き良かった。(60代・女性)
- ・テレビで見ていた人を生で拝見できて、話もおもしろかった。理解できた。
(60代・女性)

- ・津軽弁の原点が解っておもしろかった。(60代)
- ・南部と津軽の違いが楽しかった。(70代・男性)
- ・分かりやすく説明してくれました。(70代・女性)
- ・大変楽しく大笑いさせてもらいました。時間が、少ないと感じましたが。(70代・女性)
- ・津軽弁と南部弁のちがいはあれど渋谷先生のユーモアある話に感動しました。
(70代・女性)
- ・やまとことば わ、な 転化ことはっは興味ありました。(70代)
- ・おおいに笑いました。(70代)
- ・南部と津軽弁のちがいがわかった。(70代)
- ・すごくおもしろかったです。始めて参加しました。また来たいです。(70代)
- ・ソフトな語り口で、津軽弁・南部弁の違い等楽しめました。(70代)
- ・お話が上手で聞き安かった。(70代)

【あまり楽しめなかった】

- ・知らねのべでおもしろぐねがった。ぎあねがった。(60代)

3. プログラム全体のご感想やご要望などをお聞かせください。

【感想】

- ・初めて参加してとても楽しませて頂きました。(10代)
- ・南部弁の先生のお話もあっていいかよ。(40代・男性)
- ・あっというまの2時間でした。来年以降も楽しみにしています。(40代・女性)
- ・地域により、様々さが非常に楽しかった。(50代・女性)
- ・昔語りの間に伯龍さんのお話が入ってあきずに楽しめた。(60代・女性)
- ・面白かったです。(60代・男性)
- ・長い話の場合途中でわからなくなってしまった。(自分が疲れていたから)(60代・男性)
- ・バラエティに富んでおもしろかった。(60代・女性)
- ・それぞれの地方のちがいが感じられ良かった。(60代・女性)
- ・語りもバラエティに富んでいて、渋谷さんのお話もとてもよかったです。(60代・女性)
- ・すごく良かった。(2名)
- ・バランスが良くできていた。(60代)
- ・時間的にもちょうど良く楽しめた。(60代)
- ・来年が楽しみ。(70代・男性)
- ・他地方の語りをたくさん聞くことが出来、大変良かったです。(70代・女性)
- ・初めてのさみっとでしたが、とても良かったです。(70代)
- ・方言のおはなし、木下さん以外あまりおもしろくないですね。(70代)
- ・これからもご活躍されるますこと。伯龍先生のお話おもしろかったです。(70代)

【要望】

- ・方言で分かりにくい部分は解説が欲しい。(50代・男性)
- ・またやってほしい。渋谷さんをよんで下さい。(50代・女性)
- ・これからも各地の昔コの交流が続けていけたらいいなと思います。(70代・女性)

4. 地域の方言について、保存・継承していく必要はあるとお考えですか？ (%)

大いにある	ある程度ある	わからない	あまりない	全くない	未記入
76.0	20.0	0.0	0.0	0.0	4.0

【大いにある】

- ・ 地域の特徴、文化が失われてしまうから、方言は必要だと思う。(10代・女性)
- ・ 民話のエネルギーって方言から来ると思うんです。(20代・男性)
- ・ ふるさとの言葉を覚えていると、たとえ故郷を離れていても故郷を懐かしむことができるし、温かい気持ちになるから。同郷という気持ちが芽生えるから。(20代・女性)
- ・ 地域存在のそのものだから。(40代・男性)
- ・ 標準語のみではかなしい。(50代・男性)
- ・ 現在に至るまでの歴史の結果だから。(50代・男性)
- ・ 地域の歴史と文化を引き継ぐ事が重要。(60代・男性)
- ・ 方言使うのは楽しい。津軽弁南部弁問わず。(60代・男性)
- ・ 地方につたわる昔の言葉若い人はあまり使わなくなっているので継承していかなければならない。(60代・男性)
- ・ 地元愛を育むため。(60代・女性)
- ・ 教科に「古典」があるのと同じで、言葉(言語)は変遷するが保存すべき。(60代・女性)
- ・ 方言は文化です。(60代・男性)
- ・ 地域のことばだから。(60代)
- ・ 文化を継承していくのに言葉は大事と思う。(60代)
- ・ まんずとにかくそこの地域の大きな特長とへったてよがんすからナス。(60代)
- ・ 方言でなければ土地の良さが伝わらない事がある？(70代・男性)
- ・ 地域の文化だと思います。(70代・女性)
- ・ 語りの方々をたやさないでください。(70代・女性)
- ・ 市内のきれいな方言があります。そうだきゃ とか そうだすけ 等。(70代)
- ・ 親しみを感じる。(70代)
- ・ やさしい方言で心なごみます。(70代)
- ・ 皆平等の時代。特ちょうの有るのが良いと思う。(70代)
- ・ あたたかい気持ちになる方言、大事だと思いました。(70代)

【ある程度ある】

- ・ 60代の私でも知らない、すでに使わなくなった方言がある。方言は知っている人にはなつかしい。(60代・女性)

5. 今日の催しのことを何で知りましたか？ (%) ※HP：ホームページの略

新聞	ラジオ	ポスター	大学HP	はっちHP	その他	未記入
33.9	3.2	11.3	1.6	17.7	32.3	0.0

【その他】

- ・友人・知人（6名）
- ・会場で（3名）
- ・広報（60代）
- ・SNS（60代・男性）
- ・毎年見ているから（60代）

6. 回答者の属性（%）

	10代以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
女性	4.8	4.8	0.0	4.8	14.3	28.6	42.9	0.0
男性	0.0	20.0	0.0	10.0	20.0	40.0	10.0	0.0
未記入	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	31.6	63.2	5.3

	10代以下	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代以上
全体	2.0	6.0	0.0	4.0	10.0	32.0	44.0	2.0

4. 弘前学院大学シンポジウム 「アイヌ語・アイヌ文化と東北・東北方言」



4. 弘前学院大学シンポジウム 「アイヌ語・アイヌ文化と東北・東北方言」

2020年1月11日（土）13:00～15:30、弘前学院大学の礼拝堂にて、アイヌ語とアイヌ文化の豊かさ、東北との関わりを知り、さらに消滅の危機にある言語としてのアイヌ語に対する保存と継承活動について考える機会として、シンポジウム「アイヌ語・アイヌ文化と東北・東北方言」を開催した。



北海道大学アイヌ・先住民研究センターの北原次郎太氏による基調講演、弘前学院大学の井上諭一氏と岩手大学の犬野眞男氏によるご報告が行われた。地域の方々を中心に約180人以上の方に来場いただいた。

会場では、アイヌ文化を取り扱った漫画『ゴールデンカムイ』や方言関係の書籍の他に、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構のご協力により『初級アイヌ語－釧路・白糠』、『くしろ・しらぬかのアイヌご』、アイヌの伝統・文化を題材にした絵本『くまのしっぽがみじかくなったわけ』、『へカッター シノツ ～むかしのアイヌのこどもたち～』、『アイヌごであそぼう』などのご寄贈いただいた本を展示した。また、2020年4月24日に北海道白老町でアイヌ文化復興・創造の拠点として誕生するウポポイ（民族共生象徴空間）のパンフレット、その他、弘前学院大学がこれまで取り組んできた東日本大震災の被災地方言の研究・支援活動に関する報告書や、犬野眞男先生のご著書『方言・アイヌ語と菅江真澄』が掲載されている『菅江真澄が見た日本』などを展示した。



次 第

1. 趣旨説明「危機言語としてのアイヌ語」
弘前学院大学・文学部 今村かほる
2. 基調講演「アイヌ語とアイヌ文化」
北海道大学アイヌ・先住民研究センター 北原次郎太氏
3. 報告1「日本マンガ史における『ゴールデンカムイ』の位置」
弘前学院大学・文学部 井上諭一氏
4. 報告2「アイヌ語地名と菅江真澄」
岩手大学・教育学部 大野眞男氏

4.1 趣旨説明 「危機言語としてのアイヌ語」 弘前学院大学・文学部 今村かほる

シンポジウムの初めに、今村かほるによるシンポジウム開催の経緯について説明があった。

まず危機言語とは何か、今回のテーマとなっているアイヌ語、東北方言は現在どのような状況に置かれているのか説明した。また、それらの方言はどのような状況にあり、保存・継承がなぜ必要であるのか、そしてそのために行われていることとは何か、具体的には弘前学院大学での取り組みなどが紹介された。

アイヌ語と東北方言には重なる部分があるということ、また、方言が保存・継承されていくことがなぜ必要であるのか伝えることができた。

次から今村の趣旨説明のスライドを掲載する。



1

危機にある方言

ユネスコ(国連教育科学文化機関)

- 2009年2月
 - 2500種の言語が消滅の危機
 - 消滅の危機の程度・4段階
- | | |
|---------|-------|
| 「極めて深刻」 | 538言語 |
| 「重大な危険」 | 502言語 |
| 「危険」 | 632言語 |
| 「脆弱」 | 607言語 |

2

日本の危機言語

ユネスコが2009(平成21)年2月に発表した“Atlas of the World's Languages in Danger”に基づくと、日本は、8言語・方言がその中に含まれている

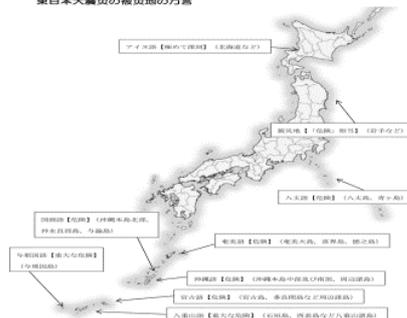
【極めて深刻】: アイヌ語

【重大な危機】: 八重山語(八重山方言)
与那国語(与那国方言)

【危険】: 八丈語(八丈方言), 奄美語(奄美方言),
国頭語(国頭方言), 沖縄語(沖縄方言),
宮古語(宮古方言)

- ユネスコが認定した、日本における危機言語・方言の分布図
- http://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/pdf/bunpuzu.pdf

“Atlas of the World's Languages in Danger” (UNESCO2009) で
消滅の危機にあるとされた日本国内の言語・方言 及び
東日本大震災の被災地の方言



3

4

文化庁: アイヌ語の保存・継承に 必要なアーカイブ化事業

- ユネスコが「最も消滅の危機に瀕している」と認定しているアイヌ語について、「アイヌ政策のあり方に関する有識者懇談会報告」(平成21年7月)、「北海道外アイヌ生活実態調査」を踏まえた全国的見地からの施策の展開について」(平成24年6月・アイヌ政策推進会議政策推進作業部会)、国連経済的、社会的及び文化的権利に関する委員会最終見解(平成25年3月)及び国連人種差別撤廃委員会最終見解(平成26年9月)の指摘を踏まえ、各地で保存されているアイヌ語の音声資料をアーカイブとして公開するため、アナログ資料のデジタル化とアーカイブ作成の支援を行っている。

*詳しくは文化庁「消滅の危機にある言語・方言」HP

東日本大震災と方言

- 被災や避難によりコミュニティの維持そのものが危機的状況にあり、消滅の危機にあると考えられる被災地域の方言について、

「東日本大震災からの復興の基本方針」

(平成23年7月29日)

「地域のたから」である文化財や歴史資料の修理・修復を進めるとともに、伝統行事や方言の再興等を支援する。

5

6

文化庁 危機言語事業

2012(平成24)年度

東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究事業

2013(平成25)年度から

被災地における方言の活性化支援事業

被災地域の方言の保存・継承の取組や方言の力を活用した復興の取組を支援することにより、被災地域の方言の再興及び地域コミュニティの再生に寄与することを目的

青森県の方言を取り巻く状況

- 急激な高齢化・少子化・国際化などの社会環境の変化
- 外国語・外来語・若者語
- 方言が通じない・話せない
→ 世代間コミュニケーションの問題

7

8

弘前学院大学の取り組み
発信！方言の魅力
かだるびやかだるべし青森県の方言

- ①学校教育 方言と共通語の授業
方言聞き比べ教室
- ②生涯学習としての方言
「南部弁の日」南部弁さみっと
岩手の南部弁とのつながり
- ③語り部ネットワークの立ち上げ 2015年

9

平成29年中学校新学習指導要領解説
知識及び技能 我が国の言語文化に関する事項

- ・ 共通語は地域を越えて通じる言葉であり、方言はある地域に限って使用される言葉である。共通語を適切に使うことで、異なる地域の人々が互いの伝えたいことを理解することができる。一方、方言は生まれ育った地域の文化や風土とともに歴史的、社会的伝統に根差した言葉であり、その価値を見直し、保存・継承に取り組んでいる地域もある。
- ・ 例えば東日本大震災の被災地域においても、方言を使うことで被災者の心が癒されるなどした事例が報告されるとともに、方言の保存・継承の取組そのものが地域コミュニティの再生に寄与するなど、地域の復興に方言の力を活用する取組も進められている。

10

ことばの保存と継承のために

- ・ ことばは、人類の受け継いできた知恵そのものの結晶。
- ・ ことばがなくなれば、知恵・宝そのものがなくなってしまう。
- ・ 地域言語という地域の知恵・宝を守ることの大切さ

11

講師紹介

- 北原次郎太先生 北海道大学 アイヌ・先住民研究センター
東アジアの木製祭祀具、アイヌ語、口承文芸、民族音楽。古代日本(とくに東北地方)の文化と、北海道文化・アイヌ文化との関係について、宗教・儀礼にかかわる金属製品や木製品などの分布や形態、機能について研究。
- 井上諭一先生 弘前学院大学文学部
近代文学・現代文学、マンガ・映像研究。
- 大野眞男先生 岩手大学教育学部
方言学・東北方言・琉球方言、言語政策史研究。

12

4.2 基調講演 「アイヌ語とアイヌ文化」

北海道大学アイヌ・先住民研究センター 北原次郎太氏

北海道大学アイヌ・先住民研究センターの北原次郎太氏に、アイヌ語とアイヌ文化についてのご講演をしていただいた。

冒頭、アイヌ語で自己紹介などをしていただいた。会場からのコメントに初めてアイヌ語を聞いたというものも多く、新しい学びの場となった。

アイヌ民族とはどこで、どのような暮らしをしていた人たちであるのか、文化的、言語的な関係性も交えながら説明していただいた。また、アイヌと東北の文化の共通点について、東北でも知られているアイヌ語や東北地方に存在するアイヌ語の地名などを踏まえて解説してくださった。世界や東北に存在する祭具とアイヌの祭具に共通点があることをお話してくださった。アイヌの暮らしや生活から、信仰、世界観に至るまで様々な視点からアイヌ語、アイヌ文化について説明をしていただいた。



アイヌ文化は北海道のものだけではなく、様々な文化と影響し合いながら広がっていることを知ることができた。文化を知り、継承していくことについて考える貴重な機会となった。



次から北原氏のご講演のスライドを掲載する。

2020.1.11
弘前学院大学シンポジウム
アイヌ語・アイヌ文化と東北・東北方言

アイヌ語とアイヌ文化

北海道大学アイヌ・先住民研究センター
北原モコツウナシ

1

講演のねらい

- ・アイヌ文化と東北の文化を、広い地域の中に位置づけ、相互についてのより深い理解を目指す。
- ・言語、文化の継承など、双方の文化が共通して直面する今日的課題を考える。

2

日本列島北部の先住民民族 アイヌについて

アイヌ語 — 日本国内の異言語

- ・東北でも知られている言葉
くつ:ケレ ふきのとう:パッカイ
犬:セタ 船:チブ
- ・日本語で靴という物をアイヌ語ではケレという。
シサム オッタ 靴 アリアイエブ、
アイヌ オッタ ケレ アリアイエ。
- ・私の靴をはく:クケリ クウシ。
- ・私の犬を連れて山仕事に行く:
クコロセタ クトウラ ワ クエキムネ。

3

4

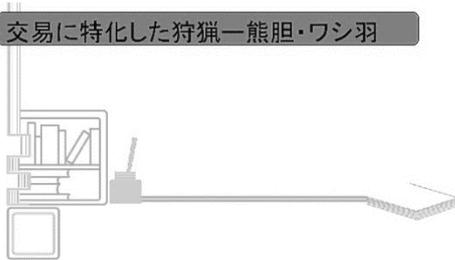
ユク(シカ)の利用

- ルシ(子ホキ)ー毛皮
- カムー肉
- スムー油
- リッー腱
- キサラー耳
- ヌンペーにかわ
- クヨイー膀胱
- ポネー骨
- キラウー角

5

6

交易に特化した狩猟ー熊胆・ワシ羽



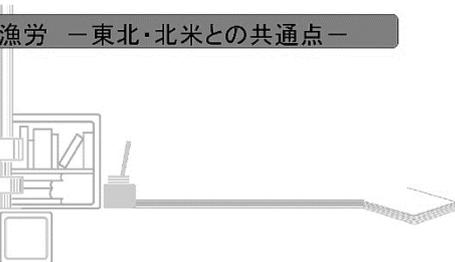
7

◇罨ー絞める、射抜く、挟む... ホイヌカ(テン罨)



8

漁労 — 東北・北米との共通点 —



9

・魚叩棒、初サケ儀礼の文化は環太平洋北部に広く見られる。実用面のみでなく、付随する精神文化にも共通性。

トリングット民族の
鯨が彫られた棒

和人(東北)のエビスボウ

10

◇利用法

保存食、カヤ「魚皮衣」、チェブケレ「魚皮製靴」...



11

採集 —食材・日用品の生産—

12

・本州の靱皮繊維利用
秋田の科布

アイヌ文様 —南北文化の融合—

13

14

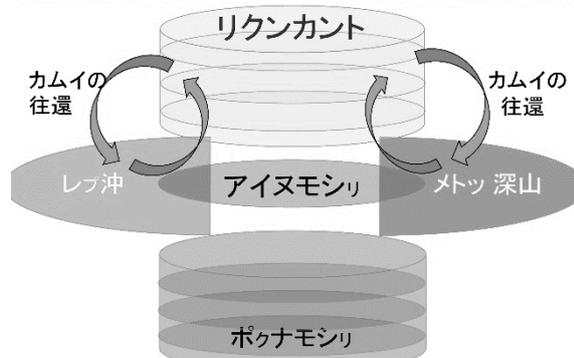
信仰 —アニミズム的世界観—

- ・心身二元論: 動植物は身体と魂(ラマツ)からなる
→ 肉体は仮のもの、ラマツは不滅
- ・動植物は肉体を人間に提供してくれる



15

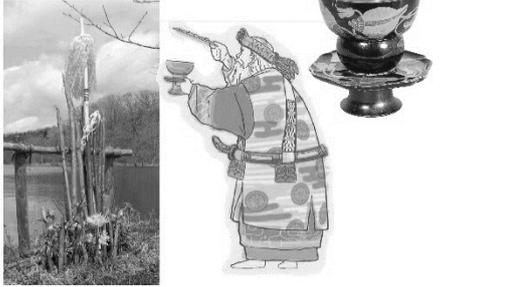
神界はどこにあるか—垂直的/水平的世界観



16

儀礼 — 神と人の互恵的關係 —

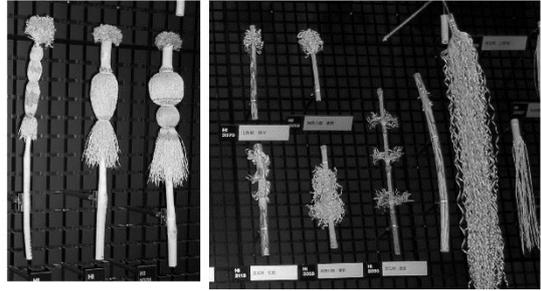
- 奉獻と共餐を通じた神と人の結束
- イナウと神酒



17

南方に広がるイナウ状祭具

- 「削りかけ」(日本海南部・北九州以外)
- 小正月や彼岸の飾りとして
- 寺社の祭礼に取り入れられた例も



18

南方に広がるイナウ状祭具
ボルネオ、ラオス、ベトナム、インド

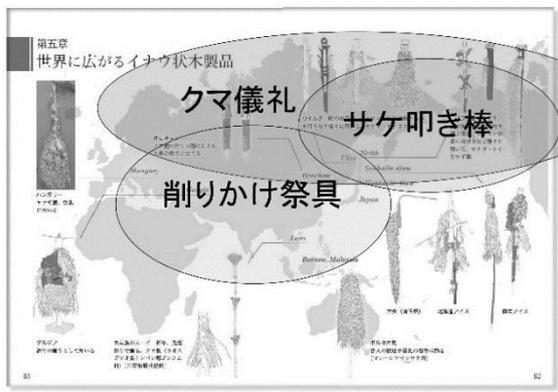


19

西方に広がるイナウ状祭具
ジョージア、ハンガリー、ドイツ

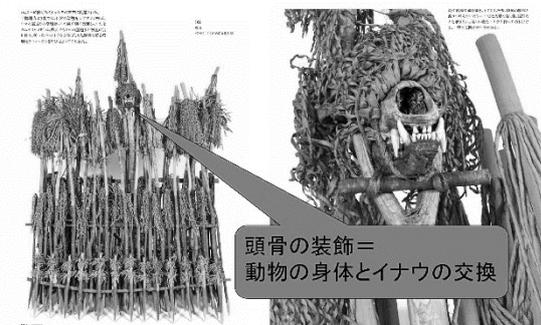


20



21

霊送り — アイヌ文化の北方的要素 —



22

飼い熊送り —アイヌ文化の北方的要素



23

日本海沿岸に残るイナウ(北前船関連資料)

石川県輪島市黒島若宮八幡宮
「奉納イナウ額」(明治20~21年頃)



24

日本海沿岸に残るイナウ(北前船関連資料)

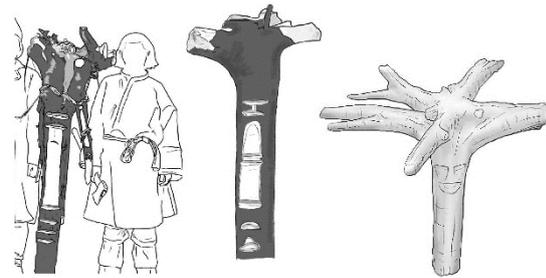
青森県深浦町円覚寺のイナウ



25

東北との共通点—逆木神像—

樺太東海岸 西海岸 アムール(ウデヘ民族)



26

秋田県



群馬県 オキンマラ↓

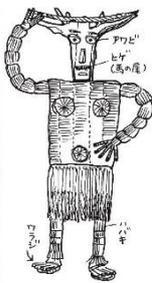


図 2-2 秋田県能代市の逆木を使った製像 神

27

参考文献

- (公財)アイヌ文化振興・研究推進機構
2018『キムンカムイとアイヌ—春夏秋冬』
平成30年度アイヌ工芸品展図録。
- 今石みぎわ・北原次郎太
2014『花とイナウ —世界の中のアイヌ文化—』
北海道大学アイヌ・先住民研究センターブックレット4。
- 北原モコツウナン・葦島栄紀監修
2018『もっと知りたい アイヌ』岩崎書店。
- 中川裕
1995『アイヌ語をフィールドワークする』大修館書店。

28

4.3 報告1 「日本マンガ史における『ゴールデンカムイ』の位置」 弘前学院大学・文学部 井上諭一氏

本学日本語・日本文学科教授の井上諭一氏より、アイヌ文化を取り扱った漫画である『ゴールデンカムイ』を取り上げた報告があった。

その特徴として、言語への関心、食文化、金（ゴールドラッシュ）の3つのポイントを挙げ、それらの解説と、『ゴールデンカムイ』と共通のモチーフを持つ過去に発表された作品の紹介を通して漫画として高い到達点にある『ゴールデンカムイ』について論じた。



次から井上氏の報告の資料を掲載する。

1 高い到達点としての野田サトル「ゴールデンカムイ」

「ゴールデンカムイ」は2014年8月～現在、「ヤングジャンプ」に連載中のマンガである。大変な人気作品で、累計の販売冊数は既に1000万部を超えているが、日本のマンガ史において画期的な部分を含んでいる。それは多岐に渡るが、今回は特に重要と思われる以下の三点について考える。

本日の注目点

- ① 言語への関心
- ② 食文化（食事、調理）への関心
- ③ 金（金塊、砂金、埋蔵金、その他）のモチーフ

「ゴールデンカムイ」におけるこれらの要素は、時に伝奇小説的な部分を孕みつつ展開される。中でも印象深いシーンを抜き出すと、以下の通りである。

①言語への関心

既に中川裕・野田サトル『アイヌ文化で読み解く「ゴールデンカムイ」』（2019年3月、集英社新書）に指摘があるが、主人公である杉元が、自身十分にはわからない言語であるアイヌ語に向かうときの姿勢が重要である。例えば、このような描写。

（杉元）「…………… わかったよ お婆ちゃん」「アシリパさんはお婆ちゃんに愛さ

れているんだな 村のみんなにも」

まず分からない言語があると（その話者がいると）認めること、また、分からないなりに文脈から理解しようと努めることが描かれている。そう読むためにここで大切なのは、杉元のセリフの最初（吹き出し中）にある「……………」(リード)である。これは無言や間を表す日本マンガの文法で、典型的には60～70年代の劇画に見られるものだ。例えば「ゴルゴ13」(1969～)

これによって、ここに杉元が、言葉が分からないでいること、しかし文脈から意味を汲み取ろうと考える間があったことが明らかになる。

②食文化（食事、調理）への関心

たとえば、アイヌの少女アシリパが作ったチタタブについての杉元の評言は、こうである。「肉は臭みが無く ほんのりと甘くて木の実の香りがある」「柔らかい肉の中に細かく刻んだ骨のコリコリした食感が良い」

これは到底、明治30年代に「俺は不死身の杉元だ!!!」と叫ぶ、一種荒くれ者の言葉とは思われず、日本マンガにおける有力な一ジャンルである料理マンガの言葉を受け継いでいるだろう。(例えば、「美味しんぼ」「おせん」など)

これらを見てもわかるように、「ゴールデンカムイ」における達成はいきなり成し遂げられたのではない。過去にあった作品の吸収・変形(引用)という側面もあるのである。そこで、先行する作品(材源)を探ることが重要になる。

2「ゴールデンカムイ」に先行する作品の特徴

アイヌ・アイヌ文化を描いた作品はあるが、食事や言語のディテールに焦点を当てた作品・場面が、過去の作品ではとても少ないことに注意しなければならない。「ゴールデンカムイ」の、特に評価される所以である。

先行作品としては、手塚治虫『シュマリ』(昭和49年(1974年)6月～昭和51年4月「ビッグコミック」連載)や、同『勇者ダン』(昭和37年(1962年)7月～12月「週刊少年サンデー」連載)などが真っ先に挙げられる。『勇者ダン』は、人語を解するトラとアイヌの少年との連帯を主調とする物語で、物語当初は同じ作者の『ジャングル大帝』の北海道版のような様相である。ここで、トラと人間の間で言葉が通じる、という要素からして、言語それ自体への関心へと物語が高まって行きそうなものであるが、実際には中盤以降、実はアイヌが守ってきた超古代の技術(宇宙人によるオーバーテクノロジー)があるというファンタジーへと、驚くべき展開を見せる。それはそれで重要な論点を含むが、せつかくの言語への問題意識は中断したかたちになってしまった。

後の『シュマリ』では、主人公の呼び名自体がアイヌ語由来であり、いわゆる「和人」による収奪に対しても、作品中で言及されている。中でも、北海道の自然を前にして、主人公シュマリがこのように語るシーンに注目したい。

「果ても無え原野だ こりゃみんなアイヌの土地なんだ」

これを例えば、本庄陸男「石狩川」(1939)における以下のような記述と比べてみれば、発表年代が違うとはいえ「シュマリ」の問題意識の的確さは明らかだ。

「トウベツとやらは、まことに人跡未踏でござろうか」
「だんだん調べたところによれば、そう考えたが間違いないと思うが一何か？」(中略)
「これからが」と彼は力をこめて、「わがトウベツ！」

ただ、「シュマリ」においても、このような“帝国主義的”収奪に関する問題意識は完結していない。作品末尾では主人公シュマリが大陸に渡って浪人しているらしい描写があり、大陸侵略のための雛形としての北海道「開拓」(内国植民地化)という要素には触れられている。

以上のように、手塚の2作品は、北海道開拓とアイヌ、アイヌ語に対する考察のきっかけを内包しながら、それが途中になってしまったということができよう。シンポジウムでは、このほか、つのだじろう『あかね雲のうた』(初出未詳(「りぼん」連載、1965?)初刊 昭和44年(1969年)虫プロ商事)などにも言及した。また、他の論点としては、上記の③(黄金、ゴールドラッシュのモチーフ)があり、さらに「ゴールドカムイ」のいわば“横並び”として日本の中の“非農耕的文化”を描く、現代のマンガ(例;岡本健太郎「山賊ダイアリー」2011年2月~2016年8月、「イブニング」連載)などにも触れた。

4.4 報告2 「蝦夷語地名と菅江真澄」

岩手大学・教育学部 大野真男氏

岩手大学教育学部教授の大野真男氏から、菅江真澄を中心としたアイヌ語地名に関するご報告をいただいた。なお、予告では「アイヌ語地名と菅江真澄」としてご案内したが、当日、大野先生より、当時はアイヌ語ではなく「蝦夷語」と称していたことから演題を「蝦夷語地名と菅江真澄」とする旨のご説明があった。

『菅江真澄全集』における蝦夷人・蝦夷文化に関する資料について時系列に紹介していただき、さらに、菅江真澄のアイヌ語地名解の妥当性について検討している一連の研究についてお話していただいた。



次から大野氏のご報告の資料を掲載する。

「蝦夷語地名と菅江真澄」

大野真男(岩手大学)

一. 本発表の概要

菅江真澄(白井秀雄)は、宝暦四(一七五四)年に三河に生まれ、天明三(一七八三)年、三十歳で故郷を旅たつてから一度も帰郷することなく、文政一二(一八二九)年、秋田の角館で客死するまで終生を旅に送り、『菅江真澄遊覧記』をはじめとする膨大な旅の記録を残した。真澄の足跡は信濃、出羽、陸奥、そして蝦夷地にまで及び、各地の年中行事や民間信仰など当時の庶民の暮らしが克明に活写されている。

『遊覧記』をはじめとする真澄の記録は各地で埋もれた状況にあったのを、貴重な民俗の記録として掘り起こしたのは柳田国男であった。昭和二(一九二七)年に秋田で開かれた真澄没後百年祭で、柳田は「秋田県と柳田国男」と題する講演を行い秋田県人に対する啓発を行っている。昭和五(一九二七)年には、柳田の東北文化論ともいえる『雪国の春』¹に「真澄遊覧記を読む」が書き下ろしで収載され、さらには『菅江真澄』が昭和一七(一九四二)年に刊行されると、真澄の日本民俗学開祖としての価値が広く知られるようになっていった。しかし、そのころから自らの民俗学の枠組みの確立とひきかえに、柳田の「真澄離れ」が進んでいったこと(石井正己『柳田国男の見た菅江真澄』二〇一〇年・三弥井書店を参照)や、戦争へと向かう当時の社会情勢により、真澄の記録の全容を刊行する取り組みは挫折してしまう。

柳田の『菅江真澄』を懐にして生まれ故郷の秋田に疎開していった内田武志によって、戦後の真澄研究は受け継がれていく。内田の最大の功績は『菅江真澄全集』の刊行であった。全集刊行以前にも、平凡社東洋文庫から内田武志・宮本常一編訳『菅江真澄遊覧記1〜5』が昭和四〇(一九六五)年から刊行されたが、遊覧記の全文ではなく、膨大な短歌などはすべて削除され、原文が読みづらいためすべて現代語訳されており、読みやすい一方で一次資料としての価値は損ねられている。それでも、血友病のため生涯病床を離れることのできなかつた内田は、第一巻あとがきに「病臥したきりで室内も歩けないような人間が、稀代の旅行家の記録をまとめようとするのは、なにかと不便が多かった。」と、各地に散在する遊覧記の写本を収集する苦勞について自虐をまじえて述べている。

省略のない原文通りの遊覧記は、昭和四六(一九七一)年から始まる内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』(未来社)の刊行をまたなければならなかつた。全集刊行によって真

澄の全容を知る機会がはじめてもたらされたことは、柳田国男が自らの日本民俗学研究の開祖と見なした戦前の真澄論とは異なる視座を据えた、新たな菅江真澄研究の出発点に我々は立たされたということができらるだろう。

柳田は、真澄の蝦夷渡りについて積極的に評価する言説を残していない。そのことは、柳田民俗学の枠組みと直接関わる大きな問題であろう。拙論「方言・アイヌ語と菅江真澄」(石井正己編『菅江真澄が見た日本』二〇一八、三弥井書店に所収)参考資料)で論じたのもその観点に基づくものであった。真澄の旅は、蝦夷渡りまでは「部のいにしへぶり」を地方の庶民生活の中に探求するものであり、地方の方言についても当時の越谷吾山『物類称呼』などで述べられているように、あながちに褒貶すべきものではなく、むしろ「いにしへぶり」をそこに見出すべきものであるという立場で一貫している。ちょうど、柳田の方言圏論に反映する国語イデオロギの萌芽をそこに見るようだ。拙論の前半ではそのことを論じた。

しかし、天明八年、蝦夷地から戻ってから以降は、蝦夷が島での見聞が北奥羽の世界を見つめる真澄の眼差しの底に反映してくるようになる。具体的には、北奥羽と蝦夷人との歴史的関わりと、蝦夷語に由来する地名の問題である。蝦夷渡りまでは「部のいにしへぶり」と称揚してきた地方文化の古風さでは説明しつくせない、北奥羽の文化の基層の存在についての言及が行われるようになっていく。拙論の後半ではそのことを論じた。

なお、そのような真澄のアイヌ語地名の「発見」の重要性については、菊池勇夫『菅江 2 真澄が見たアイヌ文化』(二〇一〇年・神奈川大学評論ブックレット三〇)で夙に触れられていることを明記しておく。

以上の経緯を踏まえて、本発表では以下の二点について呈示することを目的とする。

- ① 先の拙論では割愛せざるを得なかった真澄による蝦夷語地名(アイヌ語という名称は近代以降のものである)と蝦夷人・蝦夷文化に言及した遊覧記記載部分を、『菅江真澄全集』から抜き出し時系列に示す。
- ② アイヌ語系地名の研究は、明治以降、B・H・チエンバレン、金田一京助らによって発展を遂げていくが、現時点で最も信頼のおける山田秀三による一連の研究と突き合わせ「注」として示すことで、真澄のアイヌ語地名解の妥当性について検証をはかっていく。資料として用いたのは山田秀三『アイヌ語地名の研究 1~4』(一九九五・草風館)等である。

二において、参照各巻を「山田①~④」のように示した。また、蝦夷語地名への言及を「☆」印で、蝦夷人・蝦夷文化への言及を「◎」印で分類して示した。遊覧記の各巻名称については、漢字のみを用いた遊覧記本来の方葉仮名的表記は煩雑で分かりにくいため、平仮名表記とした。

二 『菅江真澄遊覧記』中の蝦夷語地名及び蝦夷人・蝦夷文化への言及箇所

「あきたのかりね」

天明五年九月二十九日 象潟 ◎

行かふ人の、アツシといふ蝦夷の嶋人の木の膜におりて、ぬひものしたるみじかき衣をきて、ちいさきゑぞかたな（かきりといふ小刀なり、蝦夷人足をエヒラといふ）こしにかけ、火うち袋そへたり。

「そとがはまづたい」

天明八年七月十一日 宇鉄 ◎

旧島鏡（宇鉄）川をわたりて、上島鏡（宇鉄）の油といふやかたに巳のとき斗につく。此浦人はもと蝦夷の末ながら、ものいひ、さらに、ことうらにことならず。近きむかしとやらんに鬚そりて頭そりて、女も文身あらで、そのけぢめなし。うらのをさ四郎三郎といふがもとに宿かる。むかしは浦くに蝦夷や多かりけん、にぎえぞ、あらえぞなどもほらいへり。猶ありたりし母衣月の弊岐利婆が末の子を又右衛門といひ、松が崎の加布多以武、その末を今は治郎兵衛といひ、藤島の牟左訶以武、いまその末をは清八といひ、宇氏通（宇鉄）の久摩他可以武が末なるは、此宿のあるじの四郎三郎なり。此四人の保長とて、浜名浦の七郎右衛門をいまもおやかたといひ、としのくれなどには万府てふ、海狗（とど）にたぐふ、うなのけものを小島のあたりにとりて、その浜名のをとながもとに土毛にをくりたりしよし。

注 山田秀三「津軽の狄村の記録」（昭和四七年・国学院雑誌七三二一一・『アイヌ語地名の研究3』所収）には真澄への言及はないが、山田「津軽海峡のアイヌ語時代―東北と北海道の地名接点部分の研究」（昭和五七年・『アイヌ語地名の研究1』所収）には真澄の「粟土ヶ浜づたい」が資料として盛り込まれている。『菅江真澄全集』（未来社）の刊行が昭和四六年からであったことによるのであろう。

同月十三日 三厩 ◎

ふねの磯近う来寄たるに、宿の男岩の上に立てしかぐといへば、ぶんまよくばといふ。いらへて、びるかならんといへり。こはみな島渡りなれたるものゝ、るみしらが言葉を聞ならひていふなり。夫牟万とは賃銭をいひ、比留加とは良といふことなりとか。

〈天明八年七月より寛政四年十月まで、足掛け五年間、蝦夷地（道南地域）を遊歴する。〉

「まきのふゆがれ」

寛政四年十月八日 仏が宇多（仏が浦） ◎

西は長後、福浦、牛滝（いずれも佐井村）など行に、仏か宇多（仏が浦）といふ処ありけるは、石の形卒塔婆に似たり。このわたりのざえもく石ことに長やかにて、五尺、七尺に

及びたり。こは、源九郎判官此磯より松前の島に橋わたし給ひてんと、こらのざえもくを牛につけてひかせ給ふるうし、たふれふしたればとて牛滝の名あり。その材木もみな右とくゑ(化)したると、うしひくあげまきのかたりぬ。ひろまへにまうで奉れば、蝦夷人の、弓矢に以南乎(いなお)奉りたるは、あらしきゑびすのころもなごやかに、神のおほんめぐみに、ひかれなびきたるあまりにやあらん。

同月十日 異国間(易国間) ◎

異国間(易国間)といふは、いにしへ、こまうどのはなたれ米りしよりいふとも人のいへり。此浦に夷人すみて、其末いまでもありとぞ。

「おくのうらうら」

寛政五年五月一日 宿野辺(宿野部) ☆

めくら河といふ小河わたりて宿野辺(宿野部)に来けり。こを、むかしの夷人の、スクノベツとかいひたる。河渡りて広野を過て、檜河をわたれば村あり。世中やはしきとし、人みな、にげしぞき松前に島わたりして、むなく平所といふ名のみたてりといふ。

注 山田秀三『アイヌ語地名の研究3』(以下、山田③)二一九頁に、「シユブ・オツ・ペ(うぐい魚・多くいる・もの)、続けて発音するのでシユブノツペ。オツは「いる」の複数形。ペは動詞(あるいは形容詞)について名詞の形にする言葉。「物、者」などの意。この場合は「川」を指して呼んだ形。青森県の宿野部も同じアイヌ語だったようだ。」とある。

「おぶちのまき」

寛政五年十一月二十九日 大井辺(東通村老部) ☆

大蘭の庭をるをわざにすれば、おほあべともいふにこそあらめとほゝゑめば、あるじ猶笑ふ。此名、夷のいひしにや、むかし此あたりに、もはら住たりけん。ここの隣の油を白糠といふも、しか、それらがいひたるならん。いまでも、オキベ、シラスカ、夷のしまにありける名なり。

注 山田②一〇九頁に網走付近の「奥蘆別川」の説明として、「〔知里博士(分類アイヌ語辞典植物篇)か)オ・クシ・ウン・ベツ Okush-un-pet 川向こうにある川。〕とあるのが該当するか。また、山田③一一五頁の「白糠」の項に「下北半島の太平洋岸は、北の尻笥から始まって、長い殆ど直線の砂浜だ。尻笥からその砂浜を七里余南下して、下北北部の郡境迄来た処が白糠の部落である(該当箇所)。北海道は釧路の手前に同音の白糠がある。その語義に付いて、昔は違った解もあつたが、最近の学者方の意見に依ればシラル(岩)・カ(上、上)から来たものとされている。」とある。

同月三十日 泊(上北郡六カ所村) ◎

このあたりは蝦夷人のすみしふるあとといふは、うべならん、夷やしきといふところあり。泊の浦につけば、空かきくれて雪のふりきぬべう見えたりしかば、いまだ口たかう、この浦のをき、種市といふあるじのもとに宿かりぬ。

「おくのでぶり」

寛政六年二月十五日 大畑 ☆

びつつけといふ浜に出てけり。こゝも、そのかみは蝦夷人のすみてヒツ。ツケといふ処、大畑に近づく、**のつころ**（野頭）てふはまもノ。ツコルとて、ゑみしらがいひし名也けりとか。

注 「びつつけ」は山田①、④になく、不明。「のつころ」は、山田②二一九頁の能取湖の説明として「この湖の北東方に、能取岬があつて、オホーツク海に突き出している。アイヌ名はノテト（*Noteto* 岬）だったらしい。そこをまた、ノトロ（*Notoro* 岬・処）と呼んだ。アイヌの部落名ノトロ・コタンはそれからついたものであろう。」とあることが該当するか。あるいは、山田④八五頁に「野幌（野津幌）」の説明として、「野幌は、起源としては、多分、『北海道駅名の起源』二十九年版の書いたようにヌポロベツ（野の中の川）であつたのだから、川名あるいは地名としては、下略されて、単に、ヌポロ（ヌブ・オロ）という名で呼ばれていたのであるようだ。それが和人に受け継がれて、「ノポロ」「のつぼろ」と訛つたのであろう。」に該当するか。

同月十六日 みなとへ ◎

それに家ども多くたてならべたるが、去年の高波にうちくづされて、こゝらの尸（しかばね）出たりしは、みな、ふしたるまゝに埋しは、夷のまかりたるならん。蝦夷は死したる人をば、いねたるふりに、むしろに巻て塚にこめぬ。さりければ、こゝに住しといふこそ、うべならめと。海越に遠うたちのぼるは、涌山（恵山）のけぶりたかうなびき、雲かあらぬかと雪の真白に残たるはトトホツケ（蝦法華）、あるはオサ。ツベ（尾札部）などいふめ⁵るあたりの、見わたしもいとちかう。

消のこる雪は花かと又たぐひ波間に霞む夷の遠嶋

「つがろのおく」

寛政七年三月二十三日 鑑崎 ☆

下つかたにははやあり、うちまひろうして、かたる（乞食）など行くれば、此いはむろに洎すと云ふ。そとさしのぞけば、うち、ほのぐらきに、はら白きけだものふしぬ。こは、あら熊にやと、あないも、たましみを飛してにげしぞき、身に汗あへり。やをら、へツケナ井（天註——へツケナ井此名蝦夷の辞也）といふ塩やくあら磯に出づ、れいの掛樋に、はねつるべしてながし入る。

注 山田②七二頁の「べヶケナイ川（またはべヶケナイ）」の項に「宗谷本線豊清水駅のそばで、東から天塩川に注ぐ川の名。原名はべヶケンナイであつたらうか。べ・ぺヶン・ナイは「*Pe・peken・nai*」「*Pe・peker・nai* 水・きれいな・川」の意。（べヶレ（*peker*）の語尾の *r* は後に *nai* が来ると *ro* に変わる）。このべヶケンナイからべヶケナイになつたのである。」が該当するか。あるいは、山田③二五二頁の「ペンケ・ナイ（川下の・川）ペンケ・ナイ（川上の・川）」の説明が該当するか。

同月二十五日 田沢 ◎

きのふのごとに雨ふり、ひるの空の晴間に海べたにいで、はた山岸を行けば、古館のあと

はそこごと、おくえぞのむかしシヤクナと云ふ蝦夷の柵のあと、山の口はたけの名とのこりぬ。

同月二十六日 笹石 ☆

ここにある石のすがたの、笹(ざる)てふものに似たれば浦の名とし、其あたりにかきなれるいはほのしたつ方を、人のくどり出るによけんとて、又の名を潜坂といふといへど、むかし夷人のすみでシャルウシといひし。其同じ名夷国に今聞えたり〔天註——東の蝦夷の国のかやべのほとりにときはといふあなたシユシユベツといふところ、こなたにサル石といふ聞えたり。是もシャルウシの夷語のあやまれり〕。

注 山田①三〇頁の「サル^{sal} (霞原) シャルとも発音される。」が該当する。アイヌ語地名で頻出する地形名。

同年十月二十三日 松枝(浪岡) ☆

下十川といふ村(浪岡町)より福島(常盤村)、馬場尻、小屋敷、飛内(以上黒石市)を出て二双子(黒石市)といふ村にいらりて〔天註——登毘奈比といふ名蝦夷の辞にやあらん、松前の、ひんがしのいそやかたにもこの名聞えたり。耳曾子、馬渡志利も同じきにや〕、増館(浪岡町)といふ処に、としへたる木どもの生ひたてる、雪の、小高き処をゆんでに分る。

注 山田①六五頁の「トブシナイ Top-usi-nai 「竹・群生する・川」が該当するか。「白老から幌別にかけて竹が多い。」と説明されている。

「おくのふゆごもり」

6

寛政七年十月一日 石持(東通村) ☆

石持(東通村)てふ山里に祭る石神にまうでんとていづ。谷なかのみち、口頃の雨にぬかり行がたしとて、日名村より鹿橋(日名の更)をへて、そがひを行みちあり。こきもうすきも、なざけふかう染づる色のおかしうわけ入れば、里近き松山にかん籬あり、母衣崎明神と唱へ奉る〔天註——ちかきほとりの村に母衣部といふところあり、そのあたりの崎の名を保呂閉、あるはほろといふにや。保呂は夷詞にてはいはやの名なり、此こと、《蝦夷がいはや》といふ日記に委しうのせたり〕。

注 山田①二六七頁に東北のベツの例として、「保衣部(ほろべ)の場合は、アイヌ語の語法上ポロ・ベとは続かない。北海道にむやみにあつた幌別と同じように、ポロ・ベツ(大きい・川)なら形になる。下北の母衣部は周辺小流ばかりで、その川だけが川らしい姿だった。」とある説明が該当する。また、山田③一一九頁にも東通村野牛の「母衣部」に同様の説明がある。

「すみかのやま」

寛政八年四月十九日 幸畑 ◎

馬の神山、天狗森、あるは石家戸^{イシケト}とて窟^{イナベ}のふたつあり。三角とてよこたふには梨の木多く生たり。堀子山には蝦夷が城のありて、めぐりの堀のあとなど今に残れり。

「つがろのおち」

寛政九年五月十七日 金平(兼平) ☆

烏野(烏井野)、滝の口などいふところも過て、佐良寧以左可(天註——カラナ井、カルナ井にや。かるは夷人の島をいひナ井とは沢をいふ也)のながめいかがあらん、田井に水ひいて河もいとあさければ、塘をくんだり岩木川をわたりて、かの岡にのぼりて見やる。

注 山田②九二頁の「狩別川」の説明として、「猿払川の西の支流。明治の旧図ではカリベツ(カリ・川)と記す。〔永田地名解〕カリ(不_レ屈_レ曲がり(川))。源をエタンパクフ山に発し、ポロトーに入る。この地のアイス、カリの義を知らず。今はポロトー(ポロ沼)に入らないで、直接本流に注いでいる。なぜ廻る(カリ)といったのかは分らない。屈曲のひどい川だったからであろうか。」とあるのが該当するか。

「つがろのつと」

寛政十一年一月九日 小港(小湊) ◎

われきく、黒石のほとり、折戸、平六、井戸沢(南津軽郡平賀町)などのおく山里は、山子とて、杣人、山賤等が栖て、その業にのみ、をさなきよりたづさはりて、文字などもゆめしらざれど、をのれくがしるしといふものあれば、これもて、何村の誰れかれといふことをしれり。ふん月、むつきは、わきてものしける、その樽代てふものにも、しか、しるしせりとなん人の語りきと、あるしとともに語る。そのしるしは、蝦夷のトツバてふものにことならずと、その見しあらましを左にのす。(図省略)

「ゆきのみちおくゆきのいでわじ」

享和元年十一月五日 久田(岩崎村) ☆

久田(以下岩崎村)、正道尻を経て森山てふ磯山也(天註——左差内、正道尻。奈以或南比、もと沢といふ蝦夷辞、志利とは崎てふ蝦夷辞なり。むかしそれらが此あたりに住けんほどぞしられたる)。

注 山田③三四二頁「札内」の項、「原名はサツ・ナイ「乾く(乾いている)・沢」。行ってみると一面の火山灰地。沢形はあるが、大雨の時でもなければ、水は地面に吸い込まれて流れない。涸れ沢である。」が該当するか。あるいは、山田④四七頁「志寸川」の項、「徳富川の北側にある石狩川支流。旧図にシユシユナイと書かれている。シユシユあるいはスス(Shushu, susu)は「柳」のことであつた。この川の原名は、シユシユ・ウン・ナイ(Shushu-un-nai「柳・ある・川」)で、つめてシユシユンナイと呼ばれたであらう。それが志寸川の起源であつた。」に該当するか。

「にへのしがらみ」

享和三年六月十七日 大子内(大館市) ☆

行くほどもなう、志太加波良(下川原)といふやかたをふとて、己丑のあはひに姫箇嶽、寅卯に杜良の峯、午未に谷木橋(大館市八木橋)の村なる委刀離やまなど(天註——委刀離は蝦夷辞にや、かね山詞にや、狐人言葉にやあらん。母山てふ高岳のごとく、ところぐに多かる名なり)をちこちの雲ふかうしてや、あらはれたり。

注 イットリ、山田①④に無く、不詳。

同月二十三日 池内(大館市) ☆

池内といふ村(大館市)に出て〔天註―池内といふ名もと蝦夷詞にして、へつちな井てふことにして、津軽ヒラナ井の浦に在り。池内という名も多し〕口もくらくになりて、舟渡りして路たどるく、ふたたび扇田につきたり。

注 池内、へつちな井、山田①、④に無く、不詳。ヒラナ井そのものの地名解は、山田①、④に無いが、ヒラは「崖」の意であろう。

「おがのあきかせ」

文化元年九月十日 本内 ☆

本内の村にかゝる。坂中に桜木いと多くありて、梢もみちたる紅ふかし。きさらぎの花やはをよぶ、春も、とはまほしと行がてに過る。遠きむかしは蝦夷人やすみたらん。本内はポンナ井にして、ポンとはちいさやかなることをいひ、はた、ナ井は沢てふ蝦夷人の辞也。うべも、さゝやかにめぐりたる沢こそ山のあはひに見えたれ。

注 山田①一〇八頁に「また対のように考えられる二本の川がある時には、一本の方をポロ・ナイ(大きい・川)、もう一本の方をポン・ナイ(小さい・川)と対照的に呼んでいる場合も少なくありません。和人が入ってきてそれらを受け継いだのでありますが、和人には「バ」行音が何となく呼びにくい。それで清音に直して「ホロナイ」「ホンナイ」と呼ぶようになり、漢字を当てる時には、幌内とか奔内としたのでした。」と説明がある。

「みかべのよろい」

文化二年八月十五日 鳥越 ☆

高橋をわたりて笑内といふやかたのありけり。松前の西なる磯つたいに、可笑内といふが、江差の港に近くもありし。かく、おなじ名どもの多かる、何ない、かないてふ内は、もと沢てふことをいふ蝦夷の辞にして、もとも、むかしは住つらんかし。伏蔭(伏影)のやかたをよそに、中嶋金兵衛といふもとに休らひて、山ひとつ越れば根子てふやかたあり。この村はみな万多書とて、なべて冬かりをす猟人の宿、軒をつらねたり。この又鬼の長が家に伝ふ、巻物といふをひめり。彦火火出見尊より遠つみおやを引もて、それらがつかふ山辞のうちに、得ものゝ肉を幸肉といひ、米を草の実といひ、あるは、蝦夷詞もいと多し。

注 山田①一一二頁に「今、一例を挙げれば、秋田原の阿仁の山中に笑内という地名があります(該当地名)。漢字だけ見れば、随分変な地名だと思われるでしょうが、北海道で私の関係している工場には、敷地内を貫流しているオカシ・ペツという川があり、その川から工業用水を採っております。また追分節で名高い江差の北には、そつくり同じ形のオカシ・ナイがあります。o-kashi-dai(川尻に・仮小屋(がある)・川)なのであります。kasuまたはkasuは、狩りや漁業などのために一時泊まる小屋であつて、北海道でならば、おかしくも何でもない地名なのであります。

同年九月二十一日 田代(山本郡二ツ井町) ◎

屋の二階〔天註十二階を間下てふこと津軽路にてもはらいふ。さりければ、その近き山里

など此出羽にてもいへり」てふところには、^{ガンキハシゴ}雁木階子とて、蝦夷人のニキガリにことならぬものをかけ、ましろの木伝ふごとくのぼりぬ。

「かすむつきほし」

文化三年二月一日 葦代(能代市) ☆

ひんがしの蝦夷の国に斯黎黎部(しりべつ)あり、津軽の蒼社(青森)の坡河の川くまにも^{ウラガ}埒河あり。おなじ都賀呂(津軽)の十三の湊に近きあたりに多通■(田に比)の沼あり、三厩(青森県)の浦の西にも多通■(田に比)の碕あり。松前の陽に白神の磯あり、はた津刈路の深浦に近き磯山にも、しか白神てふ名もあり。かゝるおなじ名どもの多かるは、遠きむかしは、もはらこのあたりにも蝦夷人の栖家しつらんことこそ、うべもしられたれ。

注 山田①四四頁で、シリ^シが「地・山」を表すことから「尻別川(後志国の大川)シリ・ベツ^{Shi-pet}」の項に、「高処川などとも訳されるが、意味が少々はつきりしない。山の間を流れる川のこどらしいが、多くの実例の地形を調べて、そのシリの通訳を見出したものだと考えている。羊蹄山付近の山地を流れてから日本海に入る大川である。」とある。また、山田③一五〇頁に津軽半島「龍飛」の項で、「龍飛はアイヌ語だと古くから書かれて居るし、実際アイヌ語風の音だ。併し其の解釈は従来区々であつた。私にも自信がない。之からも論議されることであろう。」として、「北海道地名の中に同音のものがあれば、その地形と類似な場所が、地名の成因らしい処にあるか否かを探るのが良いが、北海道地名の中には、残念ながらこの同音が見当たらない。アイヌ語の訛りらしい音であることだけを記するに止めたい。」とある。「白神」については、山田①④に無く、不詳。

9

同年三月十日 増浦 ☆

増浦といふ村に来て与五右衛門といへるもとに昼の中宿をして、^{イツトリ}一通(入通)の村(天註——以登利は一通ともいひ、一鳥、一取などの方言にして、山の名にも村の名にも多くぞありける。蝦夷辞にてやあらん)をすぎ、神馬沢のやかたにいたる。

注 「イツトリ」、山田①④に無く、不詳。

「おがらのたき」

文化四年三月二十三日 野(能)代浜 ☆

かくて頂になりぬれば、木々ふかき中に破れたる堂あり。母^{トッ}爺大権現と唱へて葉(師=脱)仏をおけり。母也とは、蝦夷人の辞に霧をこそいふらめ、独立山のあれば毛夜とぞいふめる。蝦夷こと葉のうつり来て唱ふこと多し、みちのく、いでは人もはら、いと高うしてつねに雲霧のたべざるをいふに、うべも霧霞のころぞしられたる、此山の名いと多し。

注 山田③二九九頁に、「イワ」は「山」と訳されてきたが、どうも普通の山ではない。知里さんは神霊の山だと云っておられたが、私にもそう見える。どれも独立山で、目立つ山である。支笏湖の恵庭岳(イワトマ 頭が・尖っている・イワ)、サロマ湖に突出するボロ・イワ(大きいイワ)のような、ひときわ目立つ山である。小さいのではモ・イワ(小さい・イワ)で、全道に散在している。札幌の円山の旧名もモイワ、室蘭の

樂山（知利別のそば）はピンシユン・モイワ（浜の方の・モイワ）である。道内ですいぶんな数のイワを見てきたが何か共通点がある。多くは三角山か、盛り上がったような山である。今見ると平丘の場合もあるが、よく調べるとだいたいは目立つ独立丘である。内地で云えば神奈備山の姿で、いかにも神霊のまします山だ。」とあり、真澄の説明は現代の地名研究からは釈然としない。地名としては、モイワが転じた言い方がモヤとなつたろう。そして、この音が一般的に東北方言で霧や霞を指して言う方言「モヤ」と重なるために、真澄は「モヤ」を蝦夷語と考えてしまったのではないか。

「ひなのあそび」

文化六年七月一日 寒苗の郷（南秋田郡五城目町山内） ☆

飽田の寒苗の郷（南秋田郡五城目町山内）なる輪田といふ処に夜経よりありて、このあさびらき行空のいと涼しう、千町の面に風白う吹たちて〔天註——道奥に寒苗といふ名は昔紀に在り。そのこゑをのみ伝へ山内と書るにやとおもふのあまり、その辞を仮りてかいたりつ。山内は津軽の郡をはじめ、この飽田にもどころくにも多かる名也。〕かれもと那草は沢ちふ蝦夷の辞なり。此事《蝦夷の手風俗》といふ冊子に記したれば、こゝにはそぎて精しからじ。

注 北海道にはサンナイは二つしかないのに、北東北には夥しい数のサンナイ地名があることに關して、山田「サンナイ地名の謎」（『東北地方アイヌ語地名の研究』所収・八一〜九二頁）に、秋田県河辺郡の三内について、土地の古老から洪水の名所である旨を聞き、「どうやら東北でもこの三内は「（増水が）サン（出る）・ナイ（川）」という意味のアイヌ語地名だったらしい。治水工事がされる前を知っている人に会えたからよかつたのだつた。もう何年かして、前の時代を知らない土地の若い人に聞いたとしたら、洪水なんか知らないというのじゃないだろうか。」と説明し、北海道のサンケ・ペツ（Sankapet 下す・川）と同じ発想の地名であることを指摘している。

同日 山内（南秋田郡五城目町山内） ☆

山内の小川橋より渡れば、昼鹿といふ野はらに出づ〔天註——此野良の名をいひて広岡埜、或云蘇香野、日午蚊野、昼鹿野などもかいなし聞えて、こと処にもある名ども也。かうがへおもふに比留加奈為にや。なゐは良沢てふ蝦夷辞にもやあらんかし。似たる名は科野の国に赫嶮といふ名どころも聞えたりき〕、馬權神の祠あり。

注 アイヌ語地名でも、地形と離れたものは、案外分らなくなつたものが多い。例えばウエン・ナイ Wen-nai（悪い・川）は、道内にいたる所にあるが、何が「悪い」だったのか、忘れられたものが大部分であろう。これと対照的なピリカ・ペツ Pikapet（よい・川）だつて同様である。なぜ「よい」なのかはほとんど分からない。この方は「水がきれいだった」のだからと書かれることが多いが、もつともではあつても要するに推定説である。」とあつて、真澄の説明とほぼ一致している。

「おがのはるかぜ」

文化七年四月十五日 北の浦 ◎

天正元（一五七三）年癸酉の二月、秋田染川村神主、武内伊賀卿禰宣紀朝臣康宗の書る、からふみになずらへし一まきの冊子あり。あやしのすぢくさだかにも聞えねど、あらましによみとき見れば、このうらくに漁りしたる金野小鹿介といふ男あり。ある口油出山に分のぼりぬ、今いふ真山也。山の神出ませり。神のたまはく、いまし吾を此山の頂に齋ひまつらば、うみの子のやそつぎ、やそつぎもいや米えを守む。まづ此嶋にすむ蝦夷等をむけ平げ、この嶋のあるじともなるべし。

「つきのおろちね」

文化九年七月十九日 土佐野平（十三岱）ノ村、野田ノ村を経て東光庵 ◎

庵の前に塚あり、この春草の身まかれるをこゝに埋して、ほうたき棒とて粥杖めけるものをさしたるが、彩も雨露に落て、そのさま蝦夷の木幣てふものにつゆことならずして、蝦夷魂を祭る、おきつきにひとしかりき。

同月二十日 山の神溪 ◎ 〈参考資料の画像参照〉

山の神溪といふを分くいたれば、うべも大山祇の社ぞあなる。広前に数の鳥居のあるごとくに、木の枝の杈をひしくと投掛たり。又、大なるくろ木を三尺ばかりにきりて斧して皮うち立て、これをあまた社の■（土に旁）におしたた、とべばいらへて逆樹と唱ふ。蝦夷の木幣を略に造りなしたるにひとし、榊のこゝろもやありていへらんか。祠の内には、斧、鉞、剣などを木に作りて、いくらともなう手酬ケたり。こや、山賤らが山の神に、もと末をまゐらすのゆゑをもて、逆木をもや直く立て奉らんかし。

4.5 弘前学院大学シンポジウム 「アイヌ語・アイヌ文化と東北・東北方言 質疑応答

北原氏の基調講演、井上氏と大野氏の報告が終了したあと、来場者から質問を募り質疑応答が行われた。以下、その質疑応答を文字化したものを示す。



- Q. 北前船の船頭たちからイナウをアイヌから譲ってもらって航海の安全のお守りとして使ったのではないか。
- A. 土佐日記の唐に帰る船旅の途中で嵐にあうと海の神にフサを奉ると言い伝えられているということがある、それがイナウに相当する機能を持っているのかもしれない。このほかにも海上信仰の中でフサが使われるという事例がいくつか知られているようです。いま上野の文化財研究所にいらっしゃるヤマウチさんが△△のことを大変詳しくお調べになっているということです。持ち帰って共有したいと思います。ありがとうございます。
【北原先生】
- Q. 日本語は時代において言葉の変化、いわゆる若者語が存在するが、アイヌ語には言葉の変化はあるか。
- A. アイヌ語の中にもやはり年代ごとの違いというのはいつも起きていたようで、例えば昭和30年代くらい△△の聞き取りがされた時には、それは若い人の言葉、それは年配者の言葉、というように使い分けができることが話で判明したので、そういう記録がありま

す。それから例えば、日本語の幼児言葉、赤ちゃん言葉のようなごく幼い子供に話しかける言葉とか、そういうのもいくつか記録はあるようです。今は内容を復興しようとしているところなのですけれども、あまり文法的に限界なことをいうと緊張してしまって使えない。むしろそれよりは多少崩れた形であってもアイヌ語を使いたいという意志の方を育てていこうということで、私も率先してめちゃくちゃなアイヌ語を使っているということでございます。【北原先生】

Q. 20年代頃、縄文人＝アイヌと断定されていた記事を読んだ記憶があるのだが、どうなのか。

A. そういう言い方が昔からされてきたというのがあります。ですが現在の学問レベルではそんな簡単な話にはなっていない、あったとしても昔の議論だというふうに思います。

【井上先生】

Q. 東北北部におけるアイヌとエミシとの関係について。

A. これはおそらくアイヌ、エミシ、エゾという言葉をもつて3つ並べてそのように使われたんだと思います。歴史的に言えば、最初にはエミシ、そして中世ごろからエゾ、そしてアイヌだと思いますが、同じ人達を指しているかどうかということはわからないと思います。特に古代におけるエミシについては直接アイヌだけを指しているのか、あるいはアイヌではない人たちを含めてエミシと言っていた可能性もあるのではないかとということが、最近古代史とか考古の人たちから言われるようになってきました。専門外ですから私が言えることではないと思いますが、金田一京助先生などはエミシとアイヌを直接結び付けようということをしておられました。ちょっと無理があつて、おそらくその間に入るものがあつたに違いない、ただアイヌ語を話す人たちが北東北にかつていたことがあつたというのは地名の語る歴史としては事実ですので、それは間違いないことだろうと思います。【大野先生】

A. 縄文文化、縄文人との縁の関係について教えてくださいということで、これは簡単には話せないところがありまして、例えば今日本国籍を持つて日本人それもアイヌとかではなくてもともと倭人として自覚してらっしゃる方にも色々な体質の方がいらっしゃいますね、いわゆる顔立ちがはっきりしていらっしゃる方もいれば、どちらかと言うとあっさりした顔で、中国・朝鮮の方と体質がよく似ている、こういう方々もいらっしゃいます。でもみんな日本語を使って、日本文化をもつて生活していますよね。ですから体質と言葉とか考えとかと分けて考えなければいけない。縄文時代人についてまず分かることは体質のことですね。骨の形を見ると、こういう骨の形をしている、だからいわゆる縄文顔をというのでしょうか、濃い顔をした人達が、かなり古い時代に日本国土全体にいたというふうに言われる訳ですが、じゃあこの体質が似ている人たちがみんな同じ文化を持っていたかと言うとそうとはいえないわけですね。顔がそっくりだけれども言葉が全く通じないということだつて今の日本や世界全体を見ていけば、いくらでもあるわけです。私の考えとしては、おそらくアイヌ語と日本語は

縄文時代から全く別の言語だろうと。ですから当時の日本列島では、体質的には似ているけれども、違う言語を話す人々が複数いたに違いない、それからお互いに生活圏は離れていて、あの人たちと我々、と違う集団意識をもっていたというふうに考えるのが普通だろう。ですので縄文というのは、土器に付けられた縄目の模様のことですけれども、模様は共通していても土器の形は東西で全く違うということは以前から指摘されていることです。器の形が違うということは何を利用して生活しているかが違う。どんぐりのような硬い木の実を長時間煮沸する、それに適した土器もあれば、貝類を煮てスープにして食べる、そういう土器もある。ですから縄目が似ていることをもって全てひとつの文化だと捉えるのは少し拙速な話でして、ということで縄文人が今の民族区分で言うと誰になるのかと言うのは、その土地によってかわってくるだろうというふうに私は思います。ですので、アイヌも縄文時代から列島の北部の方に暮らしていた、その人々の伝統を受け継いでいることは間違いありませんけれども、別な人々の由来語ということでもよろしいでしょうか。 【北原先生】

【今村先生】

- Q. 3人の先生方にご意見としてお伺いしたいことがあります。現代社会は、ダイバーシティ、多様性がキーワードとなっている時代です。本日のシンポジウムのメインテーマとなりますのもその点でありまして、お互いがお互いをよく知り合う、それがなければやはりお互いがお互いを尊重し合うというようなことがやはり難しいのではないかと、という風に考えたからでございました。そこで本日のシンポジウムを通じてのお考えを、3人の先生方にひと言ずつお願いします。

【大野先生】

- A. 私、実は本業の方は、国語の方をやっておりまして南の琉球方言とかもフィールドなんですけど、いまは文化庁の事業ということで各地の方言がもう一度元気に次の世代に伝承されるようにという活動をしております。そういう意味でも地域的な多様性というのは、大変重要なものであるし、そして今日のテーマであるアイヌ語、アイヌ文化ということも多様性に関するひとつの象徴的な取組みとして頑張って進めて頂きたいなと考えております。

【井上先生】

- A. もともと文学作品というのは外部の言葉を取り込んで成立するものだというふうに思います。その中には謎であるとか、まったくわからない言語みたいなものが入ってきていて、それでひとつの文学作品が成立するというのが20世紀にわかってきたことです。今それが強く認められていると思います。そういう考え方でいくと、謎が全部わかっていくという幻想みたいなものはやめて、それぞれわからないようなところを、わからなくてもわかろうとする、そういうところから言葉の勉強をしていく、仕事の勉強をしていくというところに、それが今度翻って自分の文化だとか、自分の来歴みたいなものを相対化していくということになるわけで、そのような小説や芸術作品の持っている多様な言葉のありよう、謎な言葉を含めてのありようというのがまさに21世

紀に捉えられている社会の多様性といったもののいわば雛形になるのではないかと思っています。

【北原先生】

- A. 今日の私のお話のなかで、日本は今では単一民族であるという考え方が非常に広まっています。それはいつから始まったのかというと、明治に入って近代国家を作ったとにかく大きな集団を作ってほかの集団と対抗しよう、ほかの集団に圧倒されないように急いで集団を大きくしなければいけないという方向に進んできたのが今の日本の姿ではないかと思えます。ただ、例えば私の祖母は樺太西海岸育ちで、恐らく一番最初にアイヌ語を身につけた、そしてその次に日本語を身につけて、それから旅館に貰われて育てられましたので、中国人の人たちが良く来た。それから朝鮮半島出身の方も樺太には沢山暮らしていて、それぞれみんなちょっと話せるんですね。ですからそこでは学校で教わるのでなくともじっくり時間をかけてコミュニケーションする中で自然に言葉を身につけていくということが祖母の子供時代にはあったようで、恐らくそういうことが元々は日本中であったのだろうと、ですから、1足飛びに結束して大きな集団を作る、そのためには価値観をひとつにする、言葉をひとつにする、ということをしなくても、時間をかければ協調しあって生活していくということが元々人間達の暮らしの中にもあったはずで、ところが、近代化で国を強くするという中でひとつの価値観ひとつの言葉に結束するという方向に進んできてしまって、その結果いま少数派になる人々は生活しづらいということがあったり、あるいは中心から離れた言葉は圧倒されて廃れていくというような状況に置かれてきたんだというふうに思います。今は私は札幌で小学校で小学生とかと授業するんですけども、今の札幌の状況は逆に多様性をすごく説明しやすい。といいますのも、外国人がたくさんきていて、旅行者として来るだけでなく、就労者としてもたくさんの方がいるんですね。北海道大学も世界中の研究者が来ますのでその子供たちも小学校に通っている、そういうふうになると実は子供たちは多様な状況をもう当たり前を感じていて、改めて多様化の動きをこのまま活かしながら、しかし協調していくという道を探っていくということが私たちにはもうすぐそこに求められていることでもありますし、一昔前のことを振り返ってみればそれは決して難しいことでは無いんだろうというふうに思います。そういった形で多様性に向かっていくことが日本国内の様々な地域のことばとか、アイヌ語にもう一度価値観を求めて振り返ることにつながっていけばと思います。

4.6 弘前学院大学シンポジウム アイヌ語・アイヌ文化と東北・東北方言 来場者アンケート

次から、2020年1月11日（土）、弘前学院大学の礼拝堂にて、シンポジウム「アイヌ語・アイヌ文化と東北・東北方言」について、来場者のアンケートの集計を示す。回答127名よりいただき、有効回答数は127である。表の中で百分率で表しているところは、少数点第2位以下を四捨五入して計算した。

アイヌ語 シンポジウム アンケート 有効回答数 127

1. 回答者の性別

男性	女性
59人 (46.5%)	68人 (53.5%)

2. 回答者の年齢分布

	男	女	合計
10代	9人 (7.1%)	24人 (18.9%)	33人 (26.0%)
20代	2人 (1.6%)	7人 (5.5%)	9人 (7.1%)
30代	2人 (1.6%)	9人 (7.1%)	11人 (8.7%)
40代	5人 (3.9%)	3人 (2.4%)	8人 (6.3%)
50代	11人 (8.7%)	9人 (7.1%)	20人 (15.7%)
60代	13人 (10.2%)	11人 (8.7%)	24人 (18.9%)
70代	17人 (13.4%)	5人 (3.9%)	22人 (17.3%)
合計	59人 (46.5%)	68人 (53.5%)	127人 (100.0%)

3. シンポジウムの開催を知った媒体（複数回答可）（単位：％）

ポスター・チラシ掲示	友人・知人	ハガキ	その他
63.4	9.7	11.2	15.7

【その他の回答】

弘前市広報（14人）、インターネット（5人）、家族（1人）、新聞（1人）

4. シンポジウムの中で関心を抱いた演目（複数回答可）（単位：％）

【全体】

「アイヌ語とアイヌ文化」	「日本マンガ史における『ゴールデンカムイ』の位置」	「アイヌ語地名と菅江真澄」
46.1	25.9	28.1

【男女別】（単位：％）

	「アイヌ語とアイヌ文化」	「日本マンガ史における『ゴールデンカムイ』の位置」	「アイヌ語地名と菅江真澄」
男性	46.6	21.4	32.0
女性	45.9	29.5	24.6

【世代ごと】（単位：％）

	「アイヌ語とアイヌ文化」	「日本マンガ史における『ゴールデンカムイ』の位置」	「アイヌ語地名と菅江真澄」
10代	55.8	32.6	11.6
20代	44.4	33.3	22.2
30代	50.0	33.3	16.7
40代	36.8	31.6	31.6
50代	43.9	26.8	29.3
60代	41.3	17.4	41.3
70代	47.5	17.5	35.0

【結果】

- ・あらゆる世代の人が、「アイヌ語とアイヌ文化」「アイヌ語地名と菅江真澄」に興味、関心があることが分かる。
- ・男性と女性とではあまり大きな差が見られない。
- ・10～30代の若い世代は井上先生の発表に対する関心が高い。

5. 地域の方言を、保存・継承していく必要性（単位：％）

【全体】

大いにある	ある程度ある	わからない	あまりない	全くない
69.3	25.2	3.9	1.6	0.0

【男女別】（単位：％）

	大いにある	ある程度ある	わからない	あまりない	全くない
男性	71.2	25.4	1.7	1.7	0.0
女性	67.6	25.0	5.9	1.5	0.0

【世代ごと】（単位：％）

	大いにある	ある程度ある	わからない	あまりない	全くない
10代	45.5	42.4	9.1	3.0	0.0
20代	88.9	11.1	0.0	0.0	0.0
30代	54.5	36.4	9.1	0.0	0.0
40代	75.0	25.0	0.0	0.0	0.0
50代	85.0	10.0	5.0	0.0	0.0
60代	79.2	16.7	0.0	4.2	0.0
70代	77.3	22.7	0.0	0.0	0.0

【結果】

- ・どの世代も、約9割の人が地域の方言を保存・継承していく必要が「大いにある」「ある程度ある」と回答している。
- ・地域の方言を保存・継承していく必要が全くないと考えている人はいない。
- ・男性と女性とではあまり大きな差が見られない。

6. 今日のイベントで良かったと思う点（複数回答可）（単位：％）

テーマ・講演	全体	関連書籍等の展示	その他	なし
49.7	36.5	12.0	0.0	1.8

7. 今回のプログラム全体のご感想・ご要望を聞かせてください。

【「アイヌ語とアイヌ文化」について】

- ・本物のアイヌ語を聞いてうれしかったです。（10代・女性）
- ・えぞ語の境界線が知りたくなった。削りかけの祭具が世界共通の文化だと分かった。（20代・女性）
- ・北原先生のお話おもしろかったです。また聞きたい。（30代・女性）
- ・アイヌ文化と東北の文化を広い地域の中に位置づけ、相互について、北原先生のお話が参考になった。アイヌ文化のとらえ方、見方が少しかわった。今日的課題についても次回伺ってみたい。（50代・男性）
- ・本来の歴史で北原先生の講演は大変意味があり初心者にも分かり易かったです。（50代・男性）
- ・時間が足りない気がしました（残念）。その中でも興味深くお話を聞きました。アイヌ文化は継続させてほしいと思いました。北原先生の冒頭のアイヌ語でのあいさつは切れ目がなくどこで息継ぎをしているのか不思議な感覚を覚えました。（とてもやさしい）先生の声もよかったです。イナウ？逆木が岩木山のお山参詣にもっていくものに似ていると思いました。（60代・女性）
- ・北原先生のアイヌ文化の解説は、大変興味深く聴かせてもらいました。（60代・男性）
- ・言語にとどまらず衣食住や宗儀・文化が、東北に限らず、環太平洋的拡がっていること

におどろき！（70代以上・男性）

【「日本マンガ史における『ゴールデンカムイ』の位置」について】

- ・『ゴールデンカムイ』をキッカケに狩猟免許を取り、今年から狩猟をしています。そして、全国同じような若い女性がたくさんいるようです。狩猟文化、アイヌ、明治文化等々、『ゴールデンカムイ』が今の若者に与えた影響はすごく大きいと思います。もっと色々とくわしくききたい内容ばかりでした。ありがとうございました（30代・女性）
- ・アイヌについて、詳しく、知ることができました。『ゴールデンカムイ』が好きですが、その魅力がさらにわかって、楽しかったです。フチの言葉が、わからずとも、なんとなく意味を理解した杉元でしたが、アシリパの気持ちは理解できなかった。言語の多様化と、ちがう言語でも気持ちは通じる。同じ言語でも気持ちは通じない。それを表した、あのシーンに考えさせられました。あまり文化を守る、継承したいという気持ちがなく、キロランケやウイルクが、命をかけて民族を守りたいという気持ちがわかりませんでした。しかし、今回のシンポジウムに参加して言語や文化は多くの知恵や工夫の元、築き上げられ、伝えられてきた財産でもあると知りました。ありがとうございました。

（30代・女性）

- ・『ゴールデンカムイ』を取り上げてくれて楽しかったです♡（30代・女性）
- ・『ゴールデンカムイ』は読んだことがなかったが、今回の講話を聞いて、読んでみようかなと思いました。北原先生のような研究者は、このマンガをどう評価するのかな？聞いてみたいかなと思いました。専門を追求している研究者の方々のお話を聞く機会をありがとうございました。（60代・女性）
- ・ケリがアイヌ語からということではびっくりしました。子供の頃、ケリと言っていました。楽しかったです。（70代以上・女性）
- ・アイヌ語を初めて聞いた。津軽弁とは全く違った。（70代以上・女性）

【「アイヌ語地名と菅江真澄」について】

- ・3年程前、福岡の大学で琉球学のイベント・シンポに参加したことがあります。個人的にオキナワに興味があるのでつながっていたらとわくわくしています。貴重な機会を得て光栄です。ありがとうございました。初めて学院を訪れることができました。周りを散策してみます。感謝します。（50代・女性）
- ・地名にこんなにアイヌ語が関係しているとは思いませんでした。あっという間の時間でした。（60代・女性）

【その他のご感想】

- ・今までアイヌ語やアイヌ文化については地理や歴史の授業でしかふれてこなかったのが今回のシンポジウムに参加できてよかった。（10代・男性）
- ・とても楽しく、興味深い内容だった（10代・男性）
- ・資料も多くあり、内容に満足できた（10代・男性）
- ・教科書に載っていない、アイヌ文化について詳しく知ることができた。（10代・女性）
- ・とても興味深い内容ばかりで面白かったです。（10代・女性）
- ・もともと知っていることも、はじめて知ったこともあって、とても興味深かった、また

- このような「アイヌ」についてのシンポジウムを開いてほしい。(10代・女性)
- ・アイヌ文化について多くのことを知ることができました。(10代・女性)
 - ・私たちにとって身近な東北方言とアイヌ語についてなど、このような機会がなければ知らなかったことを知ることのできる良い機会になりました。(10代・女性)
 - ・北海道は身近にあるが、気にしたことがなかった。しかし、今日の講演で興味をもった。
 - ・アイヌ文化というものを知る良いきっかけになった。(20代・男性)
 - ・言語や現代文化など、様々なテーマからアイヌと東北を考えることができ良かったです。(20代・男性)
 - ・アイヌ語アイヌ文化についてのお話を聞いて、とても勉強になりました。(20代・女性)
 - ・3つの演目にそれぞれ関わりを感じ、歴史や全体の流れを知りつつ、現在に至るまで、どう引用されたり、捉えられているのかがおおまかな一連の流れとして分かり、とても興味深かったです。(20代・女性)
 - ・勉強になりました。アイヌ文化非常に興味深いです。(30代・女性)
 - ・初めてこちらの大学のシンポジウムに参加しました。とても興味深く、たのしいシンポジウムでした。(40代・女性)
 - ・これほどの人が集まることへの驚き、それが一番です。結局私たち日本人は何者なのかという興味の深まりなのだろうなど。(縄文文化とアイヌの関係など) (50代・男性)
 - ・とても興味深く、楽しかったです。次回もぜひ参加したいです。(50代・女性)
 - ・普段聞けないような話を聞いて、アイヌの事をもっと知りたくなった。(50代・女性)
 - ・知りたかったことを、たくさん知ることができました。それぞれの先生の研究にも関心を持ちました。ありがとうございました。(50代・女性)
 - ・ありがとうございました。(50代・女性)
 - ・すばらしい講演、報告でした。この内容であればもっともっと多くの時間をかけてじっくり聞きたかった。(60代・男性)
 - ・とても為になった。(60代・男性)
 - ・内容が豊富で2日間位かけてもよいお話だった。特に関心のある訳でもなかった私が「目から鱗」だった。迷ったけれどきてよかった。(60代・女性)
 - ・OK (70代以上・男性)
 - ・特にありませんが、ありがとうございました。(70代以上・男性)
 - ・Very good (70代以上・男性)
 - ・シンポジウムを次回にも続けて行ってほしい。ありがとうございました。(70代以上・女性)

【ご要望】

〈時間について〉

- ・すべての演目をもっと詳しく聞きたいと思った。(10代・男性)
- ・最後の方に時間が足らず、急ぎ目になり、分からない部分があったため、時間に余裕が持てるようにした方が良かったと思った。(10代・男性)
- ・基調講演が長引いてしまったために、後の2つの報告がおざなりになり、理解しづらかった。声が小さく、聞き取れない箇所がいくつかあった。(10代・男性)

- ・全体的にかけあしで、内容がうすかった。(20代・女性)
- ・北原先生の話をもっと時間をとっていただきたいかった(たくさん人数を出すより、1人の話を深く聞きたい)、一般市民でも聞けるセミナーを開催していただき、ありがとうございます(30代・女性)
- ・2時間は短かった。倍位あっても良かった(40代・男性)
- ・それぞれの先生方のお話をもっとじっくりお聞きしたかったです。駆け足では勿体ないです。あと、とても暑かったです☹️とても興味深く、時間があっという間でした！また開催して下さい！(40代・女性)
- ・3回にわたってくわしくやった方がよかったですのではないのでしょうか。このテーマは、いいのですが。全部が中途半端でした、会場があつい、くさい、資料の字が小さくて見えない(40代・女性)
- ・構成上妥当でやむを得ないが、150分で3人はやはり厳しい。(講演・報告)
(50代・男性)
- ・2時間でおさめるのは無理がある内容の濃さ、全体の時間をもっと。とってもよかったですと思います。(50代・女性)
- ・時間が足りないようでした。またの機会を楽しみにしております。(50代・女性)
- ・時間が不足でした。(60代・女性)
- ・大野先生の時間をもっととれていれば良かったと思いました。(60代・女性)

〈会場について〉

- ・礼拝堂の柱の裏にイスを置く必要はないと思う(10代・男性)
- ・音声聞き取りづらくありましたがスクリーン等見やすかったです。(20代・女性)
- ・一番うしろにいたので、前の人の頭が目に入るので、パワーポイントをあと少し1mくらい高くしてほしい。少し暑すぎたと思います。(60代・男性)
- ・参加者が多くてびっくりしました。こんなに知りたい人がいるとはさすが弘前。会場に空調がないのか熱いし、見苦しかった。北原先生のお話がやはり興味深かった。広範囲なので、著書などでじっくり学びたい。(60代・女性)

〈その他〉

- ・シンポジウムの内容とは違いますが、資料はA4で両面コピーの方がよかった。(せまい空間で、持ちづらく、バタバタとしている人を見受けられた)、会場が暑かった。
(30代・女性)
- ・今回の内容は『地域学』の次号に掲載していただければと存じます。(50代・男性)
- ・またアイヌやって下さい(50代・女性)
- ・今年、4月にオープンされる白老の国立博物館の案内パンフレット、とても有難い。見学に行きたいです。(高齢者割引の記載が無いのが、とても残念です。)シンポジウムと関係ないことで申し訳ございません。(60代・男性)
- ・青森県の方言は、津軽弁・南部弁はなぜ言われるのか？どこの場所で区別されているのか？(60代・男性)
- ・アイヌが和人によってどのように追い詰められて行ったのか知りたかった。

(60代・男性)

- ・又、このような機会があったら、参加させて頂きたいと思います。黒石まつりで台湾の先住民の宣伝をしたりワッペンを売ったりしていました。ウポポイの施設は大変、期待していますが学生さんや一般のボランティアを使って、是非弘前でもいかがでしょうか？(60代・女性)
- ・マイクが響きすぎか。よく聞き取れないところもある。もう少しゆっくりと話してもらえたらありがたい。(70代以上・男性)
- ・新発見多し、マタギ語とアイヌ語起点？和人とアイヌ人の共同生活について、今後掘り下げた発表がほしい。時間がなく途中退席ゴメン。(70代以上・男性)
- ・地域の方言は文化であり、文化の継承は是非とも必要。(70代以上・男性)
- ・現在は北海道にどの位の方々が住んでいるのだらうと思います。(70代以上・男性)
- ・1. 継承していくことの大切さを痛感しました。
- ・2. まんがを読む、見るのが無かった…だが、奥深さもありと知った。
- ・3. 「ゴールデンカムイ」を知らない人はいないでしょう」とあったが…知りませんでした。もっともっとゆっくりゆっくり「講演」をと感じました。時間がほしかったです。まとめの多様性—これから考えていきます。深くみつめつつ…。(70代以上・女性)

弘前学院大学 シンポジウム

アイヌ語・アイヌ文化と 東北・東北方言

日時 2020年1月11日(土)
13:00~15:30
会場 弘前学院大学 礼拝堂
(参加費無料・申込も不要)

アイヌ語とアイヌ文化の基幹を、東北との関係性から、さらに海峽の危機にある言語としてのアイヌ語に対する保存と継承、移動について考える機会をいします。
ふるまひ参加のぞい。

【弘前学院大学国際語・国文学会事務局 主催】

編者説明「危機言語としてのアイヌ語」 文学部 教授 寺村かほる

基調講演「アイヌ語とアイヌ文化」
北海道大学アイヌ・先住民研究センター 准教授 北原次郎次氏

報告1「日本マンガ史における『ゴールデンカムイ』の位置」
弘前学院大学 文学部長・教授 井上橋一氏

報告2「アイヌ語地名と菅江眞澄」
岩手大学教育学部 教授 大野眞男氏

主催：弘前学院大学日本語・日本文学科
共催：弘前学院大学国際語・国文学会、地域社会文化研究所
文化庁及熊鷹賞「民族方言の魅力」小売500の小売500・参事長の方言2019
後援：参事長教育委員会、弘前学院大学

申し込み終了後に送付いたしますから
申し込み要文化財
弘前学院大学国際語 特別開講
15:30~17:00

【お問い合わせ】
弘前学院大学国際語
〒030-0277 青森県弘前市地町13-1
TEL. 0172-24-6211 (担当：佐藤 成也)

5. 南部弁さみっとin釜石



5. 南部弁さみっと in 釜石

2013（平成 25）年度の「第 1 回南部弁の日」の企画の中で、岩手県の南部弁も同じ南部弁だけど、どこまでが南部弁なんだろう？、どこで違う方言になるんだろう？、岩手県の南部弁とは、どんなふう似ているのだろうかなど、そういえば・・・という疑問が寄せられ、岩手大学の「おらほ弁で語っぺし」（事務局：岩手大学・大野眞男）と協力して、2014 年度から、南部弁同士の交流が始まった。

今年度も 12 月の最初の土曜日である 12 月 7 日（土）に、八戸での「第 7 回南部弁の日」に続き、2020 年 1 月 25 日（土）に、震災後建設された釜石市民ホール [TETTO] において、漁火の会と共に「おらほ弁で昔話を語っぺし南部弁さみっと in 釜石」を共催した。

釜石は、東日本大震災の折には、大変な津波被害を受けた地である。そこで活動する「漁火の会」（会長：須知ナヨ氏）のみなさんとは、八戸で行っている「南部弁さみっと in 八戸」に 2014 年においでいただいてから、南部弁つながりのご縁を結び、この共同事業が継続している。今年度は、八戸童話会の柁谷伸夫氏・木下勝貴氏の南部弁のお二人と、津軽方言の語り部である千葉涼子氏・三橋光子氏も参加した。青森県の語り部たちは、共に歩む語り部同士、交流が深まり、釜石での語りに厚みが出た。

今年度は、小学生や、遠野の語り部が新たに加わって語りを披露した。また、会の終了後、語り部交流会の時間を設けて、語り部同士、胸襟を開いて交流ができた。

1. 開会の挨拶 大野眞男氏（岩手大学）

2. 親子語り 須知ナヨ・安部三枝

「頭の大きい男」

3. めんこい小学生による昔話

瓦田莉桜「飴買いゆうれい」

4. 漁火の会の語りでよみがえる

ふるさとの昔話

高橋タミ「海の水は何故辛い」

菊池有美子「糠餅と地藏様」

和田京子「小川の山姥」

千葉まき子「白蛇伝説」

磯崎彬子「八雲神社伝説」

藤原マチ子「芍薬娘」

5. 童歌 「丸るい卵」

6. 遠野の語り

田代明子「二度咲く野菊」

堀切初「遠野三山代り木」

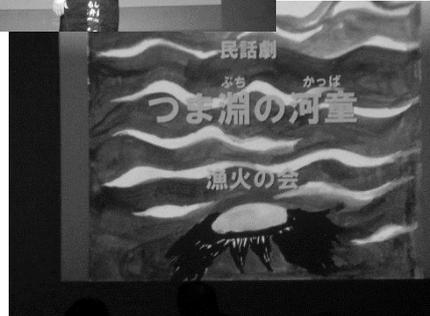


7. 青森からのゲストの語り

- 木下勝貴 「ねずみ穴に入っ爺様」
 榎谷伸夫 「殿様とそばはっと」
 「メドツの宝」
 千葉涼子 「ホラ比べ」
 三橋光子 「津軽の昔コ」



8. 釜石の民話劇 漁火の会 「つま淵の河童」



9. 閉会の挨拶 今村かほる

南部弁サミットin釜石▶

おらほ弁で 昔話を語っぺし

釜石 漁火の会の語りでよみがえる
「ふるさとの昔話」

めんこい小学生による昔話の語り

青森県からのゲスト
(八戸童話会 榎谷伸夫さん ほか)

民話劇「つま淵の河童」

とき
2020年1月25日(土)
14:00~16:30(開場13:30)

ところ
岩手県釜石市大町1-1-9
釜石市民ホール
TETTO〔テット〕ホールB
【交通案内】JR釜石線「釜石駅」・三陸鉄道
南リアス線「釜石駅」より徒歩10分、車5分

入場無料

主催：文化庁事業「おらほ弁で語っぺしプロジェクト・
次世代継承編2」(岩手大学)
共催：釜石市・「発信！方言の魅力 語るびや語るべし
青森県の方言2019」(弘前学院大学)

作：望月奈都子氏

おわりに

方言で被災地のみなさんを元気づけ・勇気付けることをするために、方言研究者には、地域の学生にはどんなことができるのだろうか？研究者には研究しかできない。その限界を見極めつつ、そこから一步飛び出して、研究を研究者だけでなく、地域の皆さんを一方の主役として行うことはできないかと考えるようになった。そのひとつの答えとして、地域のみなさんの期待を受けた方言イベント「南部弁の日」を行い、今年度で7回を迎えた。自分たちの方言に誇りを持ち、子や孫の世代に語って聞かせる姿が、方言を昆虫採集のように単語を収集し、並べて満足するのではなく、使えることばとして継承していくことにつながっていくことを願ってはじめてこのイベントに、小学生・中学生・高校生や、語り部を目指す地域住民のみなさんが出演してくれている。この会をきっかけとして、語り部同士の友好関係が築かれ、楽しみながら活動を広げていける絆ができた。

2015年度に立ち上げた青森県の語り部ネットワークは、順調に活動している。こうした社会教育としての方言教育として、もっと広く一般に開かれたものを目指し、2014年度から、「方言でつながる」を目標に、津軽弁・南部弁（青森県）だけでなく、岩手県の南部弁も含め活動してきた。その一つとして釜石の「漁火の会」のみなさんとの交流がある中で、ラグビーワールドカップが開かれ、人々に感動を与えた。しかし、また台風の被害を受けてしまったことも記憶に新しい。釜石の会は、漁火の会のみなさんの「方言が好きだ、楽しい」という気持ちと、会場のみなさんの温かい受けとめ方もあって、とても楽しい会となった。今村は、最後のご挨拶で「方言でなかったら、こんない腹の底から笑えたでしょうかね？」と会場に問うたところ、拍手でみなさんが答えてくださった。

今年度新たに取組んだ危機言語であるアイヌ語とアイヌ文化の保存と継承について、学び、自分たちの文化・ことばが大切なものと同じように、他の文化・言語が大切なのだという気づきにつながった。会の終了後、多くの期待・要望が寄せられたことは既に記載したとおりである。学ぶということの大切さが身に染みだ。

震災後に、先祖から受け継いだ大切なものであり、自分たちの生きた証としての方言を、どうやったら残せるのか、力を貸してほしいと、最初に地域の方からお聞きしてからもうすぐ9年が経とうとしている。方言が人々を元気にしている様子を見ると、研究者としてなすべきことのひとつに、今、方言をきちんと記すことと、その方言を伝えるものとして次の世代に受け継ぐ工夫の両方が必要だと深く感じる。研究者としてなすこと、研究者として地域のみなさんや先生方を支援していくこと、地域に有用な学生を送り出すこと、どれも大切な取り組みであることに間違いはない。

最後に、心からの信頼の下、常に励まし・お力を貸してくださった皆様方に心から感謝申し上げます。今後も地域のみなさんと共に歩めることを誇りとして、精進していきたい。

弘前学院大学 文学部 今村 かほる

令和元（2019）年度 文化庁 被災地における方言の活性化支援事業

発信！方言の魅力

語るびゃ・語るべし青森県の方言 2019 報告書

令和2（2020）年2月17日 印刷
2月21日 発行

編集・発行：弘前学院大学 文学部 今村かほる

印刷：有限会社アサヒ印刷

〒036-8577 弘前市稔町 13-1 弘前学院大学 TEL 0172-34-5211（代）